

黒上正一郎先生のうた・たと・消・息

社団法人 国民文化研究会

聖徳太子維摩經義疏

黒上正一郎譯

自行外化を憶て以て心を
調伏すと雖も若し自他の
二境を存して修行せば
則ち修する所廣からずして
物と其の苦樂を同じく
すること能はず。故に

勸めて應に著を離る
べしと明すなり

若し天下の道理を論せ
ば悪を遣り善を取るは
必か己れに始まりて方に能
く人を勸む。若し自ら能
くせざれば安んずるを
勸む

上は、聖徳太子のお言葉を黒上先生が色紙2枚に昭和4年ごろ墨書されたもので、現在国民文化研究会の会議室に掲げられてある。なほ、お言葉については、黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の52頁、68頁、88頁に先生の御説明がある。

刊行のことば

社団法人 国民文化研究会 理事長 小田 村 寅 二 郎

(亜細亜大学教授)

この書は、今から半世紀をさかのぼる昭和五年に、三十一歳の若さで亡くなられた一青年学徒・黒上正一郎氏が、生前に師友に送られた和歌と消息とを編したものである。

黒上氏は、その短い生涯での晩年四、五年間に学外の人であられながら、旧制第一高等学校の中に「一高昭信会」を、また、旧制東京高等師範学校の中に「東京高師信和会」を創立せられ、その会員生徒たちに、日夜を分たぬ教導を続けられたが、胸部疾患に見舞はれて独身のまゝ早逝された方であった。御実家（四国の徳島市）で療養中も、絶え間なく東京の前記の教へ子たちに、あるいは手紙で、あるいはハガキで、心のこもる激ましの便りを送り続けられたのである。

さほど年齢の違はない一高生や東京高師生に、将来の日本を背負ふに足る志と情操とを養はせるべく、黒上氏がいかに懇切かつ情意に満ちた指導をされたか、その間の消息を知るために、本書に収録し得たうたと消息は、十分に役立つことと思ふ。さうした観点から、右の期間のものを中心に年次を追つて編集させていたゞいた。

なほ「一高昭信会」の道統を受け継いで今日に至つてゐる「社団法人 国民文化研究会」の私どもは、黒上

氏の遺著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』（同会刊、A5判三〇四ページ）の一書を、*「学問のしるべ」*とも、また*「道のしをり」*ともして座右から離さず、励んできたので、その著者である方を黒上先生といふ呼び方で敬仰してきた。従つて本書の表題も「黒上氏」ではなく、「黒上正一郎先生のうたと消息」と題させていたゞいた次第である。

本書には、あはせて梅木紹男うめき しょうをさんのうたと消息をも収録させていたゞいた。梅木紹男さんは、黒上先生と同郷の親友であられたが、一高に進み、学内の「一高瑞穂会」の一員となられるに及んで、黒上先生を同会に招き、講演をされる道を拓いた方であつた。やがて黒上先生と梅木さんのご努力で、黒上先生を師としての「一高昭信会」が創立されることになるが、梅木さんは後に東大に在学中、胸部疾患に斃れ、黒上先生よりも一年半前に早逝なさつてしまはれた。

この梅木さんと黒上先生との交りは、まことに類のないほど濃こやかなものであり、副島羊吉郎氏（その昔東京高師生時代に黒上先生の教へをうけ、後に佐賀大学教授）によれば、黒上先生は「僕は友情を梅木さんから学んだ」と言はれたほど、お二人の交友は、まさに篤信につらなる友情であつたと言へよう。お二人の間で培はれていつた深い友情は、そのまゝ黒上先生から一高昭信会・東京高師の生徒たちに注がれていつたのである。このやうなお二人の間柄であるので、黒上先生を偲ぶにあたり、合せて梅木さんのものも代表的な論稿とともに収録することにした。

なほ、本書に附録として次のものを収録させていたゞいた。その一つは、黒上先生の御慈母——黒上住恵さま——のお便りである。黒上住恵さまは、御愛息——黒上先生——亡きあと、一高昭信会に次々に入会し

て来る一高生（黒上先生には御生前にお目にかゝる機縁のなかつた人たち、私もその一人であるが）に、亡き御子息の志を継いでいたぶきたいとの深い祈にも似たお気持ちで、お心こもる巻紙・墨筆の長いお手紙を沢山にくださったので、先生の御母堂といふ方のお心を偲ぶために、そのいくつかを収録させていただいた。附録の第二には、黒上先生没後に、先生と梅木さんを追慕して記されたいくつかの文章を掲載した。これは先生と梅木さんの生前のお姿を少しでも鮮明に浮び上がらせることが出来れば、との念願によるものである。

なほそのあとに、いま一つ「黒上君之碑」と題する碑文の全文を「書き下し文」にしてご紹介させていただいた。この碑は、御郷里徳島市の市内にある清水寺境内の、御墓所の傍らに建てられてある丈余の石碑であるが、その碑文は、若くして逝かれた一青年学徒——黒上正一郎氏——に対して、郷土の先輩知友が、いかにその死を悼まれたかが偲ばれる碑文と思はれるからである。御墓所の石碑の写真をあはせて掲載した。

本書の編集作業は半ヶ年余に及んだが、この間終始、長内俊平さん（本会理事
開発電子技術
（本会理事
））が中心となつて遺文・遺歌を収録のうへ、苦心して編集に当られ、磯貝保博さん（本会理事
（本会理事
））が、編集、割付、写真製版に協力して下さつた。いづれも御多忙の中で、どれほどか時間をかけて下さつてのことであり、心から深謝申上げる次第である。国民文化研究会の若い方々に、本書を一日も早く見せてあげたい、とのご一念が、この編集を支へた唯一の力であつたやうである。

そのほか、夜久正雄氏から所蔵してをられた未発表の貴重な資料の御提供をうけたのははじめ、副島羊吉郎氏、木村松治郎氏から古資料のお知らせをいただいたこと、磯貝さんを助けて講談社の藤井貢さんがよく手伝つて下さつたことなど、その他多くの方々のご協力をいただいたことも忝いことであつた。

本書に収録した大部分のものは、昭和十五年に「一高昭信会」の延長として生まれた「日本学生協会」出版の四六判の小冊子『黒上正一郎先生遺歌集』（二〇二ページ）を中心に、『月刊・親鸞と祖国』、『同・青人草』、『同・人生と表現』、『同・原理日本』、『同・伊都いづの之男建をとたけび』、『若竹文庫』所載のものに拠つた。それぞれの文の末尾に出典を記させていたといふ。

さいごに本書は、黒上先生の『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』を読まれる方々には、必ずやご参考にならうと期しながら、この編集を終へたことを付言させていたゞき「刊行のことば」の筆を擱くことゝする。

昭和五十七年七月一日

目次

口 絵

刊行のことば

一、黒上正一郎先生のうたと消息……………1

大正時代（二十一歳から二十七歳まで）……………2

昭和二年（二十八歳）……………29

昭和三年（二十九歳）……………46

昭和四年（三十歳）……………72

昭和五年（三十一歳）……………113

二、梅木紹男氏のうたと消息……………131

三、附 録……………149

(一) 黒上正一郎先生の御母堂（黒上住恵さま）からのお便り……………150

(二) 追慕の記―水野龍介（昭和四年）・重松鷹泰（同十年）・副島羊吉郎（同十二年）……………159

(三) 「黒上君之碑」の「碑文」他……………171

黒上正一郎先生のうた・たと・消・息

大正九年——二十一歳——

あひまつりしその日よ——徳島から——(大正九年六月二十七日)

あひまつりしその日よ空はうすぐもり大比叡がねはほのにけむりし
みことばにつなかりを得て一信海にわれも入らんとおもふよろこび

このぞみわれはもてりと思ふごとわれ生くらくのこゝちするかも

あゝ一信海われもつながらんと求むるこゝろそのこゝろにこそわれは生くるか
ありともへどなきかとおもふ悲しみよおなじなげきをおもひたまふらん

——『親鸞と祖国』誌(大正九年八月号)所載——

编者註 『親鸞と祖国』誌は当時京都で刊行されてをり、井上右近先生を中心に橋川正氏が編集を担当してをられた。黒上正一郎先生の右の和歌は、橋川編集長宛に出された長文書簡の末尾に記されてゐたものである。

磯^し長^{なが}参^{まゐ}籠^{かご}

一

御墓山の茂木がもと

しづかなる夜半なりき

御廟のまへに蟲なきしきる

おほまへの砂地にぬかづきまつり

念ひまつる太子のみ言

恋慕渴仰つきざる思ひの
わが胸ぬちにみちわたりしか

二

陵のおほまへに燈をともし
憲章を誦しまつり夜は更けぬ

久遠劫よりこの世まで

あはれみましますおほみめぐみよ

念ひまつる我等がこゝろは

和国の教主聖徳皇と

その一語にきはめしめらるゝか

三

彼海非本とのたまひし

祖国憶念と

共にこれ凡夫とおほせましゝ

内的平等感と

そを統べしむる帰命三宝の原理を示したまひし

十七憲章の和の、また片岡山のみうたの

悲痛なることばのリズムよ

いま胸のうちに生きしめらるゝ

四

その夜ひろげし憲章のすりぶみは

君がたまひしそれなりしか

そのみこゝろにつらなりまつる

そはまた通ふ、古への名もなき民の

「日月輝を失ひて天地既に崩れぬべし

今より以後誰をか恃まんや」とふ

悲痛なる言霊よ

あゝその不思議の開展よ

松本彦次郎先生にあひまつりて

あひまつらん時はちかづく汽車まどに雲かゝる比叡を仰ぎみるかも

——『親鸞と祖国』誌（大正九年十月号）所載——

汽車降りてみ家にいそぐこの大路けむりて朝の山はみゆるも

うつしよにかくあひまつるよろこびにいくたびも君とかたりまつりし

大谷の御廟の橋を聖徳皇のことかたりまつり君とまゐりし

一信海を求念しまつるこのころそこにみ言をきまつりしか

みことばをきまつりつゝわがゆきしその鳥辺野の小路うかびく

たちならぶ諸天の像にかまくらの国民的緊張をかたりたまひし

しめしたまふ鏡のみ影みまつりてつきぬいのちのながれをおもふ

とほざる京の町々おくりみてまたあひまつらんときをおもひぬ

はろばろとくだりたまひしみちにしておもはずもわがあひまつりけり

薬師寺にて

いろさびし丹ぬりの古塔そのもとの草原に秋の蟲なきしきる

河内より大和へゆきし日

秋の風二上山にゐる雲のとほきひかりをながめつるかも

あひまつりしその日をおもひ河内なる岩屋の山を今日こゆるかも

今窓にて

くれかゝるうら山あたり燈のつきぬをぐらきまどにみたよりするかも

○

きまさん日共にのぼらんとわがおもふこのうらやまのくれかゝるかも

——『親鸞と祖国』誌（大正九年十月号）所載——

櫨紅葉はじもみぢ

裏山は櫨紅葉して秋深く病みてひさしき窓にあるかも

今朝の空うら／＼晴れて裏山の紅葉さやかに目にうつりくる

いたゞきしこのすりぶみを病み臥せる小床によみて更かしつるかも

ほの／＼とあけわたれば裏山に今朝はさやけき鳥の声する

裏山に夕ゐる雲のうすひかりしみ／＼秋の思ほゆるかも

——『親鸞と祖国』誌（大正九年十二月号）所載——

大正十年——二十一歳——

「便り」——徳島から——（大正十年三月六日）

桃水和尚に關することが度々表はれてきました、それは良寛、芭蕉、一茶とうつりゆく趣味の低徊に外ならぬものであつて、我等にとつては排すべき後退的隱遁思想であると存じます。『日本及日本人』の伝贊を一読して「知て信仰のもの多きゆゑにまたすてゝ撰州池田の辺に栖れしに」といふがごとき、「女人の罪重きと云は恋慕の心を第一とす。世間の孫子はさもあるべきに、何の愛情もなきこなたを再び対面したるとて

何の益がある」といふ言葉のごとき非心理的なる盲ひたる現実観を讃仰して之を現代に表現せんとする人々を悲しむと共に「友は是れ相救ふを義となす。然れども請ひて後に救ふは真の友に非ず。故に不請の友と作ると云ふ」といふ聖徳太子のみことばと対照して、まことにわれらが生をおもはしめらるゝのであります。あくまで個人的に生きぬかんとする現代多数の論理主義者、又それを崇拜する数多の青年、それらを批判検討すべき不請の友のみことを念仏申あはすことに実現せしめし祖聖の信を、憶念するに非ざればまことの教育原理はなきことゝ確信いたさしめられてをります。吉野博士が「我々智識階級の者は無智の労働者を指導してやらねばならぬ」といふやうな学匠的な思想を批判する精神がそのまゝわれらのちぎりを念ずる心であることに気づかしたまひし友のみことをしぬびます。

かつて『親鸞と祖国』に御発表下さいました信友の手紙を昨日又拝誦しました。それはそのまゝ私のいはんと欲するところをいひ表はされしみことばとなつかしみ拝誦いたしました。いろ／＼かなしきくるしき雑縁にかゝづらひつゝ、内なるこゝろにひびき合ふことばのちぎりに生かされゆくことを憶はずにをられませぬ。「この後永く兄によつて照さるゝ自分がどんなに見悪いものであるかを思ふと恐しくなります。たゞその結果はどうあらうとも兄はそれをゆるして下さることをたよりにして御指導をまつのです」といはれしことばを今またわがことばとしてしるすのであります。あゝ共にはてなくつながら内なるこゝろよ。(中略)

『人生と表現』はいまだ御発刊にはなりませんか。この机上に見えん日をお待ち申してをります。我等の間には是非表現の機関一つは必要と存じます。今、来月中に京都へ参り是非とも御目にかゝりたく楽し居ります。「夜もすがらたゞく船ばた吉崎の鹿島つゞきの山ぞこひしき」遠くの友らに思ひをはせし蓮如上人の芸術的表現を思ひおこしつゝはるかに御健康を祈上ます。

友へ

君しぬびみたよりをせしその日には君もみ文を吾にくだしましき
したひあふといふいつのちかひとのたまひしみ友のみことまたしのばれつ
こゝろよりこゝろにかよふ不思議のわれらがちぎり何にたとへむ
いにしへの名もなき海士のうたへりしかなしきことばにつたはるいのちよ
紀伊山の雪のほのかにひかる夜をかへらしむみ友またしぬびたり

——『人生と表現』誌（大正十年四月一日号）所載——

機縁

ふと君が入りき給ひしときあひまつりしよろこびのこゝろいはむすべなかりき
東やまそのふもとべを君とゆきかたりまつりしあゝそのときよ

——『人生と表現』誌（大正十年五月一日号）所載——

み墓山に

(→)

み墓山に

わかばしげる

春の一日

聖徳皇をしたひまつりし

その思出よ

名もなき民

われらに

また

よみがへる

そのみことばよ

「梯橙の三宝。五乘人天の差別」を

すてしめて

「帰依の至極」と

すゝめたまひし

そのみことばよ

(二)

聖徳皇を、奉讃しませし

たより

渭の山のふもとの校舎にいくたびか友とかたりし君がみ名かも

その君にかくもみたよりする今の不思議のちぎりを何とたとへむ

これもまた去年の春に橋川氏をとひしにつながらるわれらのえにしよ

今年また深草のみ友とあひまつりあつきみ心にむせばしめしか

とほつみおやの

消息のみふみよ

源藤四郎殿の

たよりうれしくて申候とふ

かなしきいのちよ

よろこばしきいのちよ

うつし世の

悲痛動乱と

その

清浄歓喜 光明世界と

あゝわれらが幸慶を思ふ

——『人生と表現』誌（大正十年六月一日号）所載——

甲斐の国の君ます里のとほければみあひまつらむその日はしらず

されど生きていつかは君にあひまつらむかなしき我がいのちをしようもふ

したひあふとふはいつのちかひかとふみ友のことばまたうかび来ぬ

——『日本及日本人』誌（大正十年六月十五日号）所載——

「論稿」——七十五首和讃に現はれたる聖徳太子観——（大正十年六月五日）

『皇太子聖徳奉讃』十一首は親鸞の最後の著述であつた。それは吾等の常に味読せしめらるゝところであるが、其他の著作中特に聖徳太子関係の物としてあげられねばならぬものは、即ち今こゝに抄録すべき七十五首和讃であらう。其真蹟と称せらるゝ写本は現今一身田専修寺の宝庫に存し、その終が四天王寺の御手印縁起に合する故か又『伽藍和讃』とも称せられてゐる。今はその真偽を考証するよりも、この和讃の中特に『聖人の言葉』として誦せしめられてゐるものに就て、わが感想をしるしたいと思ふ。聖徳太子、親鸞を研究するとは其言葉の生命直観でなければならぬと云ふ指示は我等が共同研究の原理である。

二

日本国婦命聖徳太子 仏法弘興の思ふかし

有情救済の慈悲ひろし 奉讃不退ならしめよ

これは和讃巻頭の第一首である。聖徳太子と云ふ名の前に先づ冠せらるゝものは、日本国婦命の言葉であつた。親鸞はこゝに『高祖和讃』の何処にもない「婦命」の二字を特に聖徳太子の上に冠して三国祖師の思想を唯一人に帰摂せしめられた。まことに我等は太子のみ言葉を戴くことに依つて動乱無極の生に「和を

以て貴しとなす」同朋同信の生活を味識し、こゝに信に基づく愛と協感に依つて和国の有情は永遠に若く、また強からしめらるゝであらう。その精神を具現したまひし聖徳太子同胞哀愍の恩徳を今「有情救済の慈悲ひろし」といひ、また日本文化の進展すべき原理を示しましたまひしについて「仏法弘興の恩ふかし」ともたゞへられたのであつた。奉讃不退と一心をこめて智的模索や偶像的崇拜をなげうたしめし我等がみおやの芸術的官感をしぬび合はずべきである。

三

六角堂の事は親鸞伝に処々見えてゐるが、こゝにも第二首以下四天王寺造建の事より起して六角堂の縁起等、聖徳太子造寺興法のさまを和讃せられてゐる。その結句に曰く、

太子勅命帰敬して

六角のみてらを信受す

皇宮の有情もろともに

恭敬尊重せしむべし

かの「朝家の御ため国民のため」といふ言葉、今また「皇宮の有情もろともに」とある如きに親鸞の国民的普遍的精神を味はしむるのである。

用明天皇胤子にて

聖徳太子とおはします

法華・勝鬘・維摩等

大乘の義疏を製記せり

太子崩御のそのうちに

如來の教法興隆し

有情を救済せしむ人

太子の御身と礼すべし

これらは『勝鬘經義疏』に於ける「声は以て意を伝へ書は以て声を伝ふ故に書義を聞仏声と云ふ」とのおほせと共に味はふべき言葉である。「信心といふは人のことはをたのみてうたがはざるなり」と示した『唯信鈔』著者もその文意を作つた親鸞と同じこゝろであつた思ひがする。それはまた「光明とは智慧のかたちな

り」といつて光明を文化の義に解せられた親鸞の仏教觀の全部である。そのみ言葉をその「御身と礼すべ」き外に我等が讃仰は有り得ない。それは直接であり真である。こゝに宇宙の真理に低迷し夢幻の淨利を模索する一切の智的迷信を検討批判すべきである。

四

六宗の教法崇立して 有情の利益たえざりき

常に五戒を受しめて み名をば勝鬘とまふしけり

「有情利益たえざる」御生活は虚仮の世間に随順しつゝ唯仏是真と信じさせたまひし「止むを得ざる誠」である。父の如く母の如くまします「聖徳皇」を奉讃せられた晩年八十幾歳の親鸞の國民的精神がしぬばるゝのである。それは「日出づる国」の名もなき民の尽きぬ思ひである。此に「神州必不滅也」の祖国永久の生命を信知せしむる言葉の音律が、既に自然の威力を表してゐる。かく見来れば此讀も亦十一首和讃其他と共に和国の有情の永久に愛誦すべき國民的詩歌である。

五

阿佐太子を勅使にて 我朝にわたしたまひし

金銅の救世觀世音 敬田院に安置せり

此像つねに帰命せよ 聖徳太子の御身なり

此像つねに恭敬せよ 弥陀如来の化身なり

「太子の御身」を直ちに「弥陀」と仰ぐのは「原理の人」を憶念する者の自然なる表現である。法蔵神話の無量寿経はこゝに新しく日本國民聖典として再誕したのであり、故に『御伝鈔』に云ふが如き「聖人傍に皇太子を崇め給ふ」の説明は直ちにその無生命を拒否せらるべきであらう。皇太子奉讃は全的でありこの基

点を描いて親鸞の思想は何ひ得ないのである。

仏子勝鬘を敬ひて

十方諸仏奉讚す

梵・釈・四王・龍神等

一切護法まもるべし

こゝにしのばしめらるゝ音律は海洋のうねりを思はすが如き「現実肯定の全統御威力」である。「菩薩若能く此四行を修すれば上は則ち諸仏の為称嘆せられ中は則ち諸天の為護念せられ下は則ち諸人の為恭敬せらる」とふ『法華義疏』の又「念仏者は無礙の一道なり」とふ『歎異鈔』の語を思ひあはしめらるゝのである。

六

大日本国三十主

欽明天皇の御ときに

仏像經典この朝に

奉獻せしむときこえたり

像法五百余歳にぞ

聖徳太子のみよにして

仏法繁昌せしめつゝ

今は念仏さかりなり

「いまは念仏」の左訓に「コノ世ハ末法ノヨナリ」とある。罪悪深重の現実現勢を痛感してはたゞ「如来の遺弟悲泣せよ」と云ふに気づくのである。釈尊の没後深密を誇つた觀念観法も現世祈禱の「造寺造仏」もそれらはみな「諸善龍宮」の過去と葬り去られた。動乱無極の吾等が内心には横超の世界即ち友の世界あるのみである。こゝに和国の教主が「和」の御精神は味識さるゝ。

七

「史的無窮の生命」を友は示す。それは今祖先の言葉と生活と、それを憶念する我等がうたとに具体的に証明されつゝある。

「友とは是れ相救ふを義となす。然れども請して後来るは真の友に非ず。故に不請之友と作ると」動乱的

人生の苦悪の内に味はるゝ信のつながりをかくのたまひし聖徳皇に帰命し、「唯是誓願一仏乘」と念ずるの外なかつたみおやはまた「このふみは奥郡におはします同朋の御中みな同じく御覽候べし。としごろ念仏して往生をねがふしるしには、もとあしかりしわがこゝろをおもひかへして、とも、同朋にもねんごろに、こゝろのおはしましあはゞこそ、よをいとふしるしにても候はめとこそおぼえ候へ」と名もなき民の信のつどひにその姿を没入せしめたのである。

夜もすがらたゞく船ばた吉崎の鹿島つゞきの山ぞこひしき

浜坂の山のあなたにうつ浪も夢おどろかす法の音かな

この島に名残を惜しみ又かへり月もろともにあかす夜すがら

わき出づる清水の浦を今朝は早ながめて帰るあとの恋しさ

この蓮如上人の遺詠にも聖徳皇、親鸞と等しき情意の律動を感じしむる者は現しき友のみ歌に極促一念の史的渾融世界を証明せしむべきである。いたましきは人生である。されど喜ばしきは人生である。

みたよりもあるやと思ひしみたよりを果してたまはりしことのうれしさ

君とわれとかく迄こゝろ合ふといふはしたひ合ふといふいつのちかひか

君きまささんと思はるゝ日にはとひ来ます一つに通ふこゝろ何といはむ

高踏の人生観の迷夢は其影を没して、恋愛的艺术の人生はこゝに開展する。かく信ぜしむることもまた聖

徳皇、親鸞の現実的応現威力に外ならぬのである。そは友の告であり述である。こゝに

太子のみことにのたまはく
われ入滅のそののちに

国王后妃と生れしめ
くにくに所々をすゝめては

数大の寺塔を建立し
数大の仏像造置せむ

数多の経論書写せしめ
資財田園施入せむ

長者卑賤の身となりて
経論・仏像興隆し

比丘・比丘尼と生れても
有縁の有情救済せむ

これは他身に非ずして
我身これならくのみ

奉讃の一字一句も
皆この太子の金言なり

と誦せしむる。此四首は連続して自ら一首をなしてをるが第四句に前三首の意は結ばれてゐる。「奉讃の一字一句も」の左訓は「ホメタテマツルコトバミナイシノミコトナリトシルベシ」とある。そは我等が現実の同朋世界に外ならぬ「すべて親鸞の言葉は総合的内心的心理的の見地から理解すべきである」

八

太子の御とし三十三
なつ四月にはじめてぞ

憲法製して十七条
み手にて書して奏せしむ

十七の憲章つくりては
王法の規模としたまへり

朝家安穩の御のりなり
国土豊饒のたからなり

豊饒の左へ「ユタカニユタカナラセントナリ」とある。

「夫れ一如に範衛して以て化を流す者は法王、四海に光宅して以て風を垂るゝ者は仁王なり。然れば則ち

仁王法王互に頭はれて、物を開き真諦俗諦（法）通に因りて教を弘む所以に玄籍宇内に満ち嘉猷天下に溢れたり」と云ふ伝教大師の『末法燈明記』を引用して、弥陀教の精神と日本天皇の法治世界との表裏相応する旨を示された親鸞にとつては、其法王にして仁王なるものはまさしく聖徳太子であつた。

さればこそ「太子の御身」を「弥陀の化身」と頭はし、又「和国の教主」とも讃嘆し奉たのである。それは「対外对内政策原理としての宗教」を示された思想の自らなる帰着点であつた。そこに聖徳太子の憲法を「朝家安穩のみ法」「国土豊饒のたから」と仰ぐ悲痛緊張の国際国民的生活は表現さるゝ。この一首にも現代多数の寺院の因襲宗教家の誤りたる親鸞上人觀を徹鑑することができる。「真俗二諦一致」の意趣もまた遺憾なく伺ひ知ることを得べきであらう。

九

物部の弓削の守屋の逆臣は 深く邪心をおこしてぞ

寺塔を焼亡せしめつゝ 仏経を滅亡興せしか

寺塔仏法を滅破し 国家有情を壊失せむ

これまた守屋が変化なり 厭却降伏せしむべし

左訓に「国家」の処へ「コクワウヲウシナヒヨロヅノウジヤウヲヤブリウシナハントセバ」と註したのは日本に生を享けたみおやのひとしきこゝろであつた。国家有情の存在は即ち国王の存在と確信せられたのである。親鸞の国家觀は此一註に尽されたと云てよい。「大君は神にしませば天雲の雷の上にいほりせずかも」といふ、柿本朝臣人麿の歌はたゞ「大君は神にし座せば」の一念に帰結せられてゐる。「弥陀如来の化身」を和国の教主聖徳皇に仰がれたみおやは其教令のまゝに「国に二君なし」と唯信されたのであつた。

今この和讃を誦して我等は友の言葉「永久思想戦」を念ひ起す。寺塔仏法を破滅し国家有情を壊失するも

のは、唯太子当代の守屋のみでない。聖徳太子の精神を受継がれた吾等がみおやは南都北嶺のゆゑしき学生の又興かく僧たちのさま／＼の思想を検討批判されたのである。今それは現実には我等が友のたえざる批判に外ならぬ。史学研究の目的も現実探究の精神を離れては遂に無意義となる。みおやは此意味を七百年前この和讃に示されたのであつた。

十

憲章の第二にのたまはく 三宝に篤く恭敬せよ

四生のついのよりどころ 万国たすけの棟梁なり

何れのよいづれのひとか帰せざらむ

三宝によりまつらば いかでかこの世の人々の

まがれることをたゞさまし

とめるものゝうたへは

石を水に在るゝにたりけり

まづしきものゝうたへは

水を石に在るゝにたりけり

こゝに我等は拙き説明をなげうつて『法華義疏』の「文に従て直ちとなへんのみ所謂かくる所を審にせず」と随順し奉る外はない。七十五首はこゝに結ばれてゐる。

十一首和讃は一心帰命のおもひ溢るゝ表現であつたが、七十五首和讃に至つては以上あげた十幾首の上にも我等は今こまやかに聖人の太子観に接することができるのである。友の示さるゝ言葉がこの七十五首にかくまで明らかに証せられたかと驚き且喜びつゝ味読したところを告白せしめたのである。

附記 七十五首和讃の本文は橋川正氏編『聖徳太子和讃集』に掲載されて居るがこの和讃には後世の竄入添加らしき

讃文多きやうに見受けらる。正しくは黒上兄の紹介されしあたりをよき言葉と信ずるのである。(井上右近)

——『人生と表現』誌(大正十年七月一日号)所載——

徳島から

小松島の根井山のもとに舟入らばいかにすがしく君おもひまさむ

そのあたり夕さりくれば浜にでゝかしこきみことわがきゝまつらむ

今日もかも汽船の笛はきこゆれど君がきまさむその日はしらず

鳴門渦小松の生ふる大岩にくだくる波を何とみまさむ

その日まで二十日あまりはあるとふにこゝろとほくもおもほゆるかも

この潮風にやすらひまさばみからだもよろしくまさんとひたにまちけり

うつしよにかくあはしめし喜びもわれならぬみ力のとどきます故か

——『人生と表現』誌(大正十年九月一日号)所載——

み病ひには

み病ひにはあらざるかなどきづかへどたづねまつらむにすべなき遠き国はも

かく気づかひしぬべるときに信実の絵はがきいかに嬉しくたまはりし

青葉しげる上野の丘をゆきましゝ君がみすがたおもかげに見ゆ

信実のすがしき筆よ緊張せる情意の律動よあゝ祖先をしのばしむ

——『人生と表現』誌（大正十年九月一日号）所載——

八月十日

うらやまの松の茂木に照る月を今宵はみつゝこゝろすがしも

一日の仕ごとの疲れいまは忘れみたよりを誦すにこゝろやすらけき
わがしごといそがしく苦しきをり／＼も君がみことを思ひてやまず

——『人生と表現』誌（大正十年十月一日号）所載——

よせがきに

鳴門瀉波にくだくる白波を君見まさばとしぬびつるかも

鳴門なる大毛の山をのぼる日も君がみことをおもひてやまず

南海のひかりはこゝにきはまると荒磯にいでゝしばしたゝずむ

かへりきて木村氏のみたよりきてあるにまた深草のみ友しぬばゆ

——『人生と表現』誌（大正十年十月一日号）所載——

ある日

今日われは深草の里をとひまつりはるかに甲斐の君をししぬぶ

きみがことばともにくりかへしたぐにわれら不可思議の生とよろこびあひつ
若葉てる深草の里のあさあけをきみも遠くにおもひまさむか

——『日本及日本人』誌（大正十年十一月号）所載——

九月九日

裏山のまろき草原に夕雲のたゆたふ見つゝ今日もしぬばむ

この山を君がみまさんその日はとときくも吾はおもひてやまず

いまごろは彼方のみ里のみすまひにみ友らしぬび筆とりますらむ

そのみふみに愚悪きはまりなきわれらをもみちびきましますことのかしこさ

まことよきひとよきひとよとたぐに仰がしめつゝわれらは進まむ

つまらぬわれを親友よとしぬびよびかけます君がみこゝろよありがたきかな

——『人生と表現』誌（大正十年十一月一日号）所載——

わがことば

わがことば多けれどみじかき君がみことのかぎりなきみ心に及ぶべくもあらず

されど思ふことみなかたりまつるにこゝろひらくるありがたきみちぎりよ

——『人生と表現』誌（大正十年十二月一日号）所載——

大正十一年——二十三歳——

「便り」

類々とかゝる暗殺事件が現るゝ現代の道德思想の欠陥に対しては、まことにみおやのまたよき友のみことなかりせばと、それにつけてもしぬびまつる外ありませぬ。あゝ聖徳皇の憲法のみことのりを生かしめしみおやのみをしへを信ずる名もなき民のつとめははてしなからん。

——『人生と表現』誌（大正十一年一月一日号）所載——

ことし春

ことし春天寿国曼荼羅をろがみて悲痛の画面におもひうたれぬ
仏僧鬼形浄土の莊嚴みなとにも王の劇的生をしぬばしむ

うつくしき天国なれどことなきをたのしむ人のすむ国ならず

ほのくくと虚空にみてる阿鼻地獄行方も分かぬこのうつし世か

聖皇のみことかしこみかゝる世をわたりしとほき世の人を思へ

虚仮の世にかくよび交すみ友ありと思ふもかしこきわれらがちぎりよ

思ひくゆけばまことにことばもなし師友先輩のいまさぶりせばこのたび

むなしくすぎなむと思ふ

今そを深草のみ友に仰がしむあゝ史的悠久伝統威力と君は示しますか

——『人生と表現』誌（大正十一年二月一日号）所載——

うつし世に

うつし世に君ますことを思ふときさびしき生もこゝろつよきかな

このあさけ仕事にいでんといそぎつゝいまふでとりて君にふみかく

み里にたづねまつりてかしこきみこときゝまつらん日をたゞにまちをり

——『人生と表現』誌（大正十一年三月一日号）所載——

うらやまは

うらやまはうすぐもはれてほのくくと若葉青葉のてりはえて見ゆ

おこたりのこゝろのまゝにしぬびまつるこゝろはつきせず友よゆるしませ

このほどはからだつかれて筋いたみわづかに日々の仕ごとつゞけぬ

なしゝことわがいひしことなべてみなよきものなしとおもふもはかなし

それにつけわれらいよゝよき友のかしこきみこゝろ仰ぎまつらむ

——『人生と表現』誌（大正十一年七月一日号）所載——

暑さ

とき／＼は汗ながしつゝ仕ごととして暑さおのづと忘れしむるかな
ともに生きともに苦しむとふことにすべてすべしめわれらつとめむ
うつし世はくるしくかなしきことのみたえずおそひきてはてしもあらず
しぬびあひまたしたひあひかゝる世をたゝかひゆかむとおもふに力づよし

——『人生と表現』誌（大正十一年十月一日号）所載——

上野なる

上野なる杜の黄葉日に透きて明るき路を日々にかよふも
名もなき民のつきぬおもひを筆にして戦ひませるみ友らを偲ぶ

——『人生と表現』誌（大正十一年十一月一日号）所載——

「便り」

一昨日は甲斐のみ友（編者註 三井甲之先生のこと）思はず御上京にてはじめて御目にかゝり、希有の機縁を
歓喜せしめました。無窮の史的感情と現実批判といふことについて、更に適確に示されましたことを感謝し
て居ります。夕方より井上孚磨氏の御宅にて皆でつどひ合ひいろ／＼承りました。

——『人生と表現』誌（大正十一年十二月一日号）所載——

大正十二年——二十四歳——

「便り」——常陸から——

今日は稲田（编者註 親鸞の最後の布教地・茨城県の稲田）へ大いそぎで参りました。低い山々にかこまれた
一帯の盆地で今も昔にかはらぬ一寒村をなしてゐます。「名もなき民の信のつどひのもとをたてたる」とう
たはれしみことにきはまるみおやが二十とせの生活をしのびまつりて、こゝに現実の機縁をよるこぼしめら
れます。

——『人生と表現』誌（大正十二年二月一日号）所載——

大正十三年——二十五歳——

「便り」——「人も我も」との大御言葉について——

河田博士は『宗教と思想』十二月号で「然しその現実を批評しその改造の方針を立つるに就ては、どうし
ても理知の命ずるところを主として、之に従つて理想的状态を考へ、之に照して批判画策することのさくべ
からざる事を思ふ」といふのですが、この理知の命ずる処は感傷的の夢想に逆転して、人為的改造を呼ぶや

うになると思ひます。

すなはち博士が「私の眼中には、現に吾々がその中に生存してゐる所の日本とか英国とか米国とかいふやうな国家組織の存すると同時に、合理的に推詰めた上で私の頭の中に出来上つてゐる所の一の理想状態としての国家組織あるを否むことはできぬ」とは直ちにその理知の破産を思はしめます。

日本人であるといふ絶対的事実を閑却し、各国成立の史的内容と条件を顧みざる非科学的思想は、日英米の区分を同一視し、民族対抗の実人生に眞の文化は発生開展しつゝある現実への心理的洞察を欠くものと存じます。

人も我も道を守りてかはらずばわが日のもとの国はうごかじ

これは松本彦次郎教授よりお示し下さつた大御歌で、この大みこゝろを頂きまつる一念にこそ、まことの理想と現実はあると信ぜしめられます。

——『青人草』誌（大正十三年四月一日号）所載——

大正十四年——二十六歳——

ゆくみちを

ゆくみちを照すみ心たえまなくみ文たよりて仰がるゝかな
拙き身をはぐゝみませし幾年の君がみ心を何とあらはさむ

辿りこしあとをかへりて世にふかき君がみ心を思はぬ時なし
さまぐの身の事ごとくにみ心を常あたらしく偲びて生きあり
やうやくに身に力得てこの夏はつとめはじめむ再びこの身も
拙かる身を我とわが捨てしめぬ力を友の力と仰がむ
辿りこしあとを思へば危くも君にあひ得しこと唯しぬばる
はてしなきわざのひとつを志ざす心を君よなほはぐみませ
ときぐもたづねまつらむと思へども海をへだてゝ道遠きかな

——『青人草』誌（大正十四年十二月一日号）所載——

大正十五年——二十七歳——

年賀状に

友とふたり君を偲びてあらたまの年たつけふをかたらひあかずも

——『青人草』誌（大正十五年二月一日号）所載——

たより

大御歌いたゞくわれらはらからの一つこゝろに年迎へなむ

みことばにみちびかれつゝ年々にわがゆくみちのひらかるゝかな
鳴門がた千鳥が浜にとどろ鳴る波をきゝつゝ君偲ぶかも

——『日本及日本人』誌（大正十五年二月号）所載——

よせがき

たえまなきみわざにつかれたまはむと君がみうへにたゞ心ゆく
かよひ合ふ一つこゝろになぐさめ合ひつとむる世と共にすゝまむ
したしくも承りしみことばをかしこくつねにしぬぶなりけり
はしきやしみ子も大きくなりまさむみいへはるけくなつかしむかも

——『原理日本』誌（大正十五年四月号）所載——

たより

したしくもみあひまつりしそのかみをしのぶこゝろは力ありけり
かしこくも友とゆるされよびかけます君をあけくれたひしのぶも
しめしますみ文のうちにとき／＼もみちびかれつゝわざいそしまむ
友とよぶ君がみうはさする夕はみやこ路おそくかへりますすらむ
ひとゝきも絶間あらせぬ君がみわざしぬぶに我も心せしめらる
わが里に君むかへんはいつの日とねがふこゝろはやむときもなし

みんなみの潮みつ国を冬さむき都に君がしぬびますらむ
したはしき君がみ心をたのみつゝまなびの道を辿らんと思ふ

「便り」——徳島県撫養から——

——『原理日本』誌（大正十五年四月号）所載——

（前略）わが思想界も随分混乱し來つて、ことに思想上の先知主義は實際道德生活迄も理性化せんとし、教育の振興が却つて国民生活の頹廢と表裏せんとする如き傾向もなきにしもあらざることとは、かなしむべき現象と存じます。それで所謂哲學的高遠なるごとく見ゆる思想も實際のことに當つては、却つて通俗のものに墮してゐるのを見受けます。又哲學上の主意主義的な傾向をもつてゐる人々も、人生の事實を論ずるときは、學問思索に於けるとときは殆ど異つた性質の見地に立つてゐて、人心の涯底を照明する如き生命をもつてゐないことは、それが思想上の雜行雜修に陥つてゐることを思はしむるもので、これらは臆^{やが}て教育施設の根柢を示すところの精神内容に反映し、重大なる影響を予想せしむることもないで存じます。こゝに於て民族生活と、それが内容を照す偉人天才のいかなる人格と思想を仰ぐべきかは、重要な問題となることは曾つて『国本』誌上に御示しのごとく考へますが、それが為めには（中略）信念の内容のそこに到る自然の脈絡を辿り來つて、その最後の結論として祖国の信念が表現せられくるところに意義があらうと存じます。このやうな点におきましては（中略）曾つて『国本』での知的生活難と學術革命その他の御論や、松本様の史學雜誌の御文や井上孚齋様のマルキシズム批判のごとき形式と内容とを期してのものも、それらを努力して『原理日本』などへは發表しなければならぬことは充分注意する必要があると思ひます。

拙き私の太子研究について拙稿を御促し下されあつきみ心のほど感謝仕りました。（中略）太子の研究は一生をさゝげてそれのみと心には期してゐますが思ふ様にすゝまず、田舎の學問の不便を今更に感じます。

『原理日本』へは太子とベスタロッチについて少し考へるところを書かして頂きたいのでございますが、三四月先に致したく……今年は一度大兄の御来県を御ねがひいたし、御講演等を御煩はしよき縁縁を造りたく今より考へてゐます。……拝顔の上いろく承りたいことも数しれぬのですが、このみちのとはきを残念にたへません。梅木兄も永い間御撰養次第に効を奏され、或はこの春一高にて復字の事かと存じ、上京の節は御もとへ御たづね申上げんことを今よりたのしみ待たれてゐます。(後略)

——『原理日本』誌(大正十五年四月号) 所載——

その日のうた

いつくと思ひしことの今日かなひ君ます都にきつるうれしさ
あひまつらばかゝることどもかたらんと幾多の思ひ胸にゆきよす
ふかくさに向ふ電車の窓のそとみえくる山々まみにすがしき
ごうくくと電車のわだちのひゞきさへ今日快くみ里にむかへり
かたるべきさまくのこと偲ぶまに早や師団前のよび声たかし
君いますすふかくさの山を仰ぐまも心のうちの晴れわたるごとし
をちこちの友もわがごとこのみちを辿りまさんと思ふもなつかし
そのかみのみおやのことも偲ばれてつきぬいのちに迫りくるかも
この山のふもとのみ家君はしも世のさまつねにいかにおぼさん
いそがるよふかくさのみち吹雪して御陵の樹々は風にさやげり

——『青人草』誌(大正十五年六月一日号) 所載——

昭和二年——二十八歳——

友の病（東京にて）

はからずも友やみ我はみまもりになやみつかれて幾日すぎけり
いかにせんすべもしらく疲れ切りし身をはげましてたゞみまもれり
かゝる日に君はみわざのせわしきもいとほで友を見舞ひたまひし
病みてなほみ友らしのぶ友の身に君がみなさけはいかに沁みしか
みなさけにうるほひ得つる病む友がかゞやく顔を見ればうれしも
つらきことくるしきことに遇ふときしひとのなさけの身には沁むかな
国のため末はなりなむ友の身をたゞすこやかにあらせといのる

（編者註 「友」とは梅木紹男氏のこと）

養田胸喜氏のかへし歌

たゞならぬ病の床にふせる身も忘れましけむ友のあまひよ
われ知らずあまひかはしつかすがに顔をそむけぬ見まもりかねて
ひとゝせをふみとりかはし近き日に相見むことをかたみに契りし
はかられぬ人のいのちと知りながらかゝる姿を見むと思へや

語らはむことばもあらずえたへずて退きいでぬ友のみ室を

あが姿みおくりましけむみ心をしぬぶもいたしきはまるおもひに

硝子戸ゆさし入るあはき新月の光を友は何とみるらむ

はつ／＼にみし新月のたちまちに雲間に入らく見るこゝちすも

はらからもおはしまさねばやまひある身をも忘れてみとりいますか

うつしよのふかきえにしの友がきもかゝるためしにあふはいたまし

うつし世のふかきぎりの友がきはかゝらむときに思ひしらるゝ

まゝならぬ客舎にありて身一つにあけくれ心をくだきまします

みつかれのほどもしらるゝかんばせを唯いたはしと仰ぐのみなり

たゞならぬそのみやまひにおこたりのみえそめたりときくがうれしき

友の病（東京にて）

何といふみことばならん誦しゆけば胸開かるゝ君がみうたよ

ひとたびはしづかによみて再びはたからかに誦す君がみうたを

み心にうたれし胸はうつしよにまこと稀なる力を得たり

みなさけは病みて弱れる友の心に戦ひぬべき力をめぐまむ

ひさしくも慕ひ偲びし人にあひてよろこぶ友をみればうれしき

しぬびあひ助けあひつゝうつしよにつきぬいのちを得つゝゆくかな

にぎりみだれはてしなき世もかゝるみ歌いたゞくことのかしこくもあるかな

——『原理日本』誌（昭和二年一月号）所載——

あらたまる御代

あらたまる御代の初めを大君のとこみやどころにむかへまつれり

あきらけき初日の空に大御陵いやおごそかに見えわたるかな

聖霊殿の皇子のみまへをかしこみてわれらがわぎを祈りまつりつ

——『原理日本』誌（昭和二年三月号）所載——

友へ

世にふかき君がみこゝろたまはりし月日はながく忘れじと思ふ

ときくゝの君がみことばわが胸にまた新しき光をそゝぎぬ

友のため力つくしくこの月日みなさけいかにかしこかりしか

病いえていまやすらけくふるさとの母と祖母とに友は見えなむ

——『原理日本』誌（昭和二年三月号所載）——

「便り」（昭和二年三月二十四日、「人生と表現社」大塚英雄氏宛）

此の度は図らずも上京の機を得、兄と共に幾度の会合をいたし得たこと実に有難いことでした。又出発の

節には御遠路わざ／＼御送り下さつて感銘の至りに存上ります。み姿の見えずなりゆくまゝに云ひしれぬさびしさを感し乍ら西下いたしました。しかしあつきみ心はわが胸に又あたらしくよみがへつて、これからの月日に大いなる力をあたへて頂きます。共にうつせみのひととしてのおなじ思ひにむつび合ひ助け合ひつゝもちとみ国のためにと念ずることはこゝにわれらのいのちのつながりを感じしむるのであります。こゝにもとづいて我らはかしこきわざに力つくすべく心してゐます。我等は単なる共鳴より協力へ、思想信念より教化へと今開展を志さねばならぬときであると存じます。こゝに大兄にお目にかゝり得し深厚の御縁を感謝すること切であります。瑞穂会も段々開展の歩をすゝめ、兄の御もとに慶大にあたらしい結合が生れんとし、今の世にたのむ可き光りがみえそめしとよろこんでゐます。帰途大兄のみ文をくりかへしつゝ大いなるみ心のお歩みに感激せしめられ乍ら協力と同時に永く御みちびきを願ふ心にみたされました。そして我らは単なる思想の上だけではなくそれを統ぶる人としてのつながりに、かぎりなきよろこびを禁ずることが出来ませんでした。帰途は京都で三、四先輩をたづね、二十一日は法隆寺の聖霊御会に列しました。千三百六回忌の御法会で讃頌笙鼓と和し金鼓みあかしにかゝりやき荘厳の光景でした。聖王の神去りましゝ春は今も同じく霞ひきて京都の山に映ゆる堂塔の荘厳は千三百余の年をへだつとも思はれず、その日をしぬびまつりて涙ぬぐはしめました。み仏を念じてとこしへの国と民とのためにのこしおきましゝみことの数々にこもる悲痛のみ心を切にしたひ参らせました。

帰途岡山で松本先生にお目にかゝりくはしく大兄の御うはさ申し上げました。先生も非常に大兄をふかき思ひに申上られてゐました。五月上京の節はおあひ申したきよしでした。尚入澤先生も教育のことで御研究のことありましたら、おたづねになれば今後御力添へさるゝやう御話でした。いろ／＼申上りたいことありますが、申上つくされません。ひんがしの日 pensando 感慨無量であります。

どうかお体お大切にして下さい。又上らん日のあらん事をねがつてゐます。御祖母上様御母上様へよろしくお言上ねがひます。

——『伊都之男建』誌（昭和九年七月号）所載——

桜ちる（昭和二年四月、絵葉書の表に）

桜ちる裏山みちをのぼるにも君がきまさむ日を思ふかな

松かげの朱ぬりの宮にともしびのともる夕ぐれ山くだるなり

——『黒上正二郎先生遺歌集』（昭和十五年十月・日本学生協会刊）所載——

ときくも（昭和二年四月）

ときくも山にのぼりて友がすむむがし遠く雲路を慕ひつ

なつかしきみうたのたより開きみて君がよろづのみこころ偲びぬ

何時の日か君を迎へむ山のべに君を偲ぶもひさしくあるかな

時の間に千里かけらむ駒思ふ君ある都の遠きを思へば

うつしよに君とあひ得しよろこびを思はぬ日なし遙けく偲びて

わがやどをたづねたまひし日のことを思ひてひとり慰めにけり

古へのひじりのみ子のみこころを仰ぐ思ひのうちにはなむ

——『黒上正一郎先生遺歌集』（昭和十五年十月・日本学生協会刊）所載——

二十首にあまる（昭和二年四月）

二十首にあまるみうたをたまひてし君がみ心のふかき偲ばゆ

たからかにみうた誦しゆけばみ心はかなしきほどにせまりくるなり

南国の春しづかなる山かげの住居をかくも偲びましゝか

ひとりして文よむときもみ心は我をまもりてあるをよろこばむ

ひとりしていそしむときもみ心は身をはげましてあるを思はむ

にしひがし身は別れても一つなるこゝろに我は力を得たり

くもりなき大みこゝろのもとにしていそしむことは末とほらなむ

なさむこと多くある世にかしこくもよきはらからとあひしうれしさ

——『黒上正一郎先生遺歌集』（昭和十五年十月・日本学生協会刊）所載——

とき／＼も（昭和二年四月十五日、「人生と表現社」水野龍介氏宛）

とき／＼もうたのみたよりひらきみて君がみこゝろわれは偲ぶも

みづ／＼しみうたのしらべ我もまた若き力の身に充つおぼゆ

雪消えて今はあかるき春の日の都大路の並木を照さむ

南国の山はさくらも散りはてゝ若木のみどり新たなりけり

過ぐる日に共に偲びてみまつりしひじりのみ子のみ文くりかへす

かなしきにくるしきにつけさま／＼のふかきみのりをあふぎてつきずも

これよりはかしこきみちもいよ／＼にひらけゆかんと友を偲ぶも

み心を偲びまつりてうたよめばまたあたらしき力をおぼゆ

(水野龍介記) 右の歌は黒上氏が徳島市船場町より小生宛に絵葉書に書添へて下さつたものである。その絵葉書は徳島名勝新町橋の風景であつて堂々たる南国の大きな橋の上を兩人の麗人が相並び、一人の麗人と行きかふ処をうつしたものであり、その橋を越えて遠く右より左になだらかな緑然ゆる山が裾を長く曳いてゐる。立ち並ぶ家には南国の都会の家にふさはしく瓦屋根白壁の倉、その中に洋館も処々に点在すると云ふ至つてなごやかな風景である。

——『伊都之男建』誌(昭和十年七月号)所載——

「便りとうた」(昭和二年四月、「人生と表現社」水野龍介氏宛)

先日は御会合のときに御三人にて御歌の便りを賜り有難く且なくさめられました。

東京にて皆様と会合をせし日のことを偲びてふかくなつかしみ参らせました。研究会も予定の如く成立、趣意書も拝見して力をおぼえました。共に力を協せてこのことに永く進みたいと念じてゐます。今は単に同信交通の上のみではなく対他的にすゝまねばならぬ時と存じます。我らの信とそのなすところが、自然信なき人の心に通ふまでに我らは信じ行はねばならぬことを拙き身を省みつゝ思つて居ります。

精神科学研究会もいよ／＼になりたちしかと力得にけり

安らぎであるべくもなき今の世にかしこき会のなりたちけり

みちのため国のみためにみ友らがくたくみ心通ひくるかな

拙くて怠り多きわが身をもむちうち共にすゝまむと思ふ

都にてたづねたまはりし日のことをはるけく今はなつかしむかな

みつどひのたよりうれしくいたゞきて偲ぶ心はつきせざりけり

（水野龍介記）右は徳島市撫養町岡崎よりの御便りであつたが、その絵葉書は天下の絶景鳴門海峡に於ける、潮流
淀み油海の如き、平静時の飛鳥と裸島のそれで、その絵葉書の表面にインキの字あざやかに六首の和歌を書き添へて
下さつたのである。

——『伊都之男建』誌（昭和十年七月号）所載——

あたらしき（昭和二年五月）

あたらしき道ひらけむと賜りしこの刷りぶみをよみあかぬかな

ことそぎて力あふるゝ言の葉のひゞきに我も力を得たり

もろともに力を協せゆくところみおやのみたま守りますらむ

三人のみ友のつどひ偲びつゝ力あるわざ我は思へり

三人のみ友とともにつどひてし都のことを思ひ出でつゝ

にぎりみだれはてしなき世にまことなる道開くべきかなしきわざはも

みたよりにまた刷り文にあたらしきわざにはげまむ力をおぼえぬ

——『黒上正一郎先生遺歌集』（昭和十五年十月・日本学生協会刊）所載——

「便りとうた」（昭和二年六月十五日、「人生と表現社」大塚英雄氏宛）

その後益々御健勝の御事と存上ります。梅雨も愈々近づきました。大兄の御すこやかならんことを偏へに御祈り申して居ります。僕も御蔭で無事ですから御安心下さい。梅木君もこの二三日大ぶん回復の曙光見えそめました。先日は御詳細に忝く存じ上げました。何度もくくりかへし拝誦して拙き文をみ心に撰めたまひし有難さを思ひつゝいろいろのみ示しに大いに啓発を蒙りました。最近も引きつゞき太子の『維摩經義疏』を詳細に拝読してありますが、まことに今更乍ら太子の偉大を偲ばしめられます。仏教の形式理論を人生体験に生きしめられしあとをしみじみと辿り得ます。今その代表的の御言葉として次の御示しを拝誦いたします。

自行外化を憶して以て心を調伏すと雖も若し自他の二境を存して修行せば則ち修するところ広からずして物とその苦楽を同じくすること能はず。所以に勧めて応に著を離るべしと明す也。(文殊問疾品)

仏教の我空法空の哲理に於ては、この個人我も五蘊の集成であるから実体はないものであり、宇宙人生の一切事物も同様因縁によつて成立したものであるから本来空即ち之も実体なきものと見るのでありますが、この見方によつて人生に対する執着をなくして自在の境地に達せよといふのであります。今このみ文によると太子はこの見方を撰取して、たとひ自らを行ひ他をも念じて修行しても「若し自他を存する」即ち自己に執着して自己の解脱をねがひ或は他を念ふとしても、そこに自己の好悪を存して自己中心の思想を固執する時は「則ち修するところ広からず」、つまりあらゆる人の心にめざめることが出来なくして、人と共に苦楽を同じうする能はざるに至つて、眞の教化はその意義を失ふことになるとの仰せであると存じます。こゝに我空法空の大乗空觀の哲理は内的化されて、自己に執着せずして眞に人と共に生くべき心的法則となり、それが直ちに教化活動の上に示されてゐるのは心して仰がねばならぬところと存じます。いかなる理論も徳目も、一度太子の大御心を通ずる時は、直ちに人生の生きた指導原理化さるゝところの希有の天才を有しまし

ませしことを偲び奉るのであります。

このみ文でも思はれますやうに、太子はすべての思想を教化意願の実現の上に生きしめられたのでした。こゝに我等は学問の研究又は思想批判といふことについて考へしめられます。批判は懺悔のあらはれである、とはよく聞かされることでありますが、併し単なる紙片の上の批判などで思想界への貢献や人の教化が期し得られるものでせうか。人の教化、時代の濁乱を憂念しての教化活動は、人が人を動かし体験にひびいてはじめて行はるゝものであり、思想的は人格的を伴うてはじめて意義ある具体化を得るのであると存じます。こゝに我らは真に人と人との交渉の上に於て人を教化（人と共に同信協力）し得てそこに思想改革の根底を確立し得ることゝ存じます。そこには憎みも怒りも忍び没して苦闘するこゝろがなくばそれは成就し得ないことゝ存じます。「自他の二境を存せざれ」と教育者の精神を示しましたし、実行的教令を今痛切に仰がるゝのであります。

こゝに大兄が『青人草』の長塚氏の歌についての御評歌の内容をも偲び上ます。長塚氏の歌のつひにまことの人生に徹し得ざりし内容を示されつゝも、そのとき々の生の緊張の表現を撰取され、その実生活の意義ありしあとを偲ばれし広大のみ心は単なる批判に囚はれざる内的自由の光明を偲ばしめまして種々啓発を蒙りました。批判も相手に対して思想を以て思想に対するといふごとき今迄の態度では如何かと存じます。勿論折伏すべきものはあくまで折伏して正を建て異を伏し濁乱の今に改革の急を告ぐるものありますが、自他の二境を存せずして物と苦樂を同じうするの心あらば、批判と共に自然に撰取の見地もあらはれて自他共に同じ心海に帰せしむる縁とならうと存じます。人がいかに申すとも太子のみ心はそこにあり、又それを仰信するものであります。大兄とあひまつりしことのよろこびをさまゝのことに思ふものであります。

先日は精神科学研究会に本多氏の講演を催されし由、会も愈々発展のことゝ力強く存上てゐます。まこと

に遠方ゐるに残念ですが、一意協力実現を念じてゐます。今はかゝる具体的事業によつて人を養成し、現思想界、学界に新運動を起すと同時に實際活動に開展の用意をいそぐべきときと存じます。瑞穂会も發展されつゝある報を得て力強く思つてゐます。僕は今秋大学教育学会で、再び日本仏教と教育について拙い研究を発表することになりましたので、秋には拝顔の日を痛切に待つてゐます。今少しすればその用意にとりかゝりたいといろ／＼忙しく暮してゐます。身の拙さを省みてのみ居れぬ時とたゞにはげまされてゐます。

梅木兄より重々よろしく申されました。あとより御便申上ます由申してゐられます。今日も大兄の子規の御研究を拝誦いたし、大兄のみ文の示さるゝみ心を梅木兄よりもいろ／＼承り、なつかしく偲上りました。

裏山の木々のみどりも雨ごとに色こまやかになりまさりけり

なすことのすゝまぬまゝに物みなのおつり変りの早くもあるかな

ひたすらに皇子のかしこきみ心を仰ぎまつりて我は生きあり

このこゝろ弱きわが身をつくるなきみわざの道にすゝまします

友を思ひつとめてあれば鳴門瀉けしきもまみにとまらぬ日もあり

夕ぐれてつかれしころは窓によりてふと見渡せば淡路に灯の見ゆ

島山にともる灯かげをなつかしみ人の世思ふこともありけり

島蔭のさびしき里に家ありて如何なるいのちを人は送るらむ

夕闇のせまれば寒き風ふきて秋の夕べのこゝちするかな

さま／＼の文みるごとに大いなる君がこゝろを我は思へり

君にしてこのうたありと青人草をくりひろげつゝ思ひはつきずも

人としてのまことの思ひにめぐめずばものゝ批判はなし得じと思ふ
みうたよみ君がかなしき緊張のみ心我に迫るをおぼえき

このみ心拙きわれをはらからとよびましゝかとかしこみ偲ばゆ
世にふかきわれらの契り偲びつゝ君思ふこゝろはてしもあらず

もろともに助けあひつゝ末つひに通らんことをたゞにねがへり

なつかしみ君偲ぶごとさまゝに君がかなしきこしかた思ふ

君もまた世のくるしきさまゝのみち経たまひしと偲びてつきずも

もろともに一つ心を念じあひ通ふいのちのうれしくあるかな

いつの日か君迎へんと友と共にかたりしことも久しかりけり

いつゝと思ひし夏の休み近くなりしを共にたのしみ思ふ

君を迎へ潮風わたる荒いそにかたらむときをはろけくも待つ

多くの申上たいこと申上られず、この筆をおきます。あとより申上ます。御祖母上様御母君様によりしく御言上下さい。み家のこと御なつかしみ偲びます。先日は養田先生の御訳文、会よりも発行にてありがたく頂きました。いろ／＼教はるところ多く感銘申してゐます。養田先生の犠牲的御労苦と又不断の御示しと又直接伝へらるゝふかきみ心と、言葉もなく感銘を以て仰いでゐます。唯自らをかへりみて慚愧致します。御身御大切にして下さい。

——『伊都之男建』誌（昭和十一年五月号）所載——

よせがきの（昭和二年七月）

よせがきのみ文よみつゝみつどひの中にこゝろはとけゆきにけり
島かげにともる燈を見て空遠く君偲びつゝ幾夜へにけり
南国の海辺の朝の朗かさ見るにつけても君思ふかな

はらからよ君がことばに偲ばるゝふかきみ胸にわれは生きあり
世の常の思想の上のことにあらじ一つのちに我らは生きあり
速きみち隔たりぬとも助けあふことには障るものなしと思ふ
何ごとも心一つと思ひきめみちの遠きも忘れて偲ぶも

——『黒上正一郎先生遺歌集』（昭和十五年十月・日本学生協会刊）所載——

なつかしき（昭和二年九月二日、一高生、市川安司宛）

なつかしき君がたよりを今日もまたつかれしあとにくりかへすかな
かくまでも思ひたまはるみ心を偲ぶこの身は力ありけり
みたよりをよみかへすときは共にありし由岐の海べをおもひかへすも
一つなる信のつどひに我ら生きていそしみあひし喜び思ふ
内にむつぶまことの力はいかならむ世の波風もしのぎてすゝまむ
もろともにおなじ心をまもりあひて国につかへんわざを貫かむ

今の世に責いや重き我らなれば苦しきことを共に進まむ

ひむがしもすぐ風ふきてすこやかにいそしみますとときくぞうれしき

なつかしきみふでのあとにすこやかなの君の姿をみるぞうれしき

はらからよ君が心とわが心目には見えねど常にかたはへり

しぬびあひたすけあふてふこの心にうつしよのいのち極まりてあらむ

御たよりまことにありがたくうれしく拝誦しました。おかげでからだすつかりよろしく御安心下さい。

あとよりくはしく申上ます。御身すこやかにいそしまれむことを念じてゐます。共につどはれし新学期の寮をしのびつゝ。

——『伊都之男建』誌(昭和九年五月号)所載——

「便りとら、た」(昭和二年九月三日夜、一高生、市川安司宛)

その後大兄にも御健勝のことゝ存じ上ます。九月も三日となつて新秋の寮舎の御生活も愈々これより始まらんとする時、戦勝の志気あらたに、また同信の友のつどひも力づよく緊張のうちに御つとめのことゝ拝察いたします。いくたびかいたゞきし御たよりくりかへし拝誦、また松陰先生の御ことば胸にきざみこまれました。松下村塾は一寒村の小塾でしたが、あの大精神によつてこそ維新の大業に偉大の貢献をなし得たことを偲はしめられます。我等の会は外に何の設備なく又小なりといへども、かしこくも 明治天皇と 聖徳太子の大御心を仰ぎまつりこゝにもとづきて共にはげましあひ助けあひ、一意報国の至誠を共にして勉めたら

ば、必ず国家の将来を荷ひて立つべき使命は実現せらるべきを確信いたします。我ら共に足らざるを足らずとなし虚飾なき家族的融合の生に真に切磋琢磨するところ、これ最高の学園であります。苦しきを共にして永久の生を照したたまふ大御心にもつぎてまことの道を世に開き得べき力を養はゞ、これに勝る塾はありません。いかならむ時にも共にたすけあひ、共に身をまもりあひて報国のまことを貫かば、これまことに生命を托すべき心の郷土であります。一切は信の一字に帰すと存じます。この信を体する人ならねば邦家の大事を荷ふに足らぬと存じます。本会の意義と使命とを、御たよりをよみつゝ思ふこと切なると共に、あたらしき緊張を、はらからと通ふ心に常に得させられます。

今はお蔭で身体もよくなりましたから御安心下さい。胃の上部に悪いところが出来、ために少々肝臓肥大し、そのために頭のはたらきを害せられ懸命に養生の結果、今よくなりました。漸くきりぬけました。御心配下さるあつい御心につよき力をあたへられます。はらからのあつきみ心を念じつゝ今、憲法の筆とり初めました。申上たいこと無限ですが又あとより申上ます。君にも御身御大切に。母よりもくれぐれもよろしく申上ました。向陵の寮を偲びつゝ。

灯のもとをひとりしづかに筆とれば寮のありさま目にうかびくも

もろともに机ならべて学ぶらむ姿をこゝにゑがきみるかも

一すぢのみちを正しくすゝみます友の姿を今偲ぶかな

目に見ゆる寮のありさま沁々と別れすむ身に迫り来るかな

あけくれに祈りあはせてたすけあふ我らはつきぬ力に生きあり

「便り」(昭和二年九月二十一日、一高生、市川・河野・新井宛)

拝復 御よせがきの御便りまことにありがたくいただきました。先日の御たよりと合せて五通机上におきていくたびか／＼よみかへしよみまつるごとに、したしくかたる思ひをめぐまるゝよろこびは筆にことばに申しつくされませぬ。去年私共五名が大御心のもとに兄弟のむつびをなし、力を合せて道のため御国のために共にたゝむとちかひしことが、今うつくあらはれつゝあるを思ふとき、神のみまもりのかしこさと我らの深縁の不思議をよろこび胸は自ら感慨に充たされます。我等の使命は大であり、我らのつくすつとめは永きことを思ふとき、今の信と協力とは、いかならむことにあふともたぢろぐことなく、まことの持久をあらはしすゝまんことを念じてゐます。市川兄の御発表まことにありがたく存じ上げます。その席にあらぬことが残念でなりません。『万葉集』のあとに素行先生の御こと意義ふかきことゝ存じます。

今日荒瀬兄から印刷送つていたゞいてその大要も偲はしめられ力づよく存じました。土道は人生のみちであり、難きにたへて人生の信を貫くまことのみちとして、そを平和と動乱に拘らず日用の学として示されしあとを辿つて、こゝに先人の生命のいまに我等のうへのぞむを思ひました。市川兄のみ声をきくこゝちいたしました。道はすでに古人によつて生きたる事実として示されてある、その火を見るよりも明かなる事実を、証明されたる事実を見て、そこに進み得ぬものは、つねに何事もなすことあたはずと存じます。偉聖をおもひ得ることのかしこさを今更に思はしめました。吉松の御会合もなつかしく、本会がこの家族的融合のもとにすゝむことは真にありがたいことであります。大御心にみそなはさむことゝかしく存じ奉ります。私もつねにはらからのみ心の中に共に生きて、いかならむことにも戦ふ力をめぐまれます。人生に貴きはまことであることを常に思はしめられます。

何れ明日おたよりかきますが今とிரいそぎ申上ます。何卒御身御大切に祈り入ます。いつもく御たよりをくりかへし又みうたを誦してお心の中に精勵してゐます。私もよく養生してゐますから御安心下さい。

近く帰京のはこびに至らむものといそいでゐます。母もよろしく申上ました。

——『伊都之男建』誌（昭和九年五月号）所載——

「便り」（昭和二年十二月二十九日、「人生と表現社」水野龍介氏宛）

在京中いろく厚きみ心を戴いて誠に有難く存じ上げます。春以来、約半歳をへてしたしく会合の節を得ましたこと、又帰る前日には御来訪下さつてゆるく御話も承りましたことはうれしく存上ました。帰省の夜は寒さの中をわざく御見送被下み心のほど深く感謝申上ます。師友のみ心を思ひつゝ西下いたしました。二日途中の旅宿に休み、一夜を太子御墓に奉仕しておかげで無事帰りましたから御安心下さい。東都の思出今力づよく、よみがへつて心をはげまします。『原理日本』の事共御労苦の程、かしこく偲び上ます。時下何卒御大切になされたく、はるかに祈り上ます。又後便申上ます。

（水野龍介記）凡そ数百年を経たと思はるゝ鬱林を背後に神々しきみ霊しづまります聖徳皇太子磯長の御墓の絵葉書を手取るものは誰しも茫然としてしばしその幽邃なる光景に我を忘るゝであります。

——『伊都之男建』誌（昭和十年七月号）所載——

昭和三年——二十九歳——

あらたまの（昭和三年一月一日、「人生と表現社」水野龍介氏宛）

あらたまの年のはじめの大みうたをろがみよみて年迎へなむ

聖王のみ墓に迎へしこぞの春のこゝろあたらしくよみがへるかな

大久保のみ友をとひてもろとも年のはじめをかたりますらむ

——『伊都之男建』誌（昭和十年七月号）所載——

講演会

はせつけて会場に入れば壇上の君がみことのつよくひびきく

明治のみかどの大御歌たゝへしめしますみことにしばし我を忘れつ

——『原理日本』誌（昭和三年一月号）所載——

「便り」（昭和三年三月五日、「人生と表現社」水野龍介氏宛）

謹啓 此度上京中は御忙しい中をわざ／＼御たづね下さいまして誠に有がたく存上りました。三兄御そろひにて去年の今ごろを思ひ起しなすことになれしく存上りました。その後全く多忙のため思はぬ失礼をいたしました。廿六日西下いたし法隆寺にて滞在の上一昨日無事帰省しました。お目にかゝりし日のこと今もすがし

く思ひ出さしめをります。私も四月末迄には上京、今後できる丈滞京の上み友らと共に努力いたしたく決心してゐます。今後共に御鞭撻ねがひ上ます。時下御自愛を祈り上ます。諸兄へも何卒よろしく御鳳声下さい。

——『伊都之男建』誌（昭和十年七月号）所載——

「便り」——徳島から——（昭和三年四月二十九日、東京高師生、副島羊吉郎宛）

謹啓 御弟君様俄然御逝去の御こと真に胸うたれました。いそぎ御帰郷になつたみ心を拝察し、又幼くして亡くならせられたまはしさを思ひ、何とも申上ることばもありませぬ。謹んで哀悼申上ます。御帰途御立寄を御まちしてゐましたが思はざるこのためとてかなしく存上ます。その後御蔭で無事にいそしんでゐます。その内上京のときも近づきつゝあることゝていろ／＼忙しくしてゐます。共産党事件もつひに大学の二、三教授の辞職に迄及びしこと当然のこと乍らそのこゝに至らしめし政治と教育との欠陥はふかく反省しなければならぬ所と存じます。

教育も単に制度や施設のみ変へてそれを統御すべき信念体験の問題を重視せず、又信念と申してもその具体的内容を極めねばならぬことで、我らの使命の重きことを痛感いたします。われらは共に力を協せて労苦をこのことにさゝげねばならぬので、熱心と労苦なき所からは何ものも生れぬことゝ存じます。お目にかゝつて共にすゝまん日を念じてゐます。

梅木大兄も少しづつよい方で稍々安心してゐます。よろしく申されました。御身御大切に祈上ます。

多忙のためハガキで失礼の段御ゆるし下さい。

——『伊都之男建』誌（昭和十一年八月号）所載——

「便り」——本郷・二高瑞穂会・朝風寮から——（昭和三年五月七日、東京高師生、副島羊吉郎宛）

一昨日上京いたしました。一昨夜大学（東大）の史学会部会で研究発表することがありしたため忙しくて失礼いたしました。御弟君様の亡きあと、さびしきみ心に精進さるゝ日々を偲び、兄が道のための御努力が亡き方への御弔ひとなり、永久の意義あることを念じてゐます。徳島へ御出下された時のこと思はれて感慨無量であります。一日も早くお目にかゝりたく思ひます。御面倒乍ら至急御出の日御通知下さい。吉田兄らにもよろしく。瑞穂会の寮で起居してゐます。会へも時々御出下さい。

——『若竹文庫便り』第六十三・六十四号（昭和五十五年一月）所載——

「便り」（同日、同人宛）

副島兄 御便りを拝誦して今眼底の熱きをおぼえます。一語一語胸にこたへ、申すことばもありませぬ。大兄と相助けて共に使命を全うすべく念じてゐます。大兄も御身御大切に御つとめ下さい。今は同じ都にゐるのでございます。共に懸命に進みませう。梅木様もふかく大兄のみ上を偲ばれ居られました。いろ／＼申上たいことがあります。拝眉の節を期し上ます。

弟君を失ひませしみこゝろを国のみためにさゝげますらむ

み心のこもりしみ文をくりかへしわが眼底のあつきをおぼえぬ

——『若竹文庫便り』六十三号・六十四号（昭和五十五年一月）所載——

「便り」（昭和三年五月十一日、一高生、重松鷹泰宛）

その後度々御たよりまことにありがたく拝誦いたしました。大兄にはお変わりもありませんか。今ごろは岡

山より御かへりのことゝ存じます。今はムヤの海べに梅木大兄と共に御ものがたりのことゝ切になつかしく存じます。この度徳島へ御出下さつたことは僕の生涯の感銘であり、よろこびであり永久の記憶たるべく真にみ心のほどを感佩してゐます。僕は御蔭で無事着京史学会での発表も成功の方でしたから御安心下さい。

最近史界の状況も在来の考証的なのか或は思想史の方になると内容ぬきの形式論多くまだ前途遠遠の感じました。瑞穂会も諸兄御よろこび下さつてありがたく存じます。唯今迄考へ来つたことは自分としては多く間違つてゐないやうに存じます。しかし乍らどこ迄も太子の仰せの「共に凡夫」のみ心を体し、お互に欠陥ある人間なるが故に相共に相和して進むことを念じて努力いたしたいとねがつてゐます。来週から会の主催で僕の「太子の人生観と日本文化」の題での連続講義を会員外の人を目的としてはじめることになりました。一生懸命それに身をさゝげて致しませう。樹治会も一度出ました。皆マジメでゐられるのでしんみりした気持ちしました。たゞあまりに仮定的な部分的な理論になやまされて、生きた全一的な人生そのものを見てゆくとところが少いことは時代とはいへどうかと思はれました。会で三上君と沢井君にお目にかゝつたことは実にうれしく存じました。藤井信男兄とは同室に起居してゐます。これは小生の毎日の最もありがたいことです。信男兄のことを心から念じてゐます。同兄の熱誠は必ず大きい生命を体現さるゝことゝ信じてゐます。東京も実に殺風景なものでこの地の生活はさびしいのですが、使命を念じ会を思ひ、又信男兄の側にゐらるゝことがこの心を助けるのであります。今宵も夜が更けました。道ゆく学生の歌声がしづけさのうちに流れてくるのをきいてつきざざる感慨が胸に湧きます。(編者註 樹治会とは当時一高にあつた法華經研究団体)

大兄と梅木兄のゐらるゝムヤを思ふと一足とびにかへりたくなくなります。あの海、あの月、否その人へのみわが心は通ひます。うつろひ易き人生にわれらは深い御縁あつてかく思ひあひ助けあふこと世にありがたくなつかしく存じます。重松兄！ かくよびかく念じてつきぬ心を残してこの筆をおきます。何卒御身御大

切にして下さい。梅木兄のこと日々案じ且祈つてゐます。いつも共にやつてゐらるゝことでせう。あとからすぐ申上ます。今夜信男兄はお兄上様おかへりでかへられました。深夜大兄のみ上を偲び上をります。

——『伊都之男建』誌（昭和十一年八月号）所載——

「便り」（昭和三年六月十七日、一高生、重松鷹泰宛）

拝啓 その後お変わりもあらせられませんか。日夕御ことを偲び藤井信男さんと共に相語つては御身のことを祈つてゐます。日々御便りをと思ひ乍ら母に大兄の御ことを頼んできたので一面安らげき心地もしてつひ／＼日をおすごしました。この間は御旅行中でしたさうですが、新緑の奈良あたりは定めてみ心にふかい印象をのこされたことゝ存じます。いつもムヤの海を偲び大兄や紹男兄を思つて痛切堪へがたき思ひを以てなつかしみます。僕も幸に健康ですから御安心下さい。瑞穂会のことゝ勉強とで忙しくそれに木曜は高師の会で講義してゐることあり全く寸暇なく生活してゐます。一高での講義も一年の新らしい方が確実に四人は来られて思ひの外よき結果を得ました。始めは一人になる迄もつゞけるつもりでゐましたが、かく集つて下さることは全く聖王の御遺徳の然らしむる所と感佩してゐます。太子が当時の大陸の思想学芸をひろく御探究遊ばせしに拘らず、それらの理論よりも先づ人としての体験「共にこれ凡夫」と仰せられしごとき人間の欠陥罪惡の反省求道より出発せられ、そこに自己が自ら英雄として超越するのでなく、相共に凡夫として相助けあふべき協力の人生を念じたまひしところに吾らのひとしくゆくべき道の体現宣布者としてのみ心を仰がしむる次第であります。そして太子の御著述を辿り又片岡山に飢ゑて死せる乞食をあはれみ給ひし御うたの内容を迎るとき、太子が人と共にと仰せられしみ心には、名もなくして終り或は悲痛な運命にくるしみ死しゆくごときひとの生を洞察同感あらせられし痛切なる人生観、人のなやみをわがなやみと感ずる切実の人生体

験を内容とすることを偲ばしめます。かゝる精神にめざめこゝに友情の真義を全うすべき信を思ひ、こゝに学校生活の内容を汲むと共に又それを通じて国民協力のねがひに進むことが生ける道徳、生ける人生の学であらうと存じます。これやがて我欲に囚れずして国家を思ひ、政治教育を公正化するべき原理であると存じます。拙き身を省みて大きき心を仰ぐ心を告白して共に今の教育政治をまことの信によつて改革し実現しゆく同志の本当の人をと念じてゐます。拙き身乍らも相共にと念ずることはゆるさるゝことと念じてゐます。会のことともいろ／＼考へさせられますが、今迄思ひしごとくでありますが、自ら省ると共に永久のみ心を仰ぎて信男兄と共に耐忍して進まんことを期してゐます。信男兄も御無事にて同室に相たすけて起居し相共に念じあひ乍ら力強く生活してゐます。信男兄といつも兄の御ことを語るときは兄こゝにいますのごとき思ひしとなつかしまるゝことも多いのであります。樹治会へはしばらく出ませんがその内、伊東の思出の方々とあひたいと思つてゐます。

梅木兄をいつもありがたく存じ感佩してゐます。梅木兄も久しくなつかしまれし大兄と共なる月日をどんなにかよろこんでゐらるゝことでせう。涙ぐまじき思を以てムヤの地を思ひます。大兄には赤穂さんにゐられますか。赤穂さんにもよろしく御つたへ下さい。大兄の御上について何でも御相談あらば御遠慮なく御申し下さされたく、われらはあくまで相共に力となり合つてゆくことを念じてゐます。

梅雨で東京もよく雨がふります。ムヤはいかゞですか。今宵は小雨ふり寮もしづかでペンの音がきこえる位で、あかるい燈下に御姿がうかぶこゝち致します。別便先日松坂屋へいつた節つまらぬものを買ひ失礼ながら発送しましたから御おさめ下さい。夏の用意です。中の紙入と時計のくさはり信男兄からであります。信男さんは最近太子の『法華経』を中心とし『御集』研究等信念の方から国文学の研究に進まれてゐます。一心もつて信男さんの健康と成業につくしたく、拙き身乍らも念じてゐます。先日史学会で研究発表しました

節「ひがしをんな」先生がふかく御賛成下さいました。多分大兄から承つた方と存じます。(中略)最近は弘法大師の研究のまとめで苦心してゐます。

御身御大切にして下さい。いろ／＼申上たいこと又あとから申上ます。信男さんからもよろしく申上ました。この御たよりのつく日は梅木兄の御誕生日でせう。

母よりもいつも大兄の御ことなつかしく申し参りみ心ふかくよろこんでゐる由たよりしてきます。万事御遠慮なく御相談下さい。

——『伊都之男建』誌(昭和十一年八月号)所載——

「便り」——本郷・朝風寮から——(昭和三年六月二十二日、東京高師生、副島羊吉郎宛)

拝啓 御たよりにまことにありがたくいたゞきました。御変りなく何よりと存上ます。この一学期は春徳島に於て相共にちかひ語りしところを實現する途を辿り得て眞にありがたいことであります。われらは相共に力を協せて永久の大みこゝろを仰いで教化のみちにつくさんことを念じてゐます。試験で御忙しいことでせう。御身御大切に祈上ます。そして七月三日ごろ御元氣にてこの寮へ諸兄と共に御出下さることを待入ます。藤井信男様よりもよろしく。相共につとめ乍ら御噂さ申してをります。敬白
仲、広瀬、吉田三兄に呉々もよろしく。

——『若竹文庫便り』六十三・六十四号(昭和五十一月)所載——

「便り」——徳島から——(昭和三年八月十日、東京高師生、副島羊吉郎宛)

拝啓 御たよりを下され厚きみ心のほど真にうれしくお目にかかつたやうな気がいたしました。御健やか

にあらせられ安心欣喜してゐます。大兄の御ことは日夕申上て御なつかしく偲び上ます。

さま／＼の思ひ出ゆきかひ、かなしきみ心に御郷里の地に夏を迎へられしかと偲び居ります。同じ心に大兄のみ上を思ひ、共に都にありし日をなつかしみ、又共にゆくべき信の道を念じてゐます。われらは力弱くとも真に協力して難しとて思ひたゆまず教へのみちに永久の大みこゝろを仰いでつとめんと念じてゐます。このわれらの信と協力は亡き御弟君様に対する永久の御弔ひになると信じてゐます。亡き人の心は偲ぶ心に現実に生き、又信念と協力のうちに永久に連がることを念じてゐます。大兄のみ心を同じ心に偲び、思ふこと言葉に申しつくされませぬ。何卒御身御大切にして下さい。大兄にはゼヒ当地へ御出下されたく、二十日朝御到着下さつたら真に都合よく存上ます。その日を切におまわいたします。どうか御大切にして下さい。梅木兄もいつも大兄の御こと申上られてゐます。

——『伊都之男建』誌（昭和十一年八月号）所載——

ふるさとに（昭和三年八月十九日、一高生、新井兼吉宛。同氏は徳島を訪ねしあと京都に対三高戦を応援して
帰京）

ふるさとにたづねたまひしみこゝろを思ひいでては君しのぶかな
なつかしき君がたよりをよむときもつゝがなかれと祈るなりけり
西の京のこと終へましてすこやかにかへりきまさんその日をぞ待つ

——『伊都之男建』誌（昭和九年七月号）所載——

とき／＼も（昭和三年八月二十日）

とき／＼も山にのぼりて雲はるか君住むかたをなつかしむかな
君が住む甲斐のみ山も今ごろは虫のさやけくなきいづるらむ
みたよりをよみまつりゆけばみこゝろはうつしく胸に通ふ思ひす
もろともに都にありて聖の皇子の道を学ばむ時のまたるゝ

共にゆけば（昭和三年八月徳島に先生を訪問したる際、我ひとり樹治会の人々と中津峯山に登り、先生後に
残られし時作られし歌——新井兼吉識す）

共にゆけばうれしからむをいかにしてこゝしき山を君がこゆらむ
共にみし中津の峯の巖が根にわきたつ雲を今みるらむか
もろともに君をかたりて山寺の灯かげにうつる姿を偲ぶ

——『黒上正一郎先生遺歌集』（昭和十五年十月・日本学生協会刊）所載——

船中に（昭和三年九月五日、一高生、新井兼吉宛）

船中にしたゝめませしみたよりをくりかへしよみて君しのぶかな
ともにあひし向が丘の学び舎を今ははるけく偲ぶなりけり
秋風もきよくわたりて窓のべは虫のさやけくなきいづるらむ
その窓にかしこき友とみんなみの国かたりますみ姿を思ふ
もろともにおくりし月日なつかしみ又こん春をいまよりぞまつ

——『伊都之男建』誌（昭和九年七月号）所載——

「便りとうた」——徳島から——(昭和三年九月十二日、一高生、新井兼吉宛)

その後おかはりもありませんか。御伺ひ申上ます。全く秋のころとなつて今宵はしづかな雨に虫の音もしめり、共にゐし夏の日が切に思ひ出されます。日夕東の空向陵のあたりを思はぬ時はありません。私は御蔭で無事勉強してをります。今月中に研究の一部をまとめて国語の教室の方へ出しましたらすぐ上京の用意をいたしたいとそれをふかく待てゐます。大兄のお心はいつもわが心にその影をうつし痛切にお察し致します。さまざまの苦しき思ひあらせらるゝでせうが何卒われらの協力の心を念じ力強く進んで下さい。そのうち上京、したしくお話の日をかへすゝ待てゐます。

その後御勉強の方も追々すゝまれてゐることゝ存じます。今から御方針が定つてゐるのでゆつくりなさつてよいと存じます。真実の態度を永くつらぬけば必ず業は成されます。共にそれを念じて励んでゆきませう。『万葉集』なども少しづゝ御覧になつたらよいと存じます。『万葉集』についてむつかしくとも『古義』を御参考になることがよいと存じます。真面目な研究の極み、その著者は必ずしも偉大な芸術的天才を有してをらぬのに、真に万葉詩人の心理に徹してゐる立派な文献としてそのことだけでもわれらに教へるところ多きを感じてをります。

『三経義疏』を日々拝誦してをりますが、何節を開きても聖王のかしこき大御心は明らかにかゞはれ、御身を国民と共にゆくべき永遠の道の実現にさゝげ給ひしみ心の胸に通ふをおぼえます。上に大御心を仰ぎ、又遠く共にすゝむ兄等を思ふ時、拙くして力なき身もいつも光明をあたへられます。

種々申上たいことありますが申上つくされません。何卒御身御大切に祈上ます。母も祖母も御出ありし日のことときゝも申しよろしく申出ました。又あとより御たより申上ます。

しばらくは語らはざれどみこゝろはあけくれこゝに通ふなりけり
君ましゝ室にふでとり向陵の寮の夕べを思ひてあるかな

さまゞの世のくるしみを負ひつゝもつよく生きなむ一つ心に

はるゞと黄ばみつゞくみのり田の彼方に青く中津峰みゆ

秋のそらたかくも晴れて山肌の青くもすみし色のさやけさ

夕まぐれ共にのぼりしその山の松の林のなつかしきかな

ときゞも共にあし日を思ひ出て君がみことをなつかしむかな

なすわざの早くすゝみてもろともにかたらんときをたゞに待つなり

——『伊都之男建』誌（昭和九年七月号）所載——

あけくれに（昭和三年九月十四日、一高生、新井兼吉宛）

あけくれに共にあし日を思ひ出てひんがしのそらなつかしむかな

なつかしきたよりをよみて君が上に恙なかれとたゞに祈りけり

偲びあひ又たすけあひうつしよのさがしきみちを共にゆかなむ

——『伊都之男建』誌（昭和九年七月号）所載——

名残惜しみし日（昭和三年九月十七日、東京高師生、副島羊吉郎宛）

つきぬ名残惜みし日より十日あまり五日は早くすぎにけるかな

旅にしてよせたまはりしみたよりをいかにうれしく我はよみけむ

君思へば常に力をめぐまれてかしこきえにしよるこぶ我はも

とき／＼も君がのらせしみことばをこのふるさとに思ひいでつゝ

桃山のみさゞ詣でましゝ日のみ心共にをろがみまつる

偲びあひ又たすけあひもろともに大みこゝろの道辿らなむ

雲幾重隔てゝあれどうつしよに一つ心に通ふ我らはも

弟君を失ひましゝみ心もあけくれ我に通ふなりけり

この心まことの道をあらはさんみ心の上に生きてあるらむ

日の本のみ教のみちもろ共に辿りあらはさんつとめは重し

君がみ上はるかに祈りあけくれに恙なかれと願ふなりけり

——『伊都之男建』誌（昭和十一年八月号）所載——

朝のそら（昭和三年九月十七日、一高生、新井兼吉宛）

朝のそらみどりに晴れて神山の頂の岩雄々しくも見ゆ

朝ぼらけ杉むら深く霧こめて香の煙りもうちしめりつゝ

山ふかくみ寺まうでゝ君と共に暮しゝ夏の山しのびたり（中津峰山のこと）

山と海のはるけきかなた君がすむ空をあふぎて思ひつきずも

「便りとうた」（昭和三年九月十九日、一高生、重松鷹泰宛）

日夜こゝに大兄のみ上を思ひ念じしたひ参らせませす。何卒御すこやかに御勉強祈上ます。秋のそらすみわたるまゝにムヤの海が思はれます。いろ／＼と語りたひこと、かきつくされませせん。母も祖母もくれ／＼もよろしく申上ました。

裏山の松の林に新月のひかりさびしき秋の夜半かな

白壁にてらす月かげ虫なけばわがこの胸にしみわたるかも

白壁にかゞやく月にはしきやし君をしのびて我は文かく

秋の夜のふけゆくまゝに虫の音のさえてはものを思はするかも

はしきやし君を弟よと共にたのみわれら二人は今生きてあり

裏山の小夜のすがたをゑがきみてわを偲びます君にさゝげむ

なつかしき君が姿をゑがきみて燈下しづかに文をよむかな

うつしよに君とあひ得しよるこびをあけくれ思ふ胸底ふかく

千よろづの人ある世にうれしくも我らの縁のふかくしありけり

はしきやし君が心に又われら共に生きある思ひ知りまさむ

二十とせの日は早くもくれゆけどわれらがまことの縁はつきせじ

「便りとうた」（昭和三年九月二十一日、東京高師生、副島羊吉郎宛）

拝啓 なつかしき御文みうた、いかばかり力づよく拝誦しましたか、何事も言葉には申しつくされません。その後御すこやかに御上京御いそしみのよしまことにうれしく且安心仕りました。月松会のこと万事承り、ありがたく第一回の御状況を拝察し、私は真に新しき大いなる力をあたへられました。今後大兄たち四兄と共に生涯永き協力を念じて一学期の怠慢は言はず、新しき学期と共に修養研究と教化実現のみに大御心の照護のもとに誓つて努力致しませう。何卒三兄にもよろしく御つたへ下さい。あとより四兄あての御たよりを差上ります。広瀬兄の御住所おしらせ下さい。御身御大切に早く参る日を待つてゐます。

（編者註 月松会とは当時東京高師にあつた研究団体で信和会の前身）

数々のみうたいくたびりかへし迫るみ心に涙ながれぬ
みことばは同じかれどもよむごとに新たに迫る君が心はも
にしひがし別れて住めどうつしよに一つ心に通ふ我らはも
君と共にながめし山も秋かぜに木の葉わづかに色づきにけり
まことなるみ教へのみちゆくところ末通らんと信じて励まむ

— 『伊都之男建』誌（昭和十一年八月号）所載 —

秋の夜の静けきまゝによむ文の数重ねまさむ君思ふかな

日のもと遠つみおやのみ心の若きみ胸によみがへるらむ

うつしよに君とあひ得しよろこびをあした夕べに思はぬときなし

虫の声しづかにあけて向陵の秋のあしたはさやかなるらむ

君がみ上思ふにつけてひむがしにかへらむときのまたれけるかな

——『伊都之男建』誌（昭和九年八月号）所載——

「便り」——徳島から（昭和三年九月二十七日、東京高師生、副島幸吉郎宛）

第二回の会合の御ありさま承りまことに力づよく存じ上りました。日々大兄の御ことを念じ月松会のことを祈り上げてをります。早く参るべくねがひつゝ筆を急がせてゐます。会の歌のこと、その他何れ充分及ぶかぎりつくしたいと思つてゐます。三井様からくれぐれよろしくとのことであります。何れ後便にて申上ります。諸兄へ何卒くれぐれよろしく。この二学期は益々相たすけて努力してゆきませう。

「便りとうた」（同日同人宛）

御葉書ありがたく拝誦しました。おかげのよいかごと今日の風さむきにも案ぜられます。何卒暖くして、用心をせられるやうに念じてゐます。来月上旬中にどうにかしてゆきたく、その日をのみ切に待てゐます。何卒諸兄によるしく御つたへ下さい。いろ／＼申上りたいこと数限りありませぬ。かへす／＼御大切に祈入ます。

白壁にさゆる月かげ寒き夜は君をしのびてたへがたきかな

——『若竹文庫便り』六十三・六十四号（昭和五十五年一月）所載——

白壁に（昭和三年九月二十七日、新井兼吉宛）

白壁にさゆる月かげ寒きまで今年も秋はふかくなりけり

君がよりし机したしくわがよれば君がみ声のきこゆる思ひす

月さゆる今宵は君も向陵に南の国を思ひいづらむ

東西に別れてあれど同じ月仰ぎて偲ぶと思ふもしたしき

とき／＼も君がみ上をきづかひつ共につとめむときをまつかな

——『伊都之男建』誌（昭和九年八月号）所載——

小夜ふけて（同日同人宛）

小夜ふけて虫の音さゆる窓のべにひんがし遠く君しのぶかな

——『黒上正一郎先生遺歌集』（昭和十五年十月・日本学生協会刊）所載——

「便りとうた」——岡山より——（昭和三年十月四日、東京高師生、副島羊吉郎宛）

只今岡山につきました。大兄達のいます都の空をこゝにはるかにのぞんで明後日は同じ土をふみうることに切に／＼たのしんでゐます。申上たいことはかぎりもなく、只管心を一つにし力をあはせてとのみ念じてゐます。荷物もありませんから御安心下さい。月曜夜おたづね下さい。諸兄と共に。

なつかしきはらからいますひんがしの都はたゞにこひしかりけり
遠けれど今は君ますむさし野と一つの土につながりてあり
あけくれに偲び合してひたすらにあひみんときを契りまちにし
とこしへを照しますますみ教えを共に讃へん時のまたるゝ

——『若竹文庫便り』六十三・六十四号（昭和五十五年一月）所載——

拙き身を——上京の途次、岡山から——（昭和三年十月四日、一高生、新井兼吉宛）

拙き身をまぢますみ心思ひても心急がるゝ旅路なりけり

今ごろはともしびあかき寮のまどに文よむらむとみ姿を思ふ

一月を文とりかはし間近くもあひみむものと力を覚ゆ

——『伊都之男建』誌（昭和九年八月号）所載——

向陵の——上京後——（昭和三年十月十一日、一高生、新井兼吉宛）

向陵の木陰はるかにかくれゆく君が姿をおくりてあかずも

君と共に一路はるけきその道を辿る心は力ありけり

——『伊都之男建』誌（昭和九年八月号）所載——

もろともに―徳島から―(昭和三年十月二十八日、一高生、新井兼吉宛)

もろともに一つ机に文よみし秋の夕べはうれしかりしか

聖王のかしこき縁に君とあひしそのよろこびは思はぬ日もなし

にしひがし別れて住めどみ心はあけくれ我に通ひくるなり

日の本の若人のみちもろともに雄々しく進まむ助けあひつゝ

―『伊都之男建』誌(昭和九年八月号)所載―

夕雲の―徳島無養から―(昭和三年十月三十日、一高生、新井兼吉宛)

夕雲のうつらふ海をながめては君がきましゝ日をしのぶかな

月清き秋の夕べを君がこと共にかたればうれしかりけり

―『伊都之男建』誌(昭和九年八月号)所載―

「便り」―徳島から―(昭和三年十月三十一日、東京高師生、副島羊吉郎宛)

拝啓 この度は久しぶり都に会し、共に語り共につとめ得しことを衷心感謝して居ます。その間は又度々御たづね下されありがたくふかく御礼申上ます。かへる夜はわざ／＼御見送り下さつて忝く御別れの一瞬の切なる心永く胸によみがへり居ります。三井様とは三日の間お世話になりつゝ話承り二十七日無事帰省仕りました。ムヤをたづね昨夜帰宅無事ですから御安心下さい。本会の重き使命とわれらがかくもあひ得し貴き御縁を思ふとき郷里にあることがすまない心地し、言葉にあらはし得ませんが、何卒しばらくの間ですからおゆるし下さい。来月末は(二十七日ごろ)必ず参り共におちついてつとめたく、念じてゐます。この次の

会は梅木大兄の御寄稿をよみ合せて研究会として下されたく、必ず必ず意義ふかきことと存上ます。その前に御集は必ず拝誦さるゝことにしてその後研究をと祈居ります。四兄へ四通御たよりをしたゝめつゝありますので、一度に出さうと思つて御無沙汰しました。御心配かけはしないかと後悔してゐます。今日中に出します。一寸会のことのみ申上ます。何卒おかげなどひかれぬやう御身御大切に祈入ます。三兄にくれぐれもよろしくおつたへ下さい。

三井先生も本会にあつきみ心をおよせ下され居ります。

——『若竹文庫便り』六十三・六十四号（昭和五十五年一月）所載——

なつかしき — 徳島から — （昭和三年十一月三日、東京高師生、副島羊吉郎宛）

なつかしき君がみ文にみ心の声きくごときよろこびおぼゆ

にしひがしはなれてあれどうつしよに一つ心に通ふわれらはも

君と共に机ならべてかたらひしともしびのもと君に文かく

かしこくも一つの信を契りあひて進む心はつよくもあるかな

源のにごらばいかに末の流れ清めゆくとも力あらざらむ

国民のすゝまん道のみなもとを養ふわざを勉めんとするか

弱けれど重き使命を身におびてこの世にわれらめぐりあひけり

大御心照しますますかしこさに力強くも共にすゝまむ

もろともにたすけかはしてすゝみゆく心はかなはむ神のみ心に

拙くてみにくき身なれど共にすゝむ一つの信に清められゆく
なつかしきわれらが会を思ふことつきぬ力を我にめぐめり
とき／＼もいかにいますと雲とほくひんがしのかたを仰ぎみるかな
夕ぐれて眉山のもりに灯びの見えくるときは君しおもほゆ
学び舎にひと日のわざを終へまして夕ぐれおそくかへりまさんか
もろともにつどひます日はひとりなれど心は共につどふこゝちす
目にみえぬ心の通ひうつしよにかしこきめぐみのあるをかしこむ

——『伊都之男建』誌（昭和十一年八月号）所載——

「便り」（昭和三年十一月三日、東京高師生、副島羊吉郎宛）

謹啓 その後益々御すこやかのよし安心仕りました。御二人にて御たより被下うれしく力づく拝読いたしました。

今日は明治節にて、天皇を偲び奉ることいやふかく大御うたを拝誦して共にゆく道を念じて居ります。伝教大師は「大道おこらざれば大人おこりがたし」と申されましたが、永遠の人世を照させ給ふ御人格を仰ぎその大みこゝろに帰趨の大道を求めてこそ、まことの生きたる教育原理は体得せらるべきを思ひ、こゝに天皇を仰ぎ聖徳太子を憶念して共にすゝむことは、これまことに現代国民生活の終歸たるころの大道を求め辿ることであり、この御精神にもとづきてはじめて大人を養成することを得ることゝ存じます。教育は内心の問題を根柢とするために外に華々しくなくやうですが、二十年三十年先の国民生活を卜すべき重大の事

業であります。古への僧侶に代るべき神聖なる使命を有することであり、教育に志す青年は真に内的な意力を以て精進しなければならぬ貴き使命をもつものと存じます。こゝに本会の使命はまことに重大であり、又深甚の意義をわれらのつとめに有することを痛感いたします。現代はあまりに何ごとも制度や形式を先にたてすぎる弊害が日本の社会にあるやうに考へます。「事大小となく人を得て必ず治む」と太子は仰せられましたが、制度政策は勿論大切ですが、その意義あるか否かは之を運用する人の問題であると存じます。それ故に教育のことも、実際の制度や運用を勿論常に考ふべきですが、そのもとづく所の教育者の精神と生活が根本であり、又各学術に対する見地と意義ある修得が大切であると思ひます。本会はお互の信仰修養の団体たると同時に、高師の内に対し、又将来は我国教育界その他に対する教化的使命を有することと存じます。われらがこの世にあひ得て信を共にして勉め得ることは真に力づくよくありがたきことにて、この会につくすことは即ちみ国につくすことになるかと存じ、この御縁をいつも貴く思つてをります。高師の中に日本魂聯盟の成申会生れしよし、そして共鳴者もあることを聞いて力づくよく存じました。本会の内容を以てすゝめば公開の節は相当力づよき展開をなしうるものと期せられます。三学期か四月か、何れにしてもそれをなす迄、我らお互の勉強をしつかりして置いて真に力ある活動をしたいものと存じます。大兄にも何卒御身御大切になし被下たく、私も一生懸命共にと願ひ居ります。大兄がゐたまひし室に筆とり、ありし日をしぬびつゝ、ひんがし遠くしたひ参らせませす。二週間の思出を辿りつゝ今月末共にあはん日を切に待上ませす。

——『伊都之男建』誌（昭和十一年八月号）所載——

別れまつり（昭和三年十一月三日）

別れまつり十日はたてど時々も間近くゐますこゝちするかな

にしひがし別れてすめどうつしよに一つ心に通ひて生きあり

ふるさとも秋ふけゆきて裏山の林のみちは落葉敷きけり

とき／＼も山にのぼりて友います本土のかたをなつかしむかな

あけくれに君をしのびてもろともにかたらむ時をたゞにまつなり

——『黒上正一郎先生遺歌集』（昭和十五年十月・日本学生協会刊）所載——

なつかしき——徳島から——（昭和三年十一月八日、一高生、新井兼吉宛）

なつかしきみふでのあとをいくたびか我はながめぬあかぬ思ひに

拙き身を偲びたまはるみ心にわが世に生くるよろこびを思ふ

秋ふけて故郷のやまも木々の葉の色づく見れば君の偲ばゆ

共にありしその日も今は二月あまり十日のまへとなりにけるかな

年月は夢とすぐれど共にありし思ひはひと時の思ひにあらす

小夜ふけて我一すぢに勉むる夜は君向陵に文よますらむ

拙けれどみ教のみち今の世にあらはしぬべきつとめをねがへり

君とわがまことの信を共にして道につくさむつとめははてなし

君がこゝろ言の葉草につきぬともなほ通ふかな今わが胸に

うつそみの人のいのちのさびしさも共に思ひて我らは生くるか

偲びあひ又助けあふそのことにかしこきみちを念ひつくさむ

筆とりて歌しるす夜もわがまみにうつるは都の学び舎のあたり

向陵の木の間にとほかくれゆくみ姿あかずみまもりしかな

すこやかにいませといのるおもひこそ通ひて君をまもらむと思ふ

——『伊都之男建』誌（昭和九年八月号）所載——

「便りとらた」——徳島から——昭和三年十一月十三日、東京高師生、副島羊吉郎宛

謹啓 その後お変わりもありませんか。

この度は御大典にて国をあげての奉祝に賤の身も共に祝ひまつりうることを有がたく感佩致して居ります。今は御演習も終らせられ奉祝の日に共に御つとめのことと拝察いたします。先日、田中先生御たづねの由真にうれしく存上りました。母校を思ひ母校のことにつくさるゝことがわれらの会のつとめの第一歩と存じます。

来春の積極的活動の準備を今年はいたしたく、お互に十二月にしっかりと勉強させよう。その日を楽んできます。

みたよりをよみて

くれたけの代々木の宮ををろがみて大御心を仰ぎましかむ

若き子が一つ心に祈ります心をあはれとみそなはしけむ

その日はも同じこゝろにひんがしのかたををろがみ祈り合せき

いかならんことにあひても誠なる道をふめとふ大御歌はも

まことなるみちの教へをつたふべきつとめは重く我らにかゝれり
雲とほく別れてすめど偲びあふ心に生きて我ははげめり

御身御大切に念じ上ます。

——『伊都之男建』誌（昭和十一年八月号）所載——

ひとりして（昭和三年十一月十七日）

ひとりしてともしびのもと筆とれば友の上のみ偲ぼるゝかな

小夜ふけて時雨の音のさえまさる時しぞ思ふ君がみ上を

君もまた南のそら思ひつゝあかき燈下に文よますらむ

もろともに勉めむわぎを偲ぶにも上らむときのまたれつるかな

あけくれに学びの庭につどひましてかたらむ友のみ姿思ふ

——『黒上正一郎先生遺歌集』（昭和十五年十月・日本学生協会刊）所載——

なつかしき（昭和三年十一月十七日、一高生、新井兼吉宛）

なつかしきみたよりを今日もひらきよみて深きえにしに生くるを喜ぶ

いそがしき学びのわざに疲れては君がたよりをひらきよむなり

疲れたる身も朝夕にみことばの力によりてよみがへるかな

君もまた学びの窓にいそがしく今宵も更けて勉めますらむ

もろともに祈り合せて一寸ちの道を辿らむこゝろに生きあり

——『伊都之男建』誌（昭和九年八月号）所載——

うすざむき（昭和三年十一月二十日）

うすざむき風ふく夕べ新月のひかりは冴えてさびしかりけり

裏山の木々のもみぢもうらさびてわがふるさと秋ゆかむとす

暮れてゆく空をながめて君いますひんがしのかた我はしたふも

今ごろは君いかにぞと筆をとるときにも思ふ勉むる君を

向陵も今は落葉のちりしきて筑波おろしの窓をうつらむ

しばらくも病みにし友も今ごろは寮にかへりてかたりますらむ

君思ふこゝろのうちのみこゝろはわれとかたれり目にはみえねど

君とあはむその日も日々に近づきてわが胸底に力をおぼゆ

夜をとほし日を惜みつゝとるふではかどらざるが苦しかりけり

かぎりなき大みこゝろをあらはさむわざの難きを今更にしりぬ

うつしよのまことのみちを極めましゝ大きいのちのあとのかしこさ

かしこさに胸うたれつゝ日の本の教へのみちを今思ふかな

今ごろは君も都にこの月を仰ぎて遠く偲びますらむ

——『黒上正一郎先生遺歌集』（昭和十五年十月・日本学生協会刊）所載——

便りに代へて（昭和三年十一月二十日、東京高師生、副島羊吉郎宛）

夜をとほし日を惜みつゝとるふではかどらざるが苦しかりけり
かぎりなき大みこゝろをあらはさむわざのかたきを今更しりぬ
かく思へど共にすゝまん一すぢの道と思へば力をおぼゆ

今ごろは学びの窓もいそがしく夕ぐれおそくかへりますらむ
木々の葉の散りしく庭の一つなるこゝろに語らん友偲ぶかな
なつかしと思ふこゝろに君と共にかたらひてあり目にはみえねど
御身御大切に祈上ます。時々御たより忝く拝誦してゐます。

——『伊都之男建』誌（昭和十二年八月号）所載——

しばらくも（昭和三年十二月十六日）

しばらくも君みぬ思ひに今宵はもいかにいますとたゞにしのぶも
しみ／＼とかたらむと思ふ今宵しも君がおとづれあらねばさびしき
風さむき都のそらもけふまれにあたまかなれば心なごみぬ
一つなる心につどひあたらしきわれらの会のすゝむうれしき
向陵の前をゆく時君います寮のあたりを懐みみる

——『黒上正一郎先生遺歌集』（昭和十五年十月・日本学生協会刊）所載——

昭和四年——三十歳——

もろともに（昭和四年一月一日、一高生、重松鷹泰宛）

もろともに一つ心にたすけあひてすゝまん春は力ありけり
うらさむぎ都の住ひもはしきやし我がはらからを思へば暖し
はじめての異郷の春もはらからの君を思ひてむかへけるかな
君がため幸ある春を祈る身はいやもろともにもまもらんと思ふ
ふるさとかへりし母も今ごろは君がことなど思ひいづらむ

——『伊都之男建』誌（昭和十一年八月号）所載——

ありがたき（昭和四年一月一日、一高生、広瀬勝雄宛）

ありがたき君がおとづれあけくれに思はぬ時なし君をしぬびて
冬やすみはてゝ都にかへります日をしたのしみて我は養へり
もろともにたすけあひつゝこのともしいやつとめむとひたすらねがへり

——『伊都之男建』誌（昭和十年十月号）所載——

たびくくに

たびくくにみ話きしころをときくも思ひいでつとむるかわれは
ときくも友とみうはさしまつりてみわざのあとを追ひてすめり

——『靑人草』誌(昭和四年二月一日号)所載——

しばらくも——森川町から——(昭和四年二月十六日、一高生、田所廣泰宛)

しばらくも君みえざればいかにぞと向ヶ岡の寮のみ思ふ

小夜更けてガラスの窓に照る月のさやけきときは君しのぶかな

大ぞらは隈なく晴れてさむき夜は星のかげさへものすごきかな

大ぞらの星のひかりをつくくとながめて今日も君を思へり

はらからも共になければはらからとたのみあひつと俱に生きなむ

——『伊都之男建』誌(昭和十年七月号)所載——

「便り」——大洗にて——(昭和四年三月七日、東京高師生、副島羊吉郎宛)

今太平洋海岸に來り岩うつ波のとろろきを聞きつゝ、はるかに大兄達を偲びて健康を祈上ます。広瀬、吉田兄らよろしく御つたへ下さい。七日夜帰京いたします。

——『若竹文庫便り』六十五号(昭和五十五年五月五日)所載——

ひさしくも——本郷から——(昭和四年三月十五日、一高生、新井兼吉宛)

ひさしくも得ざりしふみをよみかへすおもひによみぬ君がことばを

君がふみみれば偲ばゆにしひがし文に心を通はし、日を

春さむき水戸の旅路に思ふことかたりし夜半はとはに忘れじ

友とよぶこの契りよりみ心の開かれそめしときぞうれしき

いかならむことにあひてももるともに一つ心にたすけあはなむ

——『伊都之男建』誌（昭和九年十二月号）所載——

「便り」——徳島市船場町から——（昭和四年四月四日、一高生、荒瀬達也宛）

その後お変りはありませんか。今郷里の春に諸兄を迎へ寢食を共にし、一つ心に語り又つとむることを得て新しき力をめぐまれてゐます。我らの一つ心より濁れる世に真実の道を開き、若き日本を荷ひて立つべきまことのわざは生れんと信じてゐます。今共に大兄のみ上を偲び筆をとるとき、われらの胸はつきざる思ひに充されます。はるかに御健康を祈つてゐます。

（荒瀬記）このみ文は昭和四年四月四日徳島の消印にて新井兄、河野兄、田所兄、市川兄の信に溢れたみたよりと共に郷里へ戴いたものです。将に昭信会が生れんとする時のみたよりですのでみな斷乎たる祖国防護の決意を示され、今尚身に沁みて仰がれてゐるみ言葉のかず／＼です。

——『伊都之男建』誌（昭和九年十月号）所載——

「便り」（昭和四年四月十九日、「原理日本社」宛）

謹啓 御尊書ありがたく拝誦せしめました。梅木君の逝去はまことに突然のことゝて茫然自失、日々寢食

も安からず悲哀の裡に過し居ります。たゞ故人が最後迄も貫きし信を思ひては、なすべきわざをこのかなしみの中より念じてゐます。生前故人へたまはりし厚きみ心を衷心感佩し故人の心も師友のみ力により開展せられんことゝ存じ居ります。

——『原理日本』誌（昭和四年五月号）所載——

「便りとうた」（昭和四年四月十九日、一高生、田所廣泰宛）

謹啓 この度は郷里徳島へ四人の方御そろひ御たづね下され、故山の家に寢食を共にし、共に大御歌を中心として学び、又南海の春を郷里の勝地に語り得ましたことは真にありがたきこととございました。あつく感謝申上ります。思ひ返すだになつかしさにたへません。又一夜二人しておそく語り合ひしそのときの心を偲び、その心永久を貫かんを思ひ、新らしき力をめぐるゝと共に兄のみ上を切に偲ぶのであります。

吾等五人、太子の御墓前に二度まうでまつり、一つ心に大き御心ををろがみて我らの信を又なすべきわざを誓ひまつりしことはまことに不可思議の御縁感激の外ありません。拙なけれど大御心は必ずこの信をみそなはし守りますことを信じ、不請の友とのらせし大きいつくしみの我らが上を照しませますを念じ、つきぬ力をめぐるゝ次第であります。千三百年ひそみてあらはれざりし偉大の御生命が今我らの上にのぞませ給ふ、こゝに基くわれらのわざを思ふとき、そして今のみ国のありさまを思ふとき、唯一つの心にいひあらはしがたき確信と又悲壯の努力を誓はしめらるゝ次第でございます。

梅木兄は遂に逝去せられました。心よりわれらを愛し、病軀をさゝげ困苦の中を唯一つの信を貫き戦はれたる故人の生を思ふとき、わが心は全く堪へ難き思ひに迫られます。個人としてはよろこびもかなしきも、よしもあしきも互に知らざるなく語らざるなかりし間であり共に身をさゝげて助けあひし仲でありました。

公にして得がたくあひがたきみ国のための偉才と人格とを敬し信ぜしものでした。このかなしみにあひ茫然自失今寢食もやすからず、むしろわが生の死よりも苦しきを思ふのであります。

たゞこの暗黒の間より故人のあらゆる障礙と戦はれし悲壮なる信の実現のあとを思ひ、又その生涯のねがひしところを偲び、聖王の大御心を仰ぎまつりては故人の志を体して共につとめん心が、そして兄等とお目にかゝり得て共に力を協せてすゝまんとする事実が、そこに新らしく連らしめられて再び身心を撰持せられてをります。梅木兄の靈前にいたゞきし長文の御悼詞をみたまの前に誦しまして、真にありがたきみ心に感泣いたしました。故兄のみたまをわれらの間に、又祖国日本に生かしまつらんのみことばは、肝に銘じ、胸に徹しました。昭信会に最後のねがひを托してゆきし心をかく迄御心にをさめましゝかと、感激せしめられた力をあたへられました。共に我らの憶念とつとめに永く追悼のいとなみをなすべく念じてをります。なくならぬ日も大兄達の御ことをふかくなつかしみ申してゐられた由でした。あの御文をいかに亡き人はよろこばれしかと衷心感佩いたします。

裏山のさくらも散つて早若葉照る日となりました。共に寢食を俱にせし日を思ふとなつかしさにたへません。信を一つにし、たすけあひゆく深厚の縁を悠遠の世に思ふのでございます。新学期も来つていよ／＼つとむべき日となりました。我らの才は足らず、我らの生は短くとも、この信にして雑ならず、この努力にしてたゆまずば、必ずねがひは貫かんと信じてゐます。聖王は「信は義の本なり事毎に信あるべし」とのたまはせられました。日常周囲の事毎に、向陵の手近き御生活の事毎に、信の表現が、大御心のあらはれが示さるゝことによつて、その近きことによつてわれらの会の精神は具体化され、将来に於ける社会的活動の根底が養はれゆくことゝ存上ます。私も共にちかひて会のつとめに立たんことを念じてゐます。いろ／＼御話申上たきことは無量ですが申上つくされません。

大兄にも何卒御身御大切にして下さい。京都の駅にて御別れせしときの一ときの心を今胸にうかべつゝはるかに偲び祈りてこの筆をおきます。あとよりくはしく御たより申上ます。母祖母みなよろしく申上ました。

春雨の音もさびしく小夜ふけて君の寮舎のあたりを思ふ
母君のみもとにつどひしそのときを思はぬ日なし時はふれども
かなしくも雄々しき心四人してかたりましけむみ姿偲ばゆ
わがくらしき心にめぐむみ力を友のこゝろに謝しまつるかな

十九日夜半しるす

乍末筆御母上様へよろしく御言上ねがひます。

述懐

春雨のふる夜しづけくひとりして思ふことみなかなしかりけり
いかならんことも忍ばんとちかひしもなほ忍び得ぬこの心はも

たよりのあとに

ふるさとの春とひましゝみこゝろは日をふるごとになつかしきかな
ふるさとの春ふけし夜にふたりしてかたりしことはとを貫かむ
共にありし部屋と思へばあたらしき思ひに住みつ同じき部屋も

ふるさとの春ふけし夜に二人してかたりしことはとはに忘れじ

春雨のおときつつきぬ心を此にとどめます。

——『伊都之男建』誌（昭和十一年八月号）所載——

「便り」（昭和四年四月二十四日、一高生、新井兼吉宛）

拝啓 度々御懇ろの御たよりをまことにありがたく頂きました。あつきみ心のほど感佩いたします。その後御健勝のよし安心仕りました。梅木君の御逝去は全く突然のことにて驚きかなしみの余り寝食ために安からず暗澹たる日々を送つてゐます。兄弟以上にたのみとし拙きいのちをさへげても回春の日のあらんことを祈り且つとしたのでありますが、今はすべて空しきことになりました。殊にあの人格と偉才と経綸を抱いて若くしてみまかられしことは、み国のため惜めどもつきぬことでございます。唯故兄のみ心を共に我ら之間に、又祖国日本につきあらはさんことを念ずるのみであります。故人を偲びその志を共に継承してつとめんととのあつきみ心をなきみたまもいかによるこびをられんと衷心ふかく感謝いたします。故兄のいたましき生涯に唯一の信を貫かれし悲壯の生活については共にかたり合す日を待つてゐます。内的外的いづれよりも身にあまる痛苦を荷はれつゝ、尚国をうれひ人を愛し不断の精進をつゞけられし生涯は、短くともすでに完きものであります。故人を思ふとき、いかなる苦難をもいとほざるべきまごゝろをもち、戦はねばならぬことを拙き身にも切にめざめしめらるゝ次第であります。

この春は約半年の月日をへて郷里徳島へ御出下され、五人共に寢食を同じうして生活し得られたことを衷心うれしくありがたく思つてをります。二週間の日も全く束の間なりしこゝろして惜しまれましたがその共

に送りし日の心は今後重き使命を荷ひて進むべきわれらのわざを育くむ大いなる力となることを思ふのであります。共にありし徳島の日をかへりみて感慨真に無量であります。南海の春の自然に抱かれて共に友の心とかたり、又共に学びし事は幸でありました。梅木君にも皆でお会ひ遊ばせしことは不幸の中にも幸なことでありました。又ゆきとかへりにしたしく聖徳太子の御墓前にまうでまつり、とこしへの世を照します大みこゝろを仰ぎ、不可説の感激に一つ心にをろがみまつりしことは今後のわれらの信の上にも大いなる力をあたへられました。今は向陵の桜も散つて若葉もえいづるころと存じます。われらの生涯のまことのみちの首途を記念すべき五月五日もいよ／＼来らんとしてゐます。かなしき中にもわれらの使命を思ひて大兄達を偲びつゝ更に勉めんと致してをります。何卒御身御大切に祈り上ます。僕も幸無事ですから御安心下さい。近く上京事を共にする日を切に／＼待つてをります。申し上げたいことはつきませんが又御たより申上ます。御かへりのときはどうか御宅の皆様へよろしく御言上下さいませ。

——『伊都之男建』誌（昭和十一年八月号）所載——

「便りとうた」（昭和四年四月二十四日、東京高師生、副島羊吉郎宛）

御手紙まことにありがたくうれしく拝読致しました。この度は真に何とも申上ぐる言葉もなく、大兄のみ心またわれらの間に連る深き／＼御縁を思ひおのづから涙のにじむのをおぼゆるのでございます。八日間の間身心をつくしつゝはらかなりの最後を御みまもり下されしことはわが生のある限り永久の感銘として心より謝し奉ります。神ならぬ身の知る由もなく大和の地に参りしことを慚愧いたします。故梅木兄の御ことを思ひ今後の生涯をいかに送らむと寝食安からぬ日を送つてゐます。身にあまる内的外的のさまざまの苦痛を荷ひ、而もなほ世をうれひ人を愛しその信を貫かれし悲壯の生涯は永久のものであることを思はしめられま

す。その天才を抱いて謙虚なるまごゝろに終始し、又努力精進をつゞけし一生は大いなる教訓でありました。晩年大兄をふかく慕ひ思はれ又大兄によりいつもあつきなぐさめを又信の世界のよるこびを得しめられをられしこと、すべて感謝の至りであります。共に故兄のいのちをつぎつたへあらはさむことのみ願つて居ます。

信和会もかなしき雄々しき信とねがひを以ていよ／＼共にたつべきときとなりました。国民生活の諸問題も不断に現実具体の方策の考究実行につとむることによつて解決をあたへられるでせうが、すべてその帰着し出発する所は精神問題であると存じます。同じ事実でもいかなる精神によつて行はるゝかによつて、そこにあらはるゝところは又その最後に到達するところは異なるべきであります。外的境遇の困苦もそれを内心の信が統御し、制度政策も人のまことによつてすべらるゝとき、そこに濁乱の人生も光明の生を開かれることゝ存じます。不断の動乱の人生は我も人も不完全なるが故にこの信のたえざる実現のために永久にたゞかふ力を自らも体し又教育によつて之を国民生活の根底に養はねばならぬと存じます。人生の悲痛にめざめ共に苦楽を同じうするまごゝろより、教育教化の源としての信といつくしみはあらはるゝことゝ存じます。個我執着を排し国民協力を念じてすべての努力をさゝぐる心を自らも体し、又かゝる国民を次代につくることはたゞこの誠に基づくことを思はしめられます。太子の大ききまごゝろを又かしくも 明治天皇の大みごゝろを仰ぎてつとむる心はこゝに在る事を思つてをります。拙き身は信を共にする友はらからとまもりあひ共にすゝむことによつて一すぢのみちを歩ませて頂くことを感謝してゐます。

大兄にも何卒お身御大切に祈入ます。

御出ありし日を偲び切なる心に偲び上ます。故兄のみ心は必ずわれらをまもりつねに共にあることを信じてゐます。信和会の名のもとにまごゝろを協力を体现して、共にすゝまんことを念じ、つきざる心に偲び上

てをります。

御無事御帰郷諸兄とかたらひましゝことを偲び、無限の感銘を以てこの筆をとらせて頂きました。皆々よろしく申出しました。都にあはん日を切に待上ます。

君ましゝ室にふでとりつくるなきこゝろに君を偲びてあるかな

忍ばんとすれども堪へ得ぬわが胸もなぐさまれけり友を思ひて

かなしくも雄々しくませし亡き人のいのちを共につぎてつとめむ

ありがたき君がこゝろはあけくれに忘るゝ間なし拙き我にも

もろともに偲びあひ又たすけあひちかひし心貫きはてなむ

み国いまみだれてあるを心して身をつくさなむ拙くありとも

ひんがしにかへりたまひてみ友らとかたらひましゝ日をしのぶかな

——『伊都之男建』誌（昭和十一年八月号）所載——

ふでとれば（昭和四年四月二十五日、東京高師生、広瀬勝雄宛）

ふでとれば君とかたらふこゝちしてつきぬおもひのわきいづるかな

もろともにおくりし日を思ひつゝ共につとめむ日をしまつかかな

かなしみの底ゆわきくる力もてすゝまむことを今ねがふかな

——『伊都之男建』誌（昭和十年十月号）所載——

「便りとうた」(昭和四年四月二十六日、「原理日本社」大塚英雄氏宛)

謹啓 梅木兄御逝去について御懇ろなる御弔辞をいたゞきまして厚きみ心のほどつゝしみて感佩申上ます。拙き身に代へても故兄の御回復を念じ力を尽したのでありますが、うつそみの力及びがたく、このはからざる悲しみにあひ茫然暗澹たる日を送つて居ます。み友らのみ心こもりし御言葉をいたゞき、今その間にもなきひとの遺志を念じ共なるみわざにつくさんとのねがひにめざめ初めました。人の多く堪へ得ざるべき人世の痛苦を荷はれつゝ病弱の身を以てその最後迄も国をうれひ、友をいつくしみその信を貫かれし健闘精進のあととは悲の教訓として残されました。拙き身ながらも友と共に遺志を念じみ国につくし永く追悼のいとなみをつゞけんとねがひ居ります。大兄のあつき御心又御言葉をつゞしみ感佩いたします。昨日その御言葉霊前につげまつりました。一昨年共につどひかたりしときを偲び感慨にたへぬのでございます。逝前五日前もはるかにお噂申し上げしことでした。

その後大兄にも益々御健勝でみらせられますか。最近小生も病氣や又さまざまの多忙のこと身边につどひ、永い間御無音にうちすぎ申し省みて慚愧にたへません。いつもながらのみ心をあつく感謝申上てゐます。拙き研究も御送可申上筈ですが、何れ一学期末までめて御一覽ねがひお教もねがつて共につとめんことを期してゐます。内的帰趨を失へる時代の思潮はさまざまの現実問題と共に愈々樂觀をゆるさぬことを痛切に感ぜしめられました。故郷に残る思ひを絶て、友います都に共につとめむため来らん月は上るべく決心して居ります。したしく拝肩の上かたりあはん日をいまより待た上げます。いろ／＼申し上たいことその節にいたします。

時下何卒御身御大切に祈上ます。乍末筆御尊母様へよろしく御言上下さい。

水野、滝口御両兄へくれぐれもよろしく御つたへねがひます。

法隆寺聖靈殿追遠御式の節

ときぐは山にのぼりて友がすむひむがし遠き雲路を慕ひつ
ひき雨にさきし桜も散りはてゝ若木のみどり明るかりけり
見はるかす淡路島山瀬戸のうみ漂ひひかる春霞かな
何日の日か君を迎へんこの山に君を偲ぶも久しくあるかな
うるはしく雄々しき君がみことばを口誦みつゝゆけばうれしも
君とあひて大きいのちに触れ得たるわが世の旅の喜び思ふ
はらからよ雲路をとほくへだつとも君が心を思はぬ日はなし
この心ともにあふげる日のみ子の大みこゝろのうちにあはなむ
聖王のみ法の庭に散らせてし草のひとつとひら君にさゝげむ

御母君様、御祖母上様に宜しく御言上下さいまし。

——『伊都之男建』誌（昭和九年七月号）所載——

「便り」（昭和四年四月二十七日、東京高師生、副島羊吉郎宛）

謹啓 御便りありがたく拝受いたしました。一昨々日詳細を前の御宿宛差上しましたが、今ごろはみもとにとどきしことゝ存上ます。厚きみ心をいたゞきかなしみの底に湧きくる力もて共にすゝまむと願ひ居りま

す。五月四日着京の予定でゐます。発会式は五月十一日が如何でせうか。御相談おき下さい。万事帰京の上にて。御身御大切に祈り上ます。拜眉の日をまちつゝ。

——『若竹文庫便り』六十五号（昭和五十五年五月五日）所載——

「うたと便り」——徳島から——（昭和四年五月二日、東京高師生、副島羊吉郎宛）

数々の君がみうたをよむときはくしき力を身におぼえけり

うつしよにわれらのあひしその縁のふかきを思ふみうたよみつゝ

拙かる身にはあれどもかく契り共にしあればさやりもあらず

もろともに一つ心にすゝむとき亡きはらからもよみがへるらん

雄々しくもかなしくませしみいのちはわれらが信に生きんとぞ思ふ

あたらしき君がみ住ひ友と共につとめぬますとぎくぞうれしき

乏しきに堪ふるいのちをばぐみてつとめますらん君しのぶかな

苦しきに堪へてはじめてあらはれんまことの信を共に生きなむ

なつかしきみうたよみつゝしきしまのみちのめぐみを今思ふかな

内にこもるふかき心の声をしもこのみことばにきくぞうれしき

裏山の若葉のひかりさえゆくを人は再びかへりこぬかな

つきせざるかなしきこゝろに又君を君がみ心を我は思へり

ひとの世はかなしき故にもろとも一ついのちにたゝかひ生きなむ

広瀬兄はじめ諸兄に重ね々よろしく御つたへ下さい。五月四日上京の予定であります。五月十一日発会式いかゞですか。五月五日は昭信会の発会式になつてゐます。五月十一日は四月十一日の聖王の御日になぞらへて、学期始以後はじめての十一日をとりました。信和会のかしこき名は聖王のみことによるのでかた々よいと存じ上ます。両会は共に協力してすゝむ縁におなじ月をうれしくおもひます。いよ／＼共に心してすゝむべき時となりました。大兄のみ心をしのびつゝつきぬ思ひはとてもこゝにあらはすことはできません。ふかく再会の日をまち上ます。御身御大切にして下さい。母も祖母もよろしく申上ました。

——『伊都之男建』誌（昭和十一年八月号）所載——

「便りとうた」（昭和四年五月二日、一高生、田所廣泰宛）

拜啓 詳細の御たよりをいたゞいて疲れ切つた身心に勇気をあたへられました。一日の労作につくされしあとに再び夜更くるまで筆とりたまひし厚きみ心を幾重にもありがたく存上ます。今朝大阪天保山に着、発会式に間にあふべく急いでゐます。共に来し思出の地に、同じ本土の土をふむと思へば力強く存じます。梅木大兄御逝去後始末に忙しく全く執筆読書は廃してゐました。共に偲び共にいたむ我らの心になきみたまもいかによろこびおはさんと薄幸なりし生涯を偲びてはその御心にあつく／＼感佩申上ます。故兄と我らの間にむすばれし心は永久を貫きて我らの間に、又そを通じて、祖国日本に生きんことを信じてゐます。唯そこになしみの底にわきくる力をめぐまれます。御手紙をくりかへし数々の御ことばにてこの力をあたへられかなしきこゝろに君を偲びまつります。一週間前より諸兄共に毎朝神宮ををろがみ、大御歌輪講をはじめめられし由、こゝろよりわが昭信会のみことの意義が現はれはじめゆかんと存上ます。一つ心に大御歌をを

ろがみまつる感応道交の事実より実生活にあらはるべき信は養育せらるべく、大御歌のかぎりなき内容もこゝに更に生きて頂きまつりうることゝ存上ます。理論を体験に生命化といふも、その体験とは生きてる信仰を、実修を内容としなければならぬことを痛感いたします。礼拝は信仰でないが信仰は必ず礼拝を具すといはれし上人のみことばも思ひ会されます。

ときおそきたがひはあれどつらぬかぬことなきものはまことなりけり

かくのらせしところを信じて拙くとも力足らずとも一つ心につよく力を協せてゆかんことを念じてゐます。「倉粟みつれば礼節を知る」といふことばは人生の多くの事実であり、社会経済上の問題が重大であることは内にしてはさうしたところに大なる契機の内なることとせうが、かゝる事実を洞察し、不断改革につくす者は、倉粟みたくとも礼節を知る人であらねばならぬことを思ひます。一切の問題は帰着するところ精神問題であり、そこに信を置いて生きてきた現実に働きうるものであらねばならぬことを思はしめられます。

『正法眼蔵』の御研究は眼蔵なものはふかくたよるに足らぬといふことは体験ある老居士の御ことばとして至極と存じます。それは実修により徹入すべきものとの御心もそこが根本と存じます。しかし又祖師の心証を生きたることばとしてきくことはわれらのすゝむ上に重大のことで眼蔵家のものを材料としてのみとればうる所はありませう。禪師も三十幾歳で人々に示さんと労苦されたのが弁道話以下でせうから、かなしきことばをくりかへし／＼分るところから何処からでもおよみになることは大切と存じます。(六月号のことゝ別問題にして)『三経義疏』についても約四、五年はさうして参りました。六月号は『御集』か『維摩経義疏』を中心としてせられたらいかゞですか、表現の苦心のうちには思はぬことを気づかしむることも多いと存じます。新井君のこと真に忝くうれしく存上ます。一朝一夕にゆかぬでせうが、かくの如く御誘導下されることによつていかに同君が新しい力をあたへられ、又他なる事情に心よらんとするのを一つの道にかへりうる

か、それが必ず同君のため会のためありがたきことゝ存じます。外的解決よりも内心の信に、他を責むるよりも我らの心より、そのことを今少し徹しられたらばと存じます。それは自分を省みても慚愧多いことであるが、われらの信、友情のまことにそを守りあひゆくことは至大の力であります。新井君には共に老師のもとに修心せらるゝやうなことは真によきことで、自然に心永く誘導が大切と存じます。僕も申上げる必要を感じた折もいつか申上げし如くありましたが、責任を感じつゝ却て急にといふよりもさうした方が大事と存じ、そのやうに致しましたが、私の足らぬところを補ひ下さつてゐることを感謝してゐます。又万事は共にある日にかたり合すべく切にたのしんでゐます。組選のことも力強く存上りました。僕も一生懸命にと念じてゐますから何でも御用事遠慮なくいつて下さい。いよゝその日となりました。はるかに偲びつゝ今太子の御墓にまうでまつらんとして万感無量であります。

大みまへに会のことを祈願し、大兄達を祈り奉ります。明日は故兄の御弔ひをみもとにしたいと存じます。井上君にはしく御便り差上りました。『御集』拝誦に御出になつた由、市川君からの御便にうれしく存上りました。

五月四日（土）正午御出（桜館へ）御まちいたします。

はらからのみ文に身をぼ守られてわがふるさとを立ちいづるかな
細々としたゝめましゝみ心の今わが心を生きしめてあり

——『伊都之勇建』誌（昭和十一年八月号）所載——

梅木さん追悼の和歌——葬儀に向ふ折によめる——（昭和四年五月）

一

いそがしきみわざの中を朝はやく送りたまひし友の心よ
かぎりなき常闇の世にゆく思ひし君が柩を今おくらむとす
なつかしきみたまと共にゆくなりと思へど何か心さびしき
おくります友の心と亡きたまの中をゆきかふわが心はも
汽車のわだちゆらぎいづるときにそゝがれしまみの忘らえぬかも
はらからよ友の心を胸にあつめ君を送らむと我は旅いづ

二

ありし日に君がしたひし師の君のたまひし長詩もこゝにあるなり
いくたびかわが汽車の中にくりかへす声はも君がきゝてあるらむ
君ありと思ひて急ぎしそのかみのわが帰り途はたのしかりしを
ありし日に君病みましゝ岐阜の野を思ひぞ出づる汽車の旅路に
君病むときゝてとどろく胸おさへ旅いそぎたる昔しのばゆ
ときゝも時計取りいだし急行の汽車の走りもおそしと思へり
なかゝに眠られざれば聖王の大きみのりを誦しまつりしか
星かげも見えわかぬまで霧たちて富士の裾野はさむかりしかな
富士山は群雲かゝり見えねども裾野にたぎつ水の音きこゆ
身になれぬ夜汽車の旅の長かりしその日も昨日のごときこゝちす

旅に病みされど雄々しく君ありしその日はなほもたのしかりしか
『病おこたり窓にこしかけ暫し見る枯れゆく木の葉と暮れゆく空とを』
ありし日に君よみましゝことのはのしらべをたかくよみいづるかな

三

うつしよに君なきあとはいかにして我世に生きんと思ひし日もあり
兄もなく弟もなければもろともに助けあはんとねがひしものを
国のため末はなりなむよき人を身にかへてもと祈りぬ我は
君思へばなさけも仇もすてはてゝ入りなむ山の端こそこひしき
世をすてし古へびとの心をも今の我が身に思ひ知りつゝ
うつしよのかなしき思ひのらずともうなづき笑ましゝ君が心はも
み国のさま安けかりせば月花に君がすがたを守りてあらむを
世をすてし心につよくかへるかな共にちかひし一つのこゝろは

四

さまざまの苦を荷ひつゝ国をうれひ友をはぐゝみしますらを君はも
谷々の若木のみどりもゆれどもめぐりあはなむその日はしらず
ふるさとの山のみどりを仰ぎみてはかなしきことのおもほゆるかな
さぬき路こえ伊予に連る汽車をしもわがはらからは見知らざりけむ
すぎしこと追はじと思ふわが胸もなほかき曇る君を偲びて

いたましきさだめに堪へてつよかりし君がいのちを思ふもかなしき

——『伊都之男建』誌（昭和九年十一月号）所載——

ともにつどひ（昭和四年五月）

ともにつどひ共にかたればおのづから一つごゝろに君偲ぶかな
友とよばれ師としたひつゝうつし世につきぬ力を得つゝゆくなり
みこゝろにみちびかれつゝかなしみの底に湧きくる力をおぼゆ
十とせあまりはぐゝまれきて向陵にくしくも今のわざをつとむる
一つなる信實かばいたるべき道にいたらむとのらせしみことはも
向陵に大きみのりを称へにしともかりそめのえにしにあらず
よき人のまた亡き友のみこゝろを偲びてはげまむ心かなしも

経典を（昭和四年五月）

経典を誦するおもひに師の君の長詩のみことよみて弔ふ

君がため追悼のみことわがためにはげましのみこと我はよむなり

君がため追悼のみことわがためになぐさめのみこと我はよむなり

しきしまのやまことばのしらべたかく君がいのちを生きしめまします

しきしまのやまことばのしらべたかくわれのいのちを生きしめまします

目に見えぬこゝろのうちにはぐままれしわれらのちぎりふかくもあるかな
たゞならぬ今の世なれば生きのこるわれらのつとめの重きを思ふ

ふるさとの（昭和四年五月）

ふるさとの鳴門の海のはやしほに生ひしわかめを君にさゝげむ

淡路島さやにうつらふ大瀬戸の海ぐさ君におくりまつらむ

むやの海に友をみとりしそのかみにめでしかほりのなつかしきかな

なつかしきむやのわかめのみからだによしとしきげばうれしかりけり

——以上三点、『黒上正一郎先生遺歌集』（昭和十五年十月・日本学生協会刊）所載——

いかにぞと（昭和四年五月十八日、東京高師生、広瀬勝雄宛）

いかにぞときづかひしこともさもあらで君安らけくましましうれしき

あけくれに君通ひます街のみちひろくしげくあるもしたしき

君いますみやどの裏の山松のみどりあらたに映えまさりけり

ともにつどひ共にかたればつくるなき思ひにわれら融け入らしめつ

——『伊都之勇建』誌（昭和十年十月号）所載——

徳島へ帰郷の車中にて（昭和四年五月二十九日、東京高師・信和会諸兄——副島・佐久間・久保田・広瀬・

吉田・仲・川口宛

いそがしきみわざの中に拙き身をおくりたまひし君がみ心はも

み姿のかくれゆくときわが胸はおもひきはまり涙ながれぬ

ことのはにいでぬこゝろの千よろづも我はしるなり友をみつめて

世にあつき友の心を胸にあつめ弔ひまつらむ亡きはらからはも

亡き人にたまひしみうたのかず／＼を誦しまつりつゝ我は旅すも

たゞならぬ病ひの床に同信の友祈りつゝゆきし人はも

かなしくも雄々しくませしみいのちを共に偲びて我らはつとめむ

信和会その名にこもる亡きひとのこゝろを共につぎて進まむ

かなしみの底にわきくる力をも君がこゝろゆめざまされつゝ

茗溪の学舎のまどをありし日にしたひしのびし亡きはらからはも

その友のみ文みうたをたままへにさゝげんときぞかなしくうれしき

極みなきかなしみのうち尚友のこゝろによりて力をおぼゆ

目にみえぬ君がみたまは同信のわれらの胸に生きて働かむ

われらのうちに祖国日本に君がたまは生きなむことを信じて我あり

たへがたき胸おさへつゝゆく旅に心は一すぢ友をしのぶも

——『伊都之男建』誌（昭和十一年八月号）所載——

あけくれに（昭和四年六月二日、東京高師生、広瀬勝雄宛）

あけくれに君がみ上をしのびつゝかなしき旅を我はゆきけり
はらからに君がたまひしそのみうた幾たび我はくりかへしけむ
みことばにあまるこゝろにはらからのかなしきいのち生きてあるかな
ありがたき君がこゝろをいくたびか亡きたままへにつげまつりけり
うつしくも目にはみざれどなきたまは友のみ上を守りますらむ
亡き人とよせがきせりしそのかみの思ひ出つよくよみがへるかな
雲はるかしのびあひつゝみまかりし心の縁はふかくもあるかな
我らのうちに祖国日本のみいのちは生かしまつらむと我らはちかひぬ
君います横浜のさとおもひつゝ汽車の旅路にたよりかくかな
君いかにいますと偲ぶそのことの我につきざる思ひをめぐむ

——『伊都之男建』誌（昭和十年十月号）所載——

故梅木紹男兄の納骨のため松山に向ふ車中から（昭和四年六月二日、東京高師生、副島羊吉郎宛）

あけくれに忘るゝ間なきはらからのあれにし里に我はきにけり
ひさしくも亡きはらからのしたはれしその山河をみればかなしも
松山の城の若葉はもゆれどもすぎにしひとにあはんすべなし
山々のもゆる若葉につくるなきわがかなしみのたへられぬかも

つくるなきこのかなしみをいただきつゝわが一生は尽さんと思ふ

君思ふことを力に共にゆかんわがを思へばなほ力あり

君もまたすこやかにましてもろともに都にあはん時をしぞまつ

なつかしき君が兄君いますてふさぬき路我は君しぬびゆく

同絵葉書

汽車中に君がみうたをとりいだしくりかへしよむ同じきしらべを
みことばにあふるゝいのちうつそみのわれのこゝろに力あらしむ

うつしよに君とあひ得しよろこびを今またこゝに思ふ我はも

はらからの柩はふりて今更にすぎし昔を思ひいでつゝ

熊山の土あたらしき奥津城に涙おのづからわきいづるかな

ありし日のみ声うつしくきくおもひわが胸ぞこのくるしくあるかな

最後までも友はらからにそゝがれし大きまことはとほに貫かむ

み柩をはふりまつりて君がこゝまうしまつりぬあつきみ心を

われらのうちに祖国日本にみいのちは生かしまつらんとわれらちかひぬ

同絵葉書

はらからのふかく心にしたはれし君がみうたをよみあげまつりぬ

うつしくも目にはみえねどこの声をみたまはさやかにきこしめすらむ

同信の友のたまひしみうたみ文その心をも我は告げけり

幽明の境異なれど通ひあふ心は二つのいのちにあらず

なつかしき君がみたまはあけくれに友のみ上をまもりますらむ

同絵葉書

都いづるあしたに君がたまはりしみうた幾度よみいづるかな

みことばはつきぬこゝろをわが胸にわが胸底にめぐみましけり

さびしくも旅ゆく我をあはれみてみうたたまひし君が心はも

なきひとを共にしのびて力あはせつとめんときをたどにまつかな

(車中はるかに兄を偲びて健康を祈る)

——『伊都之男建』誌(昭和十一年八月号)所載——

「便りとうた」(昭和四年七月一日、東京高師生、副島羊吉郎宛)

拝啓 あつくになりましたが御壮健に御勉学のことゝ存じ上ます。

どうか御身あしらひつゝ努力せられんことを祈上ます。私も著書のこと夜に日をつぐ忙しさにたへつゝはるかに日々大兄達のみ上を偲び上ます。試験終つてお目にかゝる日を待上ます。

いかにとぞと思ひやるかな小夜ふけてこゝろしづかに筆をとりつゝ

いそがしきわざにたへつゝときくも友のみ上を偲ぶなりけり

——『若竹文庫便り』六十五号(昭和五十五年五月五日)所載——

なつかしき ―本郷から― (昭和四年七月二十五日、徳島の黒上先生のお宅に向つて旅立つた一高生、

市川・新井宛)

なつかしき便りをよみて西の国旅ゆく姿ゑがきみるかな

今ごろはわがふるさどにつきけむと家居のさまの偲ばるゝかな

朝ばれの大滝山のさみどりも目にうかびくる君を偲びて

もろともに助けかはしてふるさとに文の林をわけいますらむ

我が居らぬふるさとの家に二人して学びていますと思ふも親しき

我もをらぬ家居にありて学びますみ心我はうれしかりけり

今ごろは湯をあびをへてふるさとの灯ともる山をながめますらむ

聖徳の皇子の御像のまへにあけくれに友偲ぶらむみ姿思ふ

もろともに大御心にまもられて偲びあひつゝとめむと思ふ

なつかしき友の姿をふるさとの山にゑがきて思ひつきずも

―『伊都之男建』誌 (昭和九年十二月号) 所載―

会の日 (昭和四年八月十七日)

会の日君がのらせしみことばを胸にたゝへつ文かきしるす

文かけばかたる思ひにわがこゝろくしきよろこびわきいづるかな

たらちねと共にみうはさするときは君なほこゝにいます心地す

―『黒上正一郎先生遺歌集』(昭和十五年十月・日本学生協会刊) 所載―

「便り」—徳島から—(昭和四年八月十九日、東京高師生、副島羊吉郎宛)

謹啓 その後はお変りもあらせられませんか御伺ひ申上ます。先日は御多忙中わざ／＼御たより被下、その上結構なる御菓子御送り下さつて、み心のほど何とも申すことばもこれなく、衷心感佩申上ます。御風味まことに結構に、幾日もたのしみいたゞきました。又はらからを御思ひ下さるみ心のほど勿体なくうれしく、亡きみたまに告げ参らせました。はらからゆきて早四ヶ月をすぎましたが、新愁つねに胸によみがへりありし日を思ひては我らの責おもきことをつねにめざまされてゐます。病と不自由と家庭の重荷とにたゞかひつゝ尚国をうれひ人をつくしみし心は、つねに拙き身に働きかけられます。大兄を迎へて共に故兄を偲び、又共に学ぶ日を今よりふかくおまち申上ます。お別れ申してから早一ヶ月はすぎ、御來徳の日の切にまたれます。昭信会の合宿、まことに意義ふかく終りました。一家族的融合の生活に礼拝信仰と読書研究と、また自炊生活に困苦を共にしてあたらしきよき体験を得ました。とき／＼も太平洋の蒼波をあびつゝ、大兄達のお噂をいたしてをりました。河村先生を御たづねのよし承つて衷心うれしく存じ申上ます。今後先生の御指導をうけらるゝことは真にありがたいことゝ存じます。上人も善知識同行にはしたしみ近づけと申されました。よき師を師とし、ゆくみちにはげみゆくことは学のみちの肝要と存じます。教育御奉公のみことば胸に徹せしめられました。又先生の御ことども承つて御なつかしく力づよく存じます。何れ万事はしく承る日を待つてゐます。

あつさ殊に今年はきびしいやうですが、その後御母上様にも御変りはあらせられませんか。何卒よろしく御言上下さい。私はこれからいよ／＼太子の大御心を拙き力の範囲にてあらはしまつるべきわざにいそむべく漸く準備とゞのへました。あつさとたゞかひつゝ大御心を念じまつりて勉め奉らんと期してゐます。大

兄の学校のことは何れくはしく御相談いたしませう。廿八、九日ごろせと御出下されたたく、必ず／＼おまち申上てゐます。信和会の使命、大御心に対しまつり、また今の日本の教育の実状に照して重きことを思ひ、二学期つとむべきものと力を養ふべく、共に学ばん日をまち上ます。早く御便をと存じつゝ実に相すまぬ失礼をいたしました。何卒御ゆるし被下たく、この上御身御大切に祈上ます。御すこやかに御出の日をたのしんでゐます。皆々よろしく申上ました。

——『伊都之男建』誌（昭和十一年八月号）所載——

なつかしき（昭和四年八月二十六日）

なつかしき文よみ偲びあけくれにまさきくあれと祈らぬ時なし
健康をましゝとかゝれしみたよりにわがよろこびはつくせざりけり
いかならむことにあひてもたすけあひて一つの信を共に貫かむ

——『黒上正一郎先生遺歌集』（昭和十五年十月・日本学生協会刊）所載——

この文を（昭和四年九月、東京高師生、広瀬勝雄宛）

この文をよみあげましゝひとゝきは身もよみがへるこゝちせしかな
再びは君がみ文をよみあげておなじ心に力おぼえぬ
みことばにこもるまことのおのづからたかきしらべを聞かしむるかも
学校を思ふまことゆ国を思ふ大きまことにすゝみゆかなむ
その易く又世にふかきことわりを行ひ示さむ時とぞ思ふ

君ひとりかく念ひかく勉めますことは連れり大きいのちに
志一つなるもの力あはせ国につくさむ時は来向ふ

よき友をよきはらからを我は得しと君がみ文をくりかへしよむ
もろともに故郷の家に学べりしときをぞ思ふ都のすまひに

君近くましますことを思ふときつねによるこび胸に湧きくる

——『伊都之男建』誌（昭和十年十月号）所載——

しみくくと——徳島から——（昭和四年九月二日、一高生、新井兼吉宛）

しみくくと君がみうたをよみゆけば共にありし日よみがへるかな
共にありし日はすぎゆけどそのときの心はとほに我らに生きなむ
友のため炊ぎたまひしまごころをみうたによみて涙ながれぬ

言の葉にあまる思ひのかずくもうたのしらべに伝はるうれしさ
くりかへしみうたよみつゝ小松島に別れしときを又しのぶかも

はらからのみ姿みえずなりゆきしひとゝきの思ひわすれざらめや
みからだのよくなりましゝとするします君がみたよりよむぞうれしき

さやりなき自然のうちにはらからのむつびのうち健かなりませ
かく祈りまたも迎へむこむ春を早くも思ふみたよりよみつゝ

——『伊都之男建』誌（昭和九年十二月号）所載——

燈のもとを（昭和四年九月三日）

燈のもとをひとりしづかに筆とれば寮のありさま目にうかびくも

もろともに机ならべて学ぶらむ姿をこゝに急がきみるかも

一寸ぢのみちを正しくすゝみます友の姿を今偲ぶかな

目にみゆる寮のありさま沁々と別れすむ身に迫りくるかも

あけくれに祈りあはせてたすけあふ我らはつきぬ力に生きあり

——『黒上正一郎先生遺歌集』（昭和十五年十月・日本学生協会刊）所載——

はらからの——徳島から——（昭和四年九月十日、一高生、田所廣泰宛）

はらからのみ文をよみてみ心を思ひつゞけて言の葉もなし

はらからよ君がこゝろはみえずともあけくれ我を守りまします

うつしよに同じ心にまもりあひて生くる力のかぎり知らずも

大みのりとさまつりつゝ明日はかもはじめの会とつきぬ思ひす

御身御大切に。今全く恢復御安心下さい。あとよりくはしく申上ます。

——『伊都之男建』誌（昭和十年七月号）所載——

「うたと便り」—徳島から—（昭和四年九月十一日、一高生、田所廣泰宛）

小夜更けて虫の音さゆる庭のべに君がみ上を偲びあかぬかも

裏山の家の灯かげもうすぎむき夜ははらからをこひわたるかな

かゝる夜は君も寮舎の灯のもとにみんなみの海おぼしいづらむ

虫の音もしづかに更けてかそかにも小枝をならす風の音きこゆ

風の音のさびしき夜半は亡きひとをまたはらからを偲びてたへずも

なつかしき君がたよりを今宵また更けゆくまゝによみかへすかな

二学期のはじめのつどひ偲びつゝ神のみまへにぬかづきまつる

もろともにたすけかはして一すぢのみちを進まむすらをのとも

千早ぶる神のみまへにぬかづきて共につくさむわざ祈るかな

もろともに一つのまことまもりあひて進まばあらむ神のまもりは

もろともに偲びあひ又たすけあふを大御心にみそなはすらむ

御身御大切に祈り上ます。私も恢復しましたから御安心下さい。あとよりくはしく申上ます。

—『伊都之男建』誌（昭和十年七月号）所載—

その声を（昭和四年九月十一日、一高生、新井兼吉宛）

その声をきかむと思へどその姿みむと思へどみちとほきかな
もろともにたすけかはして一すぢの道に進まむ益良雄のとも

——『伊都之男建』誌（昭和九年十二月号）所載——

「便り」（昭和四年九月十六日、一高生、新井兼吉宛）

新井君、御たよりをありがたうございました。御たよりをよみて大兄が信のみちを辿りますみ心また学びのみにいそしまるゝみ心の今うつくしく偲ばれてつきぬよるこびをあたへられました。最初の会の御よせがき、兄がかゝれし宛名の文字一々の友の御ふでのあとに偲ばるゝ姿とそのみ心をいかなつかしくありがたくいたゞきしことか、こゝにすべては申し尽されませぬ。あつく感謝申上ます。御たよりにあたらしき力を得しめられつゝ身の責の重きを更に思ひて今いそしみつゞけてをります。万葉の防人のうた御発表ありしこと真にうれしく存じ上ました。ひとり内にこもるのではなく自らよく務めはげむと共に友はらからとかたりあひ又学びあひ、共に足らはぬを補ひあひてすゝむことは人生の力であり修養であります。兄がはじめて公開のところに友と共なるつどひに御発表ありしことは兄にとつては意義深きことで又それは私共の力であります。防人の歌に対する御意見の数々御しるし下されありがたくうれしく拝誦しました。拝誦して心絃共鳴の世界を見出し史的研究芸術的研究が自ら現実責務生活にむすびつけられしことばのかず／＼をよるこび拝誦しました。私もお蔭で回復、今日は春共にゆきし法華の野べにゆき、ゆく雲青き山々の姿に兄等のみ上を偲び上ました。何卒御身御大切に。申上たいことの数々申上つくせず御諒察下さい。

——『伊都之男建』誌（昭和十一年八月号）所載——

「便りとうた」―徳島から―(昭和四年九月十七日、一高昭信会、河野・新井・市川宛)

拜復 新秋の向陵に二学期最初の会合開かれ諸兄殆どもれなく御集りにて、一つ心にかたりあはされし御ありさま、御たよりによつてうつくしく偲ばしめられ、共にその席にありしこゝちして感激にみたされました。僅かの時間にこれほどの御よせがきをいたゞき諸兄のあつき御心に感泣せしめました。一々の御たよりをひらきよむごとに、一々の諸君にしたしくお目にかゝる思ひ致し、唯紙筆とのみは思はれず家にかへりし思ひしつゝひらきよませていたゞきました。すこやかなるみふでのあとに親しく諸兄を偲び得るよるこびはこゝに申上つくされませぬ。なつかしき、一学期の辿りしあとも胸によみがへりつゝ諸兄と共にすゝむべき重き責めを念じて拙き路を尽さんとのみ願ひ居ります。あつく感謝申し上げます。私もその後恢復、さまざまのいそがしきことに追はれつゝも学びのわざにとめてゐますから御安心下さい。いかならむ疲勞も都の諸兄を偲ぶときその思は之にたふべき力をめぐみつゝ諸兄のいます向陵の地を今は心の郷土として一意かへらん日をまちつゝ励んでをります。

最近の日本は経済的の苦境と思想の動乱と表裏して漸く国民的自覚がよびおこされねばならぬことが意識せられ初めました。しかも新聞紙上に、大官の醜悪の事件等つゞいて摘発され、最近の国民生活の弛緩と頹廢とは、こゝにもその大いなる一端を示して、世界に出づ可き日本として忌はしき限りと存じます。現日本の要求する人物は、たゞ末節の理論にくはしい者ではなく、国民的信念をうちたゞへてそこに基く事理に對する洞察の識見と実行力とをもつ者であるべきを思はしめられます。殊に明治の時代には外国の教養に専注した人々によつて各方面の文化が開発せられ、又その必要も多かつたことでありますが、今は更にこれを生かすべき日本の思想信仰を内にもつものによつてのみ、眞の事業が行はるべきものであると信じます。こ

ゝに外国語の学習のごときも単に語学の智識のみでなく、かの国の国民精神を讀破し、又それとその国の現
実情勢とを照し合せて、我國民生活の将来に資するあたらしき語学たらしむる要ありと存じます。又外人が
いかに日本を観察してゐるか、その事実を見て現在のわれらのゆくみちに資すること、これもそのつとめの
一であると存じます。聖徳太子の大陸思想批判綜合にかなひまつるべきあたらしきつとめがそこにあると存
じます。かくて内には日本の生命を示す聖典によつて魂を養ひ、外には語学の活用によつて世界にいづべき
國民の智識と用意とをつくす、これが本会のわれらの教養たるべきであつて、我らはかくして青年の重き使
命を果すべき準備をなすことが重要と存じます。私の拙き力を以て太子の研究に心を致し奉ることもその一
部をなさんがためであります。私もいま太子の研究によりこれらのことをさとらしめられつゝ、今後身をつ
くしても諸兄と力を協せて本会の使命とするところには、たゆまざるべきを念じてをります。

諸兄の御たよりをいたゞいてつきぬ力とよろこびを得しめられつゝ都にかへる日をまちわびてゐます。わ
れらが一家の睦びをなし、兄弟の交りをなし、大御心の示したまふ日本のいのちを共にする信に融合してす
ゝむ「まこと」の上には、必ず神のまもりのあらんことを信じてをります。否われらがかく真にあひ共にた
すけあひ得ることもそこに神のまもりをうつくしく仰ぐ次第であります。濁りみだれてはてしなき世にその信
と友情とは必ず大いなる力となつてあらはるゝことを思いつゝそこに見えざるいのちを痛感せしめられま
す。人生の要諦は外界の困難にうちかちて「まこと」を貫くことであります。外界の困難にうち勝ち得ない
ものは信ではなく気分であります。我らはこの信を真にして一致協力してすゝむところ、そこには必ず事は
貫かる可きことを信じて、自らの力足らぬことを知るとも、そこに囚はれて沈淪することなく、又順調の境
遇になるゝこともなく、不断の緊張を真なる生活に得つゝすゝむべしと存じてをります。

吉田松陰はこんなことを申してをられます。「二国の政治を正し、一国の風教を興するは賢人野にあつて

隠るといふやうなことではならぬ。孔孟のごとき聖者が世にあらはれねばならぬ。しかし孔子も、永く人心を薰化し、千歳の師としての業蹟をのこしたのは、それが不遇であつて世に用ひられず、隠れて却つて不遇のうち益々その信をつくし、子弟を教育しそのまことをいたしたからである」と。人生の運命ははかられぬものであります。唯まことの「信」を貫きつとむる者のみが真にみ國のため、道のために「人世の偉業」をなし得ませう。我らは、共にこの心を念じて兄弟のむつびをなし、相たすけて道にはげまんとねがふのであります。昭信会の重き使命と内なる融合の力とを思ふとき、真に感無量であります。はるか兄等の御健康を祈りつゝ惜しき筆をおきます。

一々の御たより真にありがたく、このつきぬ思ひかたらふ日を一にまちわぶる次第であります。

たよりするふでを止めて向陵のかたに向ひて祈りするかな

このごろはつゞきし雨もうち晴れて本土の山も近くぞ思ほゆ

友います本土の山をなつかしとのぞむ思ひもはるかなるかな

はるかなる思ひもうちにかへりみれば一ついのちの中に生きてあり

なつかしきみふでのあとをひらきよみてつきせぬ力が胸に湧く

偲びあひたすけあひつゝすゝみゆくいのちはつきじ如何ならむ時も

——『伊都之男建』誌（昭和十年二月号）所載——

とき／＼も（昭和四年九月十八日、一高生、田所廣泰宛）

とき／＼も君がみうたをとりいでゝ声たからかによみあぐるかな

拙き身の室おとづれてかきましゝ君がたよりのなつかしきかな

かくまでに思ひたまはるみ心をいたゞく縁の奇しくもあるかな

いくたびかくはしき文をと筆とれど胸の思ひの尽し難かり

言の葉にうつさんとすればおのづから歌なりいづるかなしき心

もろともに一つのまことまもりあひてすゝむいのちのつよくもあるかな

濁りみだれかなしき世なればはらからの契りいよ／＼つよくしありけり

千とせあまり三つもゝとせの前にしてかくあらんときを照しましゝか

のりをつたふる人を求むの大みこと今の我らにかゝりてあるなり

みなもとを正しくせずばいかにしても末はにござむこの世のみちは

この信にめざめし我ら若き子の上にかゝれり大き使命は

弱き身も一つの信につくるなき力に生きてはげむかしこさ

もろともに力あはせて大きみにつかへまつらむわざ励まなむ

○

くまもなき月の夜ぞらを見あぐればはてしもしらぬさびしさおぼゆ

はるけくも今宵のつどひ偲びつゝおなじこゝろに月をみるかな

くまもなき月の光にひんがしの心のさとを懐かしむかも

もろともにしたすけかはしてすゝみなば如何なるわざか成らざらめやも

月みれば湧くこの思ひのらずともたゞに通はんはらからの上に

あけくれにはらからの上しぬびつゝさきくまさきくあれよと祈る

——『伊都之勇建』誌（昭和十年十一月号）所載——

さやかなる（昭和四年九月十八日）

さやかなる月の光は一つなるいのちに通ふ胸てらすかな

はらからを思ふこゝろの中に生きて今宵も我は文かきつゞく

いかならむつかれしときも共にすゝむ責めを思へば力湧きいづ

みだれゆくみ国のさまに大ぎみの大御言葉のうつしく迫る

向陵の木の間をもるゝ月かげをふみてかへらむ姿偲ばゆ

いかならむかなしきときもこの心内に力をめぐみゆかなむ

——『黒上正一郎先生遺歌集』（昭和十五年十月・日本学生協会刊）所載——

夜となれば（昭和四年九月二十一日）

夜となれば先づこそ思へはらからが今宵もいかに腕を練るらむ

向陵も秋ふけゆきて校庭は桜の黄葉ちりてあるらむ

ひさしくも君をみざればあけくれに都にあはむ日をまちわぶる

あけくれに（昭和四年九月二十二日、東京高師生、広瀬勝雄宛）

あけくれに如何にいますとおもひしをいまのたよりのありがたきかな
都にて心の友にあひませし君が心を思ふもうれしき

遠つみちたづねたまひしみ心は日をへし今も忘れざりけり

この室に共におくりしよろこびはあした夕べに思ひいでつゝ
我も早く都に上りもろともによまむときをまちわぶるかな

——『伊都之男建』誌（昭和十年十月号）所載——

しばらくも（昭和四年十月十一日）

しばらくも君をしみざればあけくれに君ます方を我は慕へり

かゝる日に共にたまひしよせがきの文いかばかりうれしかりけむ
はらからの君がボートに疲れかへる夜は更るまで我もつとめをり

君とわが一つのちに通へれば時にかたらふこゝちするかも

とき／＼も君がみ声のわが耳にうつしくきこゆるこゝちするかな

隅田川秋のあさけを雄々しくもオールそろへてこぎいづるらむ

すこやかにきよくまさきく生ひませとあけくれ祈らぬときなかりけり

必勝のねがひつらぬき友と共にかへりまさん日をたゞにまちあり

○

よせがきのみ文をみればうつくしくも友の姿を見るこゝちすも

夜を通し勉むるときに友がたより机に置いて俣ぶなりけり

雄々しくもオールそろへてますらをがこぎいでむ姿目にみゆるかも

みたよりの水茎のあとみつめつゝ必ず勝ちてきませと祈る

なつかしき友にあはむ日よろこびをいひあはむものとまちわぶるかも

——『黒上正一郎先生遺歌集』（昭和十五年十月・日本学生協会刊）所載——

はらからの（昭和四年十月、東京高師生、広瀬勝雄宛）

はらからのかしこきこゝろいたゞきて身もよみがへるこゝちするかな

かく迄もみ心こめてたまはりし文はたゞなるたよりと思へず

なつかしき君がみやどに一ときはつかれしことも忘れてすぐしつ

さまざまのことに追はれて休むときあらぬがまゝにこの秋もすぐ

としごろのつかれ積れど大きみを仰ぐこゝろに生きしめられつ

かなしくも雄々しくませしみのちのあとうつしくも迫りくるかな

今の世に教への道を聞くべくつとむる君を思ふもうれしき

もろともにこの世にあひしそのことの今更かしこく思はしめらる

もろともにこの世にあひ得しよろこびを今更にして思ふころかな
もろともに心も身をもまもりあひてこの世にわれらつとめあはなむ

——『伊都之男建』誌（昭和十年十月号）所載——

たよりに代へて（昭和四年十月）

戦勝の志気あらたなる向陵の学び舎思へば力をおぼゆ

もろともに一つ心に結べりし心にかちし戦ひ思ふ

わが会の生れしとしに向陵に若きいのちのよみがへりしか

あたらしき秋の寮舎にあひましゝ友の心を偲ぶもうれしき

向陵の寮舎のまどを偲ぶにもひんがしのそら慕はるゝかな

○

北のはて旅せし友もかへりきて寮舎の窓はにぎはしからむ

朝鮮ゆかへりし友もすこやかに故郷の夏を語りますらむ

はらからをかこみかたらふ友のすがたうつしく今は見るこゝちすも

小夜ふけてひとり燈下にはらからを偲べばたえぬ思ひわくかな

とき／＼は別れて住むをさびしめど君がたよりをよめばうれしき

はらからと共に生けりと思ふことつきぬ力をめぐむなりけり

はらからのいますあたりも今ごろは虫のさやかになきいづらむ

をしくも（昭和四年）

をしくもつどひたまひしはらからを見れば病ひも忘れにけり
大御歌ををろがみよみます声きよて同じころにをろがみまつる
室ひと重へだてゝあれど同じおもひ通ふがまゝに語る心地す

はらからの

はらからのあつきころはあけくれに力を我にめぐむうれしさ
すこやかに身を養ひてはらからのふかき心にこたへざらめや
み国のため思へば我も我ならぬ身と知れよとの君がことばはも
ありがたき君のみことに身の責めをいや思ひつゝ我養はむ
みたよりを賜るごにはらからにあひし思ひをめぐまるゝかも
いそがしきみわざの中にかくまでもたよりたまはる君が心よ
目ざむれば先づこそ思へはらからが今向陵にいかにまさむと
あけくれに心一つに通へればつきぬ力はわきいづるかも
うつそみのいかなる心もつげあひて生くる我らは力ありけり
いかならむことにあひても助けあひて共に貫かむ一つの信を
つくゝとみ国のさまを思ひゆけば我らの責めの重くもあるかな

源を正しくせずば千よろづの備へなすとも力あらざらむ
大御心仰ぐ我らのつとむべき責の重きを今更に思ふ
なかばにてやすらふことのあらざれの大御言葉を今仰ぐかな

——『黒上正一郎先生遺歌集』（昭和十五年十月・日本学生協会刊）所載——

昭和五年——三十一歳——

「便り」——徳島市船場町から——（昭和五年一月一日、一高生、荒瀬達也宛）

謹賀新年 御健康を念上ます。相たすけて我らのおもき使命につとめんと祈り居ります。病床あつき御世話になりし日を思ひみ心を感佩しつゝ君を南海に迎へん日をまち上ます。

——『伊都之男建』誌（昭和九年十月号）所載——

なつかしき（昭和五年一月四日、一高生、新井兼吉宛）

なつかしき文みうたをいたゞきてみまつることをよろこび得たり
ふるさとの冬の夜更にしみぐくと君を偲びて偲びあかずも

——『伊都之男建』誌（昭和九年十二月号）所載——

「便り」（昭和五年一月十四日、東京高師、信和寮宛）

副島兄 病中の一方ならぬ御世話ふかく感佩いたします。

何ごとも申上つくされませぬ。今はるかに兄等のみ上を偲び、御なつかしさにたへませぬ。みうたいく度もくくりかへしをります。ことしは更に心して共に国のみため道のみためになりまつらしめたまへと祈願

いたします。たゞならぬ世にこそわれらのつとめも大きく又かゝる時にこそ、聖王の大きみをしへもあらはれますべしと信じをります。兄にもこの上御身御大切に。郷里の夜更けて信和寮の燈下を偲び真に感慨無量であります。

申上つくされぬ心御照察下されたくみうたのみ心をふかく感謝申上ます。

佐久間兄より度々御手紙いたゞき、み心の程あつく肝銘いたします。申上たきこと多くありますが、同兄にくれぐれもよろしく御言上下さい。

仲兄の新年の御便りがありがたく、今は甲州より御かへりのこと、同兄のみ上を祈上げます。

佐久間兄にも御卒業近く何かと共に致すべき事もあるに残念でなりません。四兄の御健康、会の意義ある発達を衷心祈入ます。

——『若竹文庫便り』六十五号（昭和五十五年五月五日）所載——

いかにしても（昭和五年一月十六日、東京高師生、広瀬勝雄宛）

いかにしてもあらはしがたきこの心をしろしめすらむわがはらからは
あけくれに都のかたをのぞみつゝ共につとめむ日をまちわぶる

——『伊都之男建』誌（昭和十年十一月号）所載——

まちわびし（昭和五年一月十八日、一高生、新井兼吉宛）

まちわびし君がたよりをうつつしくも得しよるこびは我胸にみつ
こまぐとしたりめたまひしみ心のふかくあつきに涙ながれぬ

世にあつきみ心つくしたまひにしこぞを思へばことばもあらず
千よろづの君がみ心いたゞきてつきぬ力を我は得にけり

はるかなる都のことをこま／＼とつたへたまひしことのうれしさ

はらからがつとめたまへるありさまを知り得し今日はよろこびあふる

聖徳の皇子のみこゝろをつたへます君が心のありがたきかな

かしこみてよみまつりぬをろがみてよみまつりぬ今日のみふみを

たゞならぬ世にこそ我らがつとむべき責めも大いなりと今更におもふ

さま／＼の苦を忍びまして世を治め民を濟はしむ大御心はも

み文にて示したまひし大皇子の大み教をかしこみまつる

大皇子の大きみのりを仰ぐにもいたらぬ身をかへりみるかな

自らに行はざればいかにして人をすくはむとのみ教かしこむ

あけくれに都のそらをしたひつゝ共につとめむ日をまちわぶる

しばらくは風ひきましてこもりてし君すこやかにあれよと祈る

いかならむことにあふともたすけあひて大御心にしたがひまつらむ

み文よみしのびあかざるこの心つくし得ぬ心を君をさめませ

はらからを迎へむときのひと日／＼近づくことのうれしかりけり

——『伊都之男建』誌（昭和九年十二月号）所載——

なつかしき(昭和五年一月十九日、一高昭信会会員宛)

なつかしき文みうたをいたゞきていかにうれしく我はよみけむ

世にあつきみ心づくしたまはりしときはあけくれ忘れざりけり

にしひがし身は別れてもうつしよに一つ心に生くる我らはも

拙き身を思ひたまはるみ心につきせぬ力めぐまるゝかな

はじめのつどひのさまをうつしくもこのよせがきに偲ぶうれしさ

聖王の大きみをしへ仰ぎつゝ学びませしときもかしこき

人の世のつひに帰すべきまことなるみち示しませし大御心はも

民のため不請の友となりませし大御心を今仰ぐかな

みをしへを仰ぐにあらねばいかにして拙き身は道に入るべき

この大き道に帰せざればいかにして今のみだるゝ世を済はなむ

世につくすみちは我らのまことよりあらはれんとのみをしへ仰ぐ

いかならんことにあふともまもりあひて大きみをしへ身にしつとめむ

事多きかゝる世にこそみをしへを仰ぐ我らのせめは重きかな

あけくれに大御心ををろがみて共なるわざを守らせと祈る

聖王のみたまのふゆに弱き身もいくたび危き瀬戸をこえしめぬ

みめぐみにこたへまつらんと思ふにもわが心をかへりみるかな

身を養ひ心をむちうちはらからとつとめんみちにつくしまつらむ
共に学び共にかたりし日のことをあけくれこゝに思ひいでつゝ

向陵の寮舎のさまをうかべつゝ友ます方を慕うなりけり

うつしくもかたらはざれどみ心は拙き胸にせまりくるかな

影きよき夜々の月かげ仰ぎてははらからの上偲びてつきずも

小庭べの枯木にさゆる月かげにはらからの上偲ばるゝかな

にしひがし同じ思ひに見る月とさむき縁側にとゞまり仰ぐ

なつかしき月の夜ごろも今ハすぎて闇夜の庭ハさびしくあるかな

はかりがたきめぐみのもとに養へば安く思ひませわがはらからよ

うらゝかに春たつときはみんなみにとひたまはらんと今よりぞまつ

ふたゝびのつどひのときを思ひつゝはらからの上をはるけく祈る

——夜久正雄氏所蔵の書簡から——

ふかくあつき——徳島（御病床）から——（昭和五年一月十九日、一高生、田所廣泰宛）

ふかくあつきみ心つくしみとられしときはあけくれ忘れざりけり

故郷まで共におくらむといひましゝみ心つねに思はぬ時なし

いそがしきみわざの中にかくまでもみ文みうたを賜るかしこさ

なつかしきみ文みうたをいかばかりうれしく我はくりかへしけむ

みこゝろのこもりしみことば一つ／＼力づよくもよみかへすかな
母君のかしこきみ心偲びつゝたまひし懐炉を身につけてあり

はらからのつどひのさまをうつしくもこのよせがきに偲ぶうれしさ
太子の大きみをしへ仰ぎつゝ学びましゝときくもかしこき

国たみのつひに帰すべきとこしへのみち示しましゝ大御心はも

そのみちに帰するにあらずばいかにしてみだるゝ世を濟ふすべあらむ
そのをしへ仰ぐにあらずばいかにしてつたなき身は道に入るべき

そのみちはかたくあれどももろともにまもりあひつゝつとめむ我等は
拙き身を思ひたまはるみ心のふかくあつきに涙ながるゝ

よせがきのみ文みうたを枕べにつきぬ力を得つゝよみけり
いそがしきみわざのうちに君かきしみ文枕べにおきて臥しをり

向陵の今のありさまを思ふにもみ国のすゑを思ひてやまず

なやみ多しとかゝれし文にこたふべき心あふるれど思ふにまかせず
飛行機の便にてみ文たまひてしみ心つよく胸にこたへぬ

会のこととはらからの上祈りつゝつたなき心をむちうち養はむ
身をつよく心をつよくはらからのすくよかにこそませよと祈る

熱三七度一、二分に下り、少しづゝ元氣恢復、御安心下さい。

「うたと便り」(昭和五年一月二十日、一高生、荒瀬達也宛)

世にあつきみ心こめしみたよりをいくたび我はよみかへしけむ

拙き身をかくまで思ひ祈りますみ心いかにこたへまつらむ

さま／＼にみ心くだきみとられしこそを思へばことばもあらず

もろともに偲びあひ又たすけあひ重きつとめを貫き通さむ

聖王のみたまのふゆに弱き身もいくたび危き瀬戸をすごしぬ

あけくれに大御心ををろがみて共につとめ成さしめませよと祈る

たゞならぬ世にこそ我らのつとむべきせめもおもしと今更に思ふ

はらからがよせがきの文みまつりて常にあらたなる力めぐまる

国たみのつひに帰すべきまことなるみちをあらはさむ我らがうちより

拙き身はくるしかれどもまもりますみめぐみのもとに安らぎ戦はむ

そのみちはさがしかれどももろともにもまもりあひつゝたゝかひゆかむ

はらからの共なるこゝろ年をへてふかくしあるがうれしかりけり

小夜ふけて月さやかなる裏庭をながめてぞ思ふ友ます寮を

郷ちかき京都にゐますと思ふだにしたしかりけるそのいく日ぞ

みからだはいかにますやときづかひつあけくれとほく祈るなりけり

熱も下り大分快方に向ひ、起臥もよほどらくになりました。医者も大ぶんよろしき由申します。熱は三七・一位が最高になりました。全体としてよくなりましたから御安心下さい。

兄にもくれぐれも御大切に祈入ます。元日以来のみ文御うたよろこびかしくみいたゞきました。

(荒瀬記) このみ文は本郷の桜館の二階にて長らく御病臥の後昭和四年の末御帰郷になつてから頂きましたもので、小生には最後のみたよりであります。封筒は御母堂様の御筆ですがみふみは御自身お認めになつたものですから、大分御快方の折のことでありましたでせう。御健康思ふにまかせられずして常に重き使命につとめました先生の御生涯は僕等日本青年の行くべき一すぢの道を御自ら示されたものであります。新井兄の深きみはからひにも立直らせらるゝ事なく僕が四月お伺致した時は既に大分重くなつて居られ遂にお目にかゝる由もなく悲しく眉山の麓を去らねばなりませんでした。今は誠に数々の御文御歌をくり返し仰ぎつゝ、僕等の心に凝滞なからしめんと念願致すのみであります。

——『伊都之男建』誌(昭和九年十月号)所載——

なつかしき(昭和五年一月二十七日、東京高師生、広瀬勝雄宛)

なつかしきみたよりの文いくたびかうれしく我はくりかへしけり
うつしよに君あることを思ふとき病ひの苦も忘れにけり
四人してかたりますらむみ姿をなつかしみ思ふ朝に夕べに
かしこくも神のみまへに拙き身を祈りたまはる友の心はも
力づよくすゝみますすとふみたよりに力づけらるゝ離れてあれども

——『伊都之男建』誌(昭和十年十一月号)所載——

「便りとうた」（昭和五年一月二十九日、一高生、田所廣泰宛）

拜啓 先日は御たよりうれしく力づよくいたゞきました。カゼも大したことなく御元氣の由安心いたしました。道元禪師の御言葉御引用にてこま／＼御したゞめのみこゝろ何よりも兄の御近状のかくあることによるこびをあたへられました。思ひみれば人の世のつひに帰すべきまことのみちにきづかしめられし広大の慶びは此上なかるべきを、それすら忘れがちなる浅間しさをかへりみしめられ、いよ／＼あらゆる苦を忍びて不請の友とならせたまひしかしこさが仰がれ、共にまもりあひてはげみゆかんことをふかく念じてゐます。「幾度か辛酸を経て志始めて、堅し」と南洲翁も告白されました。その心をつねに思はねばならぬと存じます。僅かのことに望を失はぬやう信念の緊張を共にとねがひをります。記念祭近く向陵をなつかしみ偲び上げます。どうか御身御大切に、燈下はらからをしのびつゝ。

あした夕べいかにいますと思ひつゝ君が上をば祈るなりけり

いくたびかみたよりの文よみかへしみ心かしこくいたゞきにけむ

にしひがし心通ふとおもへどもなほまたれけりかたらむときを

——『伊都之男建』誌（昭和九年四月号）所載——

冬の夜は（昭和五年一月二十九日、一高生、新井兼吉・河野稔宛）

冬の夜はしづかにふけてはらからの上のみ切に偲ばるゝかな

記念祭も近しときゝてこそこの日の思ひ出つよくよみがへるかな

今はなき君（故梅木先慈）がいくたびみこゝろに慕ひましくむその祭はも

目にみえぬみたまと共にはらからの上しぬびつゝその日迎へむ

向陵の歴史にいのちあたふべき会の栄えをなほ祈るかな

今ごろはいかにまさむとあした夕べおなじこゝろに通ひていくる

病ひしていや身にしむは大皇子ののらせたまひしみことなりけり

みをしへを仰ぎまつりて身と心とやしなひつゝ君思ふかな

もろともに友の部屋々々たづねむとねがひしこともむなしくなりぬ

なつかしき友の室々ゑがきつゝ心はをどるひんがしのぞみて

——『伊都之男建』誌（昭和九年十二月号）所載——

み心の（昭和五年二月六日、一高生、新井兼吉宛）

み心のこもりしみことのかずくをいかにうれしく今日もよみけむ

聖徳の皇子の御言葉のすりぶみをひらきをろがみ涙ながれぬ

聖徳の皇子のみをしへのおこるべき時にあひぬる身こそたふとけれ

ひとの世のひとしく帰すべき大きみちに共に帰しつゝつとめあはなむ

いかにして今宵はますと記念祭のさま思ひつゝみ部屋を偲ぶ

思ひてもなつかしきかなもろとに会のはじめのわざ成しゝ日は

古へも今も希なるみ教を共に仰ぎ得しことのかしこさ

もろともに偲びあひ又たすけあひつとむることのありがたきかな

ひとゝせを思ひかへしてはらからを偲ぶこゝろに胸せまるかな

——『伊都之男建』誌（昭和九年十二月号）所載——

「便りとうた」（昭和五年二月十日夜、一高昭信会會員宛）

拝呈 都にて御別れ申してから早一ヶ月半はたち大兄達をおもふ心は切に胸に迫るのをおぼえます。なかに病床の生活に日夕厚きみ心をおくられ力と安慰とをめぐまれるかしこさは何とも申上つくされませぬ。いつもみ心の中に生きて病苦とたゝかひ、只管共にはげまん日を期して静養してゐます。おかげで順調ですから御安心下さい。われらは真にこの信に生き、おもき荷を荷ひてすゝむもの、之より諸兄と共にたすけあひつゝ労苦を共にして努めんと願ひ居りましたがはかりがたき病ひの床に臥し、衷心遺憾に存じますと共に、慚愧いたして居ります。「幾度か辛酸をへて志始めて堅し」と南洲翁も述懐されましたが、苦勞も足らぬ身に病ひいたし真に慚愧にたへませぬ。今は永き将来を期するわざなれば、自分の静養はかへつてまことのつとめになるとの師友のみことば殊に諸兄の御示しによりて広き世界に憩はしめられ聖徳太子のみ言を拜誦してみまもりのもとに只管身心を養ひ居ります。共に人生の痛苦を同じうして事にたふべき身心をつくらむと諸兄と共にすゝむべき責を思ふ一向専念のねがひのもとに静養いたして居ります。

この学期はしたしく『御集』と共に聖徳太子の『御疏』を御学びのこと何よりの御事と存じ上げます。争鬩の説に代ふべき「和」のみちをこの世にこそあらはし行ふ可しと信じつゝ、「天下の道理」を御身を以て示

させましゝ大御心に帰依して共にすゝむことのよろこびを今更に感謝せしめられます。しかし之が実現のみにすゝむことは修養と苦闘をつまねばならぬことであり曇りなきまことの「人生の学」にもとづきて、現代の国民としての智能の開発と又各々すゝむみちの技能の修練とを内心にすべをさめつゝ、われらの信と使命とを協力実現すべき準備をなさねばならぬと存じます。複雑なる人生に立ちて不動の信を貫く人でなければまことのことは出来ぬと存じます。全人生の共にひとしく帰すべきまことの信を体し、この正しきみなもとに立つて時代の実際問題の具体的研究と又なすべき実行に向ふことによつてはじめて国民生活を内に支ふるわざは生るべしと存じます。これらの関聯をきはめて本会は根本の信に立ち共に協力して大使命に向ふ可きわざを信仰思想の根柢より順序を追うて確実なる歩をすゝめねばならぬと存じます。本会も成立以來早一ヶ年をすぎし月日をかへりみて感慨胸にせまる思ひいたします。二年の諸兄と共にこの会をたてあたらしきはらからを迎へて十数名の家族となり、共に力を協せてすゝみ得るにいたりし深厚の縁を思ひて衷心ありがたく力づよく存じます。永久の世を照します大御心のもとにつどひしこの会こそ吾國を荷ふ若き男子の使命を全うし得べく、正しき信のもとに力を協すこの会こそ我が生涯の力として共に永くかたくまことの友はらからの芳縁を全うし得べきを確信いたします。及ばぬをたすけあひつゝあやまりをいさめかはして、共に世たつ力とならんと念じて居ります。

三月末御來徳を切に／＼待ち入ります。申上たいこと無量ですが、御照察下さい。諸兄のみこゝろをおもひて感慨まことに無限であります。

くれ／＼も御身御大切に祈り入ります。

はらからとわかれし日よりかゝなべてはやひと月はすぎにけるかな

なつかしと偲ぶ心の胸にあふれつくせぬおもひをくみたまふらむ
友偲ぶ心も迫る夜々の月を仰ぎみる日の又めぐりきぬ

裏山にさゆる月夜の大ぞらの遠くはれしがさびしくあるかな
かゝる夜は都もとほきこゝちしてはらから切にしたはるゝかな

乱筆相すみませんが御推読願上ます。

この御手紙は昭和五年二月十一日消印、東京本郷一高昭寮十一番河野稔兄気付一高昭信会宛のものです。中に「二年の諸兄」とあるものは昭和三年一高入学の河野兄等のこと、「あたらしきはらから」とは翌四年一高入学の高木、佐藤兄等のことです。（『伊都之男建』編者識す）

——『伊都之男建』誌（昭和十年四月号）所載——

はらからの（昭和五年二月十一日、一高生、田所廣泰宛）

はらからのみ文みうたをいたゞきてけふも力となくさめ得たり

もろともにも大み教へを仰ぎますみ心偲ぶがありがたきかな

この信を共にしつとむる力よりみ国をになふわざは生れむ

争鬭の説に代ふべき「和」のみちを今の世にこそあらはしつとめむ

くもりなき大御心のもとにして共にすゝまむねがひは果てなし

信を共に偲びあひ又たすけあふつどひはとはの力なりけり

なつかしきつどひのときのみたよりに泣かしめられぬ力を得つゝ

○

病ひして夢路にたどる君がみ家たづねまつりしなつかしき道を

母君はいかにまします君は今いかにいますと偲ぶなりけり

思ふまゝにつくし得ぬ身にはらからのまさきくあれと祈るなりけり

——『伊都之男建』誌（昭和九年四月号）所載——

ありがたき（昭和五年二月十二日、東京高師生、広瀬勝雄宛）

ありがたきみ文いくたびよみかへし今日も偲びぬあつきなさを

みこゝろを思へば力めぐまれて病ひの床もよろこびありけり

うつしよに共にあひ得し換へがたきかしこき縁をつねに偲ぶも

拙き身も重きわざをし荷へればひたすら養ひ日々をすごせり

もろともにつとめましますありさまをあけくれ偲び思ひつきずも

思ふまゝつくし得ぬ身にはらからのまさきくあれと祈るなりけり

すこやかに身と心とをやしなひて共にみ国につかへまつらむ

——『伊都之男建』誌（昭和十年十一月号）所載——

「便りとうた」(昭和五年二月十二日、一高生、新井兼吉宛)

こま／＼の御たより衷心うれしくありがたく拝読しました。御すこやかに御いそしみのよし安心仕りました。会の状況諸兄の御消息いつも詳しく御つたへ下され真にありがたく存上ます。又養生法御示し忝く必ず御示しの如くいたします。今夜もくり返してみてもよく語り合ひました。必ず実行いたすべく厚きみ心のほどをいくへにも感謝いたします。最近は玄米と野菜にしてゐたところへこの御手紙を得て全く確信と適法を得ました。七名の諸兄を一年に得たことはまことにありがたき御蔭と存じます。五人にて共にこの会をはじめ去年の今を思ひて真につきぬ思ひ胸に溢れます。全人生のひとしく帰すべきまことのみちをうつそみをもつて示させましゝみあとを辿りまつることは最も難きことにてこれだけの縁を得たことは力強き限りと存じます。内より自ら求むる心のみ真実の力を有することゝ存じます。これだけの人が共に融合のまことを合せなば必ずわれらの使命は実現のみちにすゝみうると存じます。古へも今も稀なる無上のみ教により、大御心のみまもりによりて、信にもとづく精励と協力とあらば必ずみ国の将来を荷ふに足ると存じます。「善悪成敗要らず信にあり。群臣共に信あらば何事か成らざらむ」の仰せを仰ぎ奉ります。

諸兄の御出下さるとのみ心ふかく感謝いたします。懸念に養生して切に／＼その日をまち上ます。兄には三月試験後早く御出で下さる由み心うれしく待上ます。

病中しづかに自らをかへりみる時をあたへられ、又病苦に囚はれざることのかたきにも切に拙きを恥ぢつゝ大御心を憶念し兄等と共につとむる上にその責を全うすべき一向専念の念願のもとに養生いたしてをります。日夕み上をはるかに偲び東西一つに通ふ心のうちにつきぬ力と安慰を得て苦しき日々を養ひ居ります。熱も大分下り平熱の日もあるやうになり病はよき方へのみ向ひつゝあります。御安心下さい。たゞ疲労のた

ぬものいふこと歩くこと苦しく今に困つてゐます。兄にもカゼなどひかれぬやう御身御大切に祈入ます。あつきみ心のもとにありしこぞのくれを思ひつゝしばし別れを惜みし日のこと胸によみがへり感慨にたへません。

思ひてもなつかしきかなもろともに会のはじめのわざ成せし日は古へも今も稀なるみ教を共に仰ぎ得しことのかしこさ

もろともに偲びあひ又たすけあひつとむることのありがたきかなひとゝせを思ひかへしてはらからを偲ぶこゝろに胸せまるかな

——『伊都之男建』誌（昭和十一年八月号）所載——

吹雪する（昭和五年二月十二日、一高生、新井兼吉宛）

吹雪する音すさまじく更くる夜はいかにいますと偲ばるゝかな

こぞの今思ひかへしてつくるなき心に偲ぶはらからの上を

たどりこしみちをかへりみゆくておもひ大御心にたゞに祈るかな

——『伊都之男建』誌（昭和九年十二月号）所載——

「便りとうた」（昭和五年四月一日、筆太の墨書にて一高昭信会会員宛）

本日より合宿ナサレルコト切ニ諸兄ノ上ヲオ偲ビシテ居リマス

新井兄才出下サレシコトハ衷心ヨリ感謝イタシテ居リマス

毎日諸兄ノ才便有難クナツカシク拝読イタシテアリマス

何卒御身ヲ御大切ニ御勉強ノ程祈ツテ居リマス

千早ぶる神のみまへに心あはせかしこき道を学びますらむ

共に仰ぎ共につとむるまごころは御国の力とならざらめやも

天地のめぐみゆたかにはらからの上にあれやとひた祈るかな

——夜久正雄氏所蔵の書簡から——

もろともに（昭和五年五月十一日、東京高師生、広瀬勝雄宛）

もろともにたすけ合ひつゝますらをがともにたてにしねがひつらぬかむ

おほまへにともに誓ひしまこともて教への道につかへまつらむ

——『伊都之男建』誌（昭和十年十一月号）所載——

あざやかに（昭和五年五月十三日、東京高師生、広瀬勝雄宛）

あざやかにわがおもかげのうつれりと亡きはらからがとどめましけり

——前記、同号所載——

梅木紹男氏のうた・たと・消・息



梅木紹男氏の遺影
(一高生時代)

鳶

時雨日の夕暮近く渭の山の上高く鳶は輪をゑがく
しづ／＼と羽ひろげつゝ鳶一羽時雨の雲のをぐらきに飛ぶ
悠々とせまらぬ舞よ鳶の舞よ雲の去来のその中の舞よ
時雨日の雲の動きは悠々とひたすらみつむる心に迫る

病

天のめぐり心の動きのすこやかさ深く信じて我は生きあり
幾度か病に我は犯されしが我身を守る力を信じぬ
唯信ぜよ唯信ぜよや天地の偉大なる力我にこもれり
病してももうき日々に友の文我なぐさめて力あらしむ
父母のおもひや友のなさけにても我が病いかで治らであらむや
山の友訪ると聞き待ちに待ち冬の寒空気づかひてあり
友は遂に来らであはれ文は来ぬ会へぬかなしみ彼にも我にも

同

病むときは騒がしくとも度々に見舞はるゝ身はうれしかりけり
草薙の鎌のはこびの巧みさに我はみとれて窓によるかな
友のなさけ我しみ／＼と感じたり病みていためる心は更に
千里万里何かあらなむ友しあれば世の荒波も我はおそれじ
真夜中にふとめさむれば風もなく唯ましづかに我が息聞こゆ

寢ては唯無為に過ぐす病みの日はその日／＼の惜しくあるかな
筋肉と頭腦とのかぎり動かし、身を病床に臥したる苦しき

病みてなほ太平洋の荒浪をのりきる夢を我は見にけり

生れては此の世の爲めに尽さなむ働きて後死なむとぞ思ふ

生れてはこの世の爲めに尽さなむ身はよし病みて弱くなるとも

熱のあるたけき心の男たれ身はよし病みて弱くなるとも

山の如海原の如大いなるゆとりある身のおごそかにこそ

たちねの心の幾度か悩まし、この身にしあれば此の身にしあれば

母の七年忌に

七年は早や過ぎにしか母君の今はのきはに強く見まして

いや遠にあゝいや遠に母の姿見ることなくて年だけ過ぐる

年月はつぎて過ぎむを母にまみゆることはいつの日あるべきものぞ

ふと夢に母に導かれ山道を歩むと見しが早く醒めにき

夢にかも母を見る時嬉しくも優しの姿におはしてあるかな

南の縁の日向に葵めでまし、母の御許にたはむれし日よ

母ましてやせし吾が身の此の頃を見まさば如何になげき給はむ

百目増し、と言へば喜びまた肥えよ肥えよと告りし母今まさず

苦しみの日は次々に明け暮れて病の床に母のこと思ふ

雁連に涙しぼりし曾我の子よ吾に母なしかなしき運命

母君の御歌かしこし何日の日か再び強くならざらめやは

秋

朝まだき落葉集めて焚く烟いぶせき庭の木立こめけり

窓あけて病の床を眺むれば光に満てる秋空の見ゆ

病おこたり窓に腰かけしばし見る枯れゆく木の葉と暮れゆく空とを

生か死か我が身一つの行く路は浪の上にもきざまれてあらむ

梧桐の枯葉は風にゆられつゝ秋の光をゆたかに浴ぶる

時雨日の風さへなきに梧桐の秋葉しめりて枝に垂れたり

つばくろは未だ死せずと思ひしに秋既に關けて血を吐きけるよ

友のたより

暖き秋の日うけてしみ／＼と友の便りを繰返し読む

病して心はいたく淋しかるを友のなさけにはげまさるゝかな

秋日さす南の窓にかたよりて友のことども思ひつめけり

繰返し／＼読みし友の文両手にいたゞきしばし目をつむる

合掌し瞑目しつゝ友々の文枕頭に感謝に泣きぬ

友々の心こめたる文読みて病める心によるこびあらしむ

天津日の海面ゆ出で、照らすところ大八洲国幸けくあれよ

——『青人草』誌（大正十五年二月一日号）所載——

「便り」（徳島県撫養にて）

……（前略）……『改造』や『解放』等の新人雑誌が数年前の人気を失つたことは○また一方その思想が一般に何かの形に於て行き渡つて了つたといふ感さへせられます。「今大学で社会主義に反対するものは殆んどありやしない。唯直に実行するか否やは問題であり、その儘の実行は不可能であることは皆知つてゐるといふに止まるんだ」こんな声を友から聞きます。「理論として正しく、実行として不可だ」といふ様な計量的論理が学生の間にも漲つてゐます。カントが「理論と実際」に於て砲弾の弾道などを引例してその間の差異を説いてゐます。しかしその際の情性運動といふ理論はガリレオが自然の単一性といふ概念を掴み来つて、複雑な自然現象から抽象して来たものであるが故に、二次的な観念を以て直接経験を比較しても不同は当然でせう。米から澱粉をとり出して澱粉と米の差異を喧しく言ふ様な気がします。しかし私は理論を否定するものではなくて、理論を金科玉条としてそこから演繹し實際化するものをすべて肯定する者に反対するのです。その点に於ては私は『原理日本』を愛しそれによつて導かれて参りましたことを感謝します。學術革命を標榜する所に『原理日本』の使命を思ひます……四月過ぎ健康が許さば上京致します。……（後略）……

（編者註）○字不明

——『原理日本』誌（大正十五年四月号）所載——

「便り」(昭和三年三月九日、副島羊吉郎宛)

……(前略)……大兄の方の試験は御済みになりましたですか、何日から御休みですか、御休みになつたら御帰省になり、高松へもいらつしやるでせう。そして何卒お訪ね下さらんことを偏に願ひます。そして御話を伺ひますことが出来たら喜ばしいことと思ひます。今のところ、まだ外出しませんが、暖かになれば、海岸散歩を始め度いと思つてゐます。写真誠に失礼してゐますが、寒さで冷え込んで居ましたから、気分がひき立たず延引しました。まだとても外へは行けません、その中暖かい明るい日に写真屋を呼びませう。どうも延引失礼致します。

出来るだけ読書、執筆に力を尽さうと思つてゐますが、すぐ疲れるので、思ふ様にゆきません。今日など、大部調子がいゝので喜んでゐます。

早く諸兄と力を合せ得る日を待ちこがれます。

信和会(東京高師)の方々によろしく仰せ下さい。

お目にかゝる日を待つてゐます。

「便り」(昭和三年六月十四日、副島羊吉郎宛)

……(前略)……月松会も盛にやられてゐることでせう。黒上兄が御尽力なさることが喜ばしく思ひます。瑞穂会との連絡がよくとれることを希望致します。大倉先生といふ大人格があることは吾々の強みです。会員は幾ら少くともいゝですから、この信念を徹して頂き度いと思ひます。

私も近頃非常によくやり始めましたから御安心下さい。上京出来る時もあると信じます。時期は恢復の遅速ですから不明ですが、治る自信はつきました。今迄多年遊び来つたものですから是から働らせて貰ひ度

い、そして殺つぶしの酬をし度いと願つてゐます。一高出の重松君が当地で代用教員をせられてるので、小
学教育も色々承り、そこにも興味を感じてゐます。精神的にあまりに慣性が瀟漫し過ぎてゐます。刻々に生
を感じる様なことが現代人に少なくなつてのぢやないでせうか。理論家は、小さな理論をあり来りの方法で
○ぜり、實際家は實際家であり来りにやつてるのでせう。そこには新興の思想に対する批判も不可能になつ
て了ひます。自己を客観視することを最も危険視します。ツルゲネーフの『父と子』を読んで、非常に考へ
させられました。ニヒリストなるバザロフの型の人が、段々と多くなります。そして、気まぐれな研究家
が多くなります。何故人生愛の爲め、あらゆる行動をしないのか。研究も亦愛の爲でなくつて何うするの
か。自然主義は、内心に、ロマンチズムを持たなかつたならば、ニヒリスト的にあらゆる權威無視の純客観
になつて了ふでせう。眼は冷なれ。されど心はあつかれ。御身御自愛祈ります。(編者註 ○字不明)

「便り」(昭和三年九月二十三日、副島羊吉郎宛)

謹啓 此の夏は、御訪ね下され共に語ることの出来たことを感謝致します。僕自身非常に弱つてゐた為め
心から御話も出来ず、生活も共に致すことの出来なかつたことを悔います。いつも深き御心の中に病めるこ
の身をお思ひ下さることを感激します。どうか早く元気になつて貴兄等の御活動に参与し度いと思ひます。
黒上様ともよく御話致します。毎週の御会合は今どういふ風にせられてゐるのですか、貴兄の如き真摯な方
によつて若溪に一つの勢力の出来ることを願つてゐます。何か書いて御送りし度いのですが、健康の都合で
遅れて済みません。いづれ書きませう。御身御大切に。

「便り」(昭和四年一月六日、副島羊吉郎宛)

副島兄 昨日は小包便にて結構なる御羊羹沢山にお送り下さいまして有難うございます。兄からこんなに御見舞を頂いては濟まない気が致します。母の命日にも供へおいしく頂きませう。兄の厚き御心感謝に堪へません。

年賀状を高松から頂きましたが、御立寄になつて御帰郷になつたのですか、高松の方へいらして御余裕があつたら何卒御来遊下さいませ。

黒上兄御病氣については、一方ならず御世話に相成り毎日の様に御見舞下さいました由私からもお礼申します。兄からのお手紙でどんなに安心致したか知れません。最初どういふ容態かわからなかつたので、「治つた」と言はれても安心していゝのか悪いのかわからなかつたものですから困りました。

是から黒上兄の御病氣御用心して御摂生をお願ひしたいものです。強い人でも無理はいけないのですから。僕はうんと弱りましたが、昨年末から少しづつ背骨の凝が治つて、何処か楽になつてきましたから、この分ならいゝと思つてゐます。とにかく世の中の景氣と同じくどん底にあるのです。前に書いた論文の続きを二つ書きかけてその儘になつてあります。何しろ勉強しないのと、書くことが出来ないで困つて了ひます。病氣で精神迄弱くなつちやいけないと励みますが、苦しさの余りつい／＼弱くボンヤリ日を過します。身体が疲れてきたことはほんとに大きな弱点となりました。気分がよくなつたらどうかして続け度いと思ひます。月松会の方々とは、共同して仕事をさせて頂き度いものです。ではまた、御身は大切に祈上げます。

「便り」(昭和四年二月三日、副島羊吉郎宛)

先日は御懇切な御便有難うございました。御寒さの折如何ですか、御勉強の御事と存じます。黒上兄次第

に御よろしく御勉強の由、喜んでゐます。が何卒過度の勉強の無い様、夜は眠れなくとも休まるゝ様御注意下さいませんか。

先日僕の写真送れとの御言葉恐縮です。丁度いゝのがないので、近く撮つてお送り致します。去年からその意志があつたのですが、病中次第に遅れてしまひました。身体はよくなる曙光が見えてきましたから御安心下さい。早くよくなつて相共に事にあたる日を願ひます。

「便り」(昭和四年二月十七日、副島羊吉郎宛)

先日は御手紙頂きました昨日も御端書頂き感謝致します。黒上兄の御写真よくうつり居り、久し振りでお目にかゝつた様でうれしく御礼申します。御病後大部御瘦せの様ですが、御元氣らしく見えるのが喜ばしいです。徳島の御祖母様のところへも御廻送しました。

大兄方の会を信和会と遊ばされし由誠に慶賀の至です。由来は黒上兄から御説明があつたでせうが、聖王の憲法を拝する時、信と和が根底であり、そして信あるが故に和し得るところに、それは、一つの心でありませう。益々発展せられんことを祈つて止みません。僕の健康も順調によく出しましたから此の春は愉快に御物語り致し得ませう。御目にかゝり度いものです。先づは取敢へず。

「便りとうた」(昭和四年三月二十日、副島羊吉郎宛)

先日は玄米食御すゝめの御手紙御真情を以て御書き下され、感激して拝読致しました。嘗て玄米をよく食べましたが此頃、晩パン食にして、朝は、白米食ですから、御教示に従つて、玄米食にませう。菜食は一寸困りました。野菜は好きですが、海岸に鮮魚あり、さしみ好きときてあるのでどうも是は止められませ

ん。野菜との混合にしませう。

高松までいらしてゐるのですか。あゝ僅か十四里を隔てゝほんとに残念です。僕も病人でなかつたら高松位は行くのですのに。

君と吾と偏に心通ひ合ふこと感ぜられ更に君思ふ

深き契結ばれてゆく吾等こそ共に力を協せて行かめ

鳴戸灘この潮流る上つ辺に君はおはすかこの潮上に

彼の山を越えて彼方に雲深く垂るゝ彼方に君ますらむか

此頃は少しよきまゝ砂浜に歩みて海の風を吸ひあり

よき心持に歩みてあればこのまゝに都に出でゝ働かめと思ふ

吾が道は打ち砕かれぬさあれその砕けし岩の上歩み行かめ

吾国の教育の為め力尽さんと共に誓ひし心たがはじ

力つくし君が教ふる甥君の入学かなはんことを祈るも

去年の春は君来ませしをなつかしくかへりみするも一年すぎぬ

この年も会ひ度き心の止みがてに暇をつくりて君よ来ませな

黒上兄も月末迄には御帰りだらうと待ちこがれます。中学入学試験終了後か、御上京の節かに御訪ね下さらんことを偏に願ひます。御身御大切に。

序

今諸兄に呼びかけ我が思ひを語り告げ得ることを無上の喜とします。黒上氏から諸兄の会の力強い団結を聞き更に信念に基づく活動を知るに及んで処は遠く離れ、副島兄の他は未知の友であるとはいへ心に通ふ友の世界に没入し、同心協力日本のために尽したい念願を以つて筆を執りました。黒上氏が 明治天皇、聖徳太子を仰ぎまつる大いなる日本精神を釈明せられ吾等の行くべき道を知らしめしは、実に我等の信の力の溢れ出づる源泉を獲得する歓喜にて、我等の団結を成す根本信念をなすのです。而して黒上氏は常に諸兄の前に立たれて直接諸兄と言葉を交へ、この信を諸兄に語らるゝを以つて僕はもうこの点についてはこゝに申しますまい。諸兄が将来教育の事業に携らるゝ身なるを思ひ拙なき考も願はず、僕自身の教育に対する意見を述べ日本精神より生れこれを闡明すべき教育は如何にあるべきかの愚見を諸兄に訴へ、諸兄の批評検討を願ひます。庶幾くは諸兄に於いて寸毫の容赦なく、非を非とし是を是とし以つて是が実行にあたられん事を希望します。

過去二千年の間に於て、この国土に培はれ来つた日本精神の美しき伝統を受継ぎ、そこに恵まれて居るといふことを自覚した時、我等は唯それを甘受して、無為に楽しむのみでよいであらうか。「信は行を生ず」大いなる歓喜は大なる実行をもたらさなくてはならない。我々は日本精神の時代的發展を期し、新しい日本文化の建設を志し務むべき念願に立たなければならぬ。

文化建設は一に専門学者の成し能ふるものにあらずして、国民全体の潑刺たる意気に基づくべきものであつて、先づ我等は国民教育をもつて日本文化建設の根底となすのである。英雄待望の声は巷に聞えるけれど、英雄は彗星の如く不意に来て不意に去るものではない。勿論彗星の出現それ自身さへ、天空にあつて

は、不意の出現移動ではないであらうが、人心の世界に於ける英雄の出現は我等の心にとつて更に深い関連がある。明治といふ文明開化の標語に走つた時代には親鸞聖人は生れなかつたらうし、元祿の頽廢時代には豊太閤はなす事を知らなかつたであらう。一人の英雄偉人の生れる迄には時代と環境はこれに必ずべき温度に育まれなくてはならない。英雄は我儘なる暴君ではなくして、寧ろ時代の願ひ求むるところに対応したる指導者として現はるゝ偶像である。

かゝるが故に現代を救ふべき英雄の出現を座して翹望するは誤にして、正に自ら立ちて時代の救はるべき道を求め、精神環境の向上を計らんがため国民教育に努力すること我等の務である。

此の国民教育については、フイヒテは『独逸国民に告ぐ』の一卷に精細巧妙にその抱負を論じて居る。そこに論ぜられたところは、独逸とあるを我等日本として味ひ読むにおいて、現代日本に適切を極めて居る故に、諸兄に之を勧め以つて纏説の重複を避けて、僕は現代の学校教育其のものについて考察しよう。

「学校教育はつまらないものであるといふことがほんとうに解つた時それが眞の卒業といふべきである」と云ふ禅僧の一喝めいた言葉を聞かされるが、それが否めない程現代教育は沈滞し悲觀せらるゝのである。此の時その句を如何にも肯んずるものは、更に一步進めて然らば現状を其儘に看過してよろしきや、何故に学校教育が否定せらるべきか、いかにして学校教育を生かすべきかを考へいたらなくてはならない。学生が青年である以上、その青年に自発的研究態度を失はしめ、学科を重荷の如く課することは、現代教育の罪である。青年が潑刺たる生気を失ひ、自らの意欲を沈滞せしめて、安易と享樂の裡に逃避し、ただ流るゝがまゝ流るゝに至つては、国家の衰頽火を見るより明らかである。青年は須らく虚榮と打算とを離れて自らの責務に邁進しなくてはならない。さうしてこの青年の元気を年老ゆるまで冷めしめないやうに熱き信念を持たなければならぬ。これを養ふことは青年を鼓舞する教育に於て最も大いなる責任を見出すのである。然

も現代多くの中老年の教育者は、この青年の意気を鼓舞しないばかりでなく利己心に固まれる家庭及び環境と共に之を逆に導くこと多き故に諸兄の如き目醒たる青年教育家の奮闘は切実なる時代の要求である。学校教育の教ふところは実に多種なる課目であり、諸兄が教へらるゝところの者は其の多種なるものゝうちに於て一乃至教課目であつて、多数学生はその嗜好により又その趨向によつて注意の厚薄があつて統一したる教育は施せないであらう。

然し一即一切行と云ふことがある。それは一つの研究はそれを究めることによつて真理の奥底に達することが出来ることを云ひ現はしたものである。一課目の教授といへどもそれが教授を専念することによつては、学生にいかにも大いなる薫化を与ふるかもはかり知れない。

教育者自身が学科に興味なく俸給に対する責務として荷厄介といふ態度を以つて、生徒の前にひきずらるゝ如くに立ち、自らの正しき理解なく、またその内容に深き信念を持たずして、あり来りの其の場ごまかしの講義をする時、いかにして学生が真剣になり得よう。真剣は真剣によつて呼び醒まさるゝのである。教壇に立つものが其の学課に対する苦しみ抜いた体験より溢れ出づる講義を聞くに及んでいかに其の学課に不忠実なる学生といへども、大なる感銘により何者かを与へらるゝであらう。今体験といふ言葉を使つた。学課に於ける体験とは、その教へんとする内容即ち本に書いてある事柄を鵜呑みにすることではなく、或は自らの心に照し合せて其の真偽を極め、或は実験に依つて其の当否を究めなくてはならぬ。化他は先づ自行に始まらなくてはならない。常に実物にあつて真摯なる態度を執ることは、学生を空理空論の迷路より救ひ、正しき決定を心にとふるであらう。

歴史教育が現代の思想界を救ひ、正しき道を教ふるものとの叫びを聞く。然し、今日の如く萎微したる歴史、事実羅列の教育は、却つて唯物史観に材料をあたへる結果となるやも計り知れない。歴史教育者自身が

人間の踏来つた過程を考察し、将来の日本が如何にあるべきかを自ら苦しむ人であつて、眞の歴史教育は達せられるのである。

古の大和の民が言挙を嫌ひ直接体験に生きようとしたその思ひは、今我々に於ては経験に重きを置く、——即ち経験内容を持つ理論に進むことで無くてはならない。この念願を以つて僕は各種の課目に就て其の方法を考究して諸兄の心に問はんとするのである。

第一信

ここに先づ或老農学士の言葉を記してみよう。

「農学などは簡単な学問だから別に実地に一々やつてみなくても何時種子を蒔き、植付けをし、手入れをし、取入れをすればよいかの講義をノートに取つてその通り実地にやれば善いのだが、教室さへあれば農科大学にさう実習地なんか要りやしない」此の言葉は、決してこの一農学者だけの言葉でなく、日本教育界の通弊から生れた言葉ではなからうか。日本の学問が行き詰つてゐることは誰しも云ふことであるけれども、その行き詰りを打破するものはなんであるかを考へない。学校では理論を習ひ、又實際問題をもノートに記し、それを暗記して卒業してから実地にもやつて見ればそれで善いなどと云ふ考は実に教育の萎縮であり墮落である。さうした教育を受けた学校卒業生はいざ實際に當る時過去に習つた事を思ひ出さうとするか、他の文献を漁るか、それ位の事が関の山であつて自らその事自身に當つて研究することが少い。学校の講義を暗記するをもつて能事終れりとする者は、教授の講義をもつて金科玉条とし、それを出づることがない。研究と云へば文献の蒐集を主にするものと相場が定つて、直接研究に進む者の少ないのはこの教育法の欠陥に基くものと見るべきであらう。農学の例をもつてすればアメリカには殆んどネーブルオレンヂに病菌が居らないさうであり、日本の雲州蜜柑の輸入にも厳密な検査をするさうである。しかるに日本では外国の

虫のつかないネーブルの種を蒔いてしかも虫付の実を段々と作つて行く。日本の農業の進んでゐないと云ふ事をもつてたゞちに大学以下の諸学校の教育法を非難する事を酷と云ふかもしれない。しかしそれは実際に於て酷で無くして到る処に同様の欠陥を見出すのである。その故は日本にこれだけ多くの農業関係の学校が出来て、形式的には耕地整理並びに新しい農業生産物の普及増進が行はれてゐるけれどもそれは一部であり、然も未開発の所があまりに多いからである。学校に残つて研究するものは、博士にならなため研究と云ひたい様な細密な研究が多く、地方へ出る人には学校教育に於ける無研究をその儘続ける人が多い。今一学生に一年間一草木について観察し続けて行く事と、一ヶ月間その草木に関する諸文献を集めて研究するのとどちらが真に勉強した気がするかと尋ねたならば、恐らく多くの学生は後者によつて真に勉強したと云ふ自覚を感じるであらう。

「無知なる者に発見多し」と或碩学が云つた。確かに過去の文献に亘つてゐない者は、既に発見せられた事実とも気付かないで自らの発見として喜ぶ愚を演ずるであらう。しかしながらその愚は決して笑ふべき愚ではない。自ら発見したと云ふ努力と其の精神傾向は必ず又あらゆる方向に向つてしかあるであらう。研究すべき対象が自然そのものにあるに拘らず、他人がその自然を研究したその結果を総べてと考へるならば、未来に対する発展はあり得べくもない。我々の師は自然にあり研究対象も又自然にある。

宏大なる自然そのものの研究が一部研究者にのみ任されて、最も自然そのものに打ち当る實際家に顧られないのは恐るべき事実と云はなくてはならぬ。農学校の実習園に青々として理想的に出来た蔬菜果樹があることが必ずしも誇りではない。寧ろそうした理想的なものゝ傍にむしろばんだ果樹、病菌の付いた野菜こそあつてほしきものである。学生は將にこの不出来な植物に対して自ら観察と実験を怠らず、これが治療法を教師の指導を受けつゝ自ら試みてこそ将来各方面に立つて実地に当るとき改革と改良とをもたらしうるのであ

る。

以上は農業を中心に日本の教育を非難したけれども、これは決して一部に限らずしてすべての方面に於てしかるのである。僕は或時一人の高校生に尋ねた。

「何故に浪は砂浜の岸に平行に打ち寄せるか」

彼は答へた。

「浪の速度は深さに反比例するから」

彼は学校で聞いたのであらう。然しそれ以上の考察を試みてゐない。しかして岸打つ浪そのものを観察してゐない証拠に、何故に岸打つ浪が真白な水泡を立て、打ち寄せるかを説明し得ない。一つの定理又は他の研究の結果に信頼し一つの現象の原因をそれらに結びつけることは決して悪い事ではない。しかし結びつける前に現象そのものをよく観察して、その定理の生れ出づる過程を味ひ、結論として其の定理を引用し計算に用ふべきである。波の問題は極く簡単な問題であるけれども、多くの学生はこれを見ながらも殆んどその説明を考へない。一つの定理から一つの現象を恰も峯から峯へ結びつける如くに引用する時には、その現象のもつ多様な興味深き事実は見逃がされてしまふであらう。三界の死骸を宿さずと云ふ大海が、何物をも岸に打ち上げる理由や、そこには深海の波と海浜の波との水の分子の廻転状態の差等に面白い観察が行はれなくてはならないのに、定理の盲従的引用はその考察を殺してしまつてゐる。数学は純粹形式の論理であつて、定理を直に引用して論ぜらるゝけれども、複雑なる實際自然現象は抽象せられたる定理によつて直に規定する事は困難である。

茲に現代自然科学の研究方法論に言及し、以て之が教育に及ぼす影響を述べて見ようと思ふのである。自然科学の教授の最初に於て観察と実験とが尊ばれてゐ乍ら、それが統一に於ては真に然るか危ぶまるゝ所が

多いのである。言語は先づ概念の表現として尊ばれ、無理矢理に一の定義の下に言葉が与へられ、各個人の過去の経験による類推よりそれ／＼の内容を言葉に表はさるゝ概念の内包として実験観察を統一してゆく、ここには恰かも代数式に於ける既知数を a 、 b 、 c ……等によつて表はす時その a 、 b 、 c ……の値を各人が定めて然る後未知数を求める様なものである。その時 a 、 b 、 c ……の数値を何故にそれだけの値に与へたかといふについては明瞭なる信念を欠いてゐる。

今物理学について考へてみよう。力といへば腕力による押したり、引いたりする力が表象せられそこから一般の力が類推されよう。また分子原子の存在といへば箱の中に入れた豆粒が想像されよう。波動運動と言へば水の波が考へられよう。もつと個々の問題に於て考へて見たならば、目に見えない存在、又は力はかうした各種の推理から生れてゐるのである。その推理は論理的帰納演繹の推理と共に無意識に働く可視的現象の類推が大きな力をなしてゐる。こゝに経験法が重要な位置を占めてきた近代の特徴が生れたと共に、現象の個々の認識が余りに過重せられてそれから一切の法則に対する関係を見出すのでなく、個々の現象に孤立的法則を持たしめて、然る後現象各自を結ぶのである。

エネルギーの思想がさうである。力学的エネルギー、熱のエネルギー、電気エネルギー、その様な量を持つた力の存在といふことは労働者が腹に充分食物を入れて一令の下に仕事をしようとする時の力を連想し、熱エネルギーが仕事のエネルギーに変わる様なエネルギー相互の変質は恰も一コップの水が他のコップにうつさるゝや、薬品の為めに、真赤になる様なマジックと同様に見はしないか、こゝには工学が物理学を支配するのである。

適用の便宜が、理論の真理を動かすのである。之を如実に示す例として、力学の各種問題を論すべきなれど、適例として慣性について考へてみよう。物体はすべて現在の運動状態を保持せんとする性を有すと考へ

るのである。そこには可視的物体が個々別々に存在すると考へる如くに力も亦個々の物体に保有せられてゐると考へる。そして宇宙に漲る力線の網の目は考へられて居ないのである。故に外部から全く作用を受けざる場合には運動せる物体は何時迄も速度を変ずることはないと考へる。この場合外作用を摩擦によつて代表せしむる時摩擦が多い丈運動体はマイナスの加速度をうける。故に少くすればするだけ、負の加速度が減ずる故、数学的に極限を考へ得たのである。けれども摩擦のあるといふことは運動体の周囲の物質に力線の結合のある証明であり、即ち宇宙の力線網の中に存在するといふ証明である。故に摩擦を零にする世界があるとすれば運動体自身は運動し得ないのみならずそのもの自身が破壊しなければならないのである。何となれば自分自体のみ力線を出して活動し周囲に之に応ずるものがなければ力線は結合の相手を失つて、内部に親和する短力線と、外部に伸びる長力線との調和を失ひ、表面張力の破壊を起すからである。

此の便宜が、事実を変形したことは多くの学生を誤らしむるのである。宇宙力線網を離れて、個々物体個々の力を想像することは、全体の人類生活を離れて個人生活を考へることにもなるのである。個々の現象を個々のものとして考察するところに純客観をモットーとして他の生物を人類と分離せしめ而かもそれは人類をも他の生物から類推してくるのである。

是が現代の自然科学の研究法論が学生の精神教育を誤つて了つた原因である。現在如何に精神教育を別科として学生におしこまんとしても現在存在する明瞭なる教育即ち自然科学に対する研究法論をこの儘に放置するに於ては何の効果を見得るであらうか。

この遺稿は昭和四年二月執筆、当時副島兄等の結成してゐた東京高師信和会に書き送られたもので、連続的に書かれるものであつたのですが、間もなく急逝されたため「第一信」のみで中絶してゐます。(『伊都之男建』編者識す)

附

錄

(一)

(二)

(三)

(一) 黒上正一郎先生の御母堂(黒上住恵さま)から
一高昭信会会員へのお便り

黒上住恵さまは、御息正一郎先生の御逝去のあと、亡き御息が全身全霊を傾けて育成された「一高昭信会」のために、貴重な私財を寄せられて、会誌『伊都之男建』の刊行費用や、御遺稿『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の上梓費用を次々に寄贈せられたばかりか、御息御逝去後に一高に入學し「一高昭信会」会員になつてくる若い人々に対しても、くりかへし筆をおとりになつて鄭重な巻紙墨筆のお手紙をお送り下され、亡き御息に代つて会の発展と祖国日本へのお心を寄せつゞけられた。こゝには、そのお心を偲ぶよすがとして、いくつかのお手紙を紹介させていたゞいた。なほお手紙は句読点、送り仮名がないので編者で読み易くさせていたゞいた。

小田村寅二郎氏宛(昭和九年十二月二十七日)

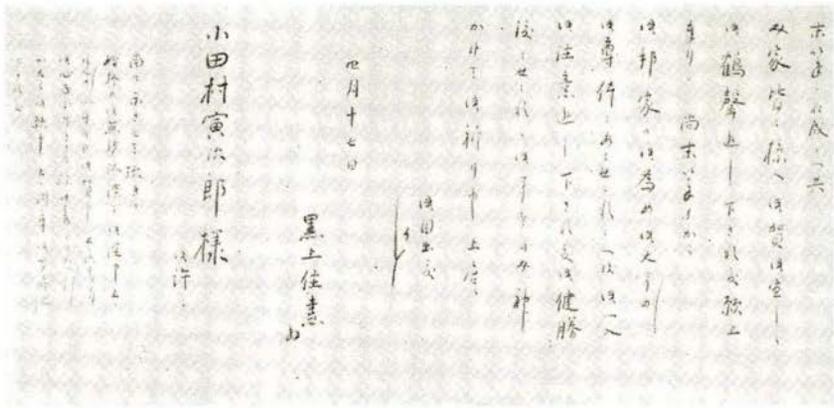
拝呈



黒上住恵さまのお姿

何より如何相示し申上げ候へば宜しきや御礼御詫び申し上げ度き事山々これ有り、拙なき筆には尽し難き事に御座候。誠に一年近くの御久々、御尊きみ心痛め奉り御無礼の限りをいたし、何とも申し上げ候言の葉も御座なく候次第にて、心に銘じ居り候万分の一尽し難く候義、何卒御許し遊し下され度く願ひ上げ奉り候。

御寒さ次第に相募り候へ共、御尊台様には何の御障りもあらせ



黒上住吉さまの御筆跡

られず御健勝御清福に渡らせられ候御事と謹みて御賀申し上げ候。

さて去る二月十八日み恵み給はり候深き御真心もらせらるゝみ便り拝させて頂き候へば、御校に御精進遊さるゝ様ならせられ候てよりみ心強く御思召さるゝ御程に御健体とならせられ候御由、何よりも第一に有難くよろこばせて頂き候事にて結構なる御事に御座候。此御上共にも人様一倍御健全と御幸多く入らせられ候様そののみ願ひ上げ居り候。私事去る二月十四日より病床に相臥し候に付ては実に長き月日一方にて候はぬ御尊きみ心御痛め申し上げ候義、何とも御詫のいたし様も御座なく、深き罪消え難き事に御座候。始終御一同様より勿体なき御慈しみを頂き居り候御蔭にて、日々を無事過ぎて頂き居り候身に御座候へば、十分注意を致さねばならず候に、不養生なる事のみ仕り候ため一年近くの御久々筆紙に尽し難きみ心痛め仕り、かへすゝ申上様も御座なく候事をくりかへし存じ居候。日夜御敬慕申上居候御一同様より御尊きみ心もらせらるゝ御尊書拝受仕り候せつは、病床に臥し候五日目にて未だ熱度も高く候ひしが、御会よりの御尊書と聞き、苦しさ、うすらぎ候を相覚え御玉章押し戴き直ぐ様病床に抱かせて頂きて、御慕ひ申上げ涙ながれ候事に御座候。

病うすらぎ御文拜させて頂き候せつの有難さ嬉しさはたとへ様も御座なく、何卒御察し遊し下され度く候。故人は不幸にも早世いたし候ため只々一度の御目もじも叶ひ申さず候ひしに、始終御追慕下され候上、拙なき私をも故人に交らせ給ひて御慈しみ遊し下され候御事、何と申上候へば、私心に勿体なくよろこばせて頂き居り候一事申尽され候や、拙なき筆には申しあらはし難く候。拙書相したゝめつゝも御無礼なる申し上げ様ながら故人の如くに慕はせて頂き居り候。御なつかしの涙ながれ申し誠に不思議の御縁に御座候。

一寸先はやみの夜のたとへの如くにて、私事も長き病床に相臥し候身に相成り候事とはさら／＼思ひもより申さず、病中如何なる経過に相ひ成り候はんかと心を痛め候事に候へ共、痛め候中にも日夜御敬慕申上居り候御一同様の御蔭にて、心を強めさせて頂き心一途に御慰びさせて頂き候御蔭にて全快の有難き日を相過され候様相成候事に御座候。右様の次第にて候へば御一同様より頂き居り候御尊書を、いためては申し訳御座なき事と風呂敷に相つゝみ、病床の頭上の箱の上に全快迄置かせて頂き、病うすらぎ、拜され候様相成り候てよりは、拜誦仕り候事その日／＼の楽しさ嬉しさにて、何かにつけ深き御慈悲に浴し誠に肉身以上の御縁を日夜有難く存じ、たへ難きほどに御慰び申し上げ候せつゝも御座候。月日のたち候事遅き様にて早く、故人四周年を相過し候。毎年御規律御正しく御至誠こもらせらるゝ追悼会御営み遊し下され、本秋も御一同様御熱誠こもらせらるゝ追悼会御挙行下し給はりて、御慰霊遊し下され万々有難きみ心尽し御厚礼の申上様もなく、御尊きみ心を伏し拝み奉り感激の涙に咽びつゝ御礼申上候。

尚又追悼号御発刊遊し下され万々御誠意こもらせらるゝ御配慮み心遣ひの程深く拝察仕り候。実に拝謝の辞尽し難くかへす／＼御礼申上候。御一同様には御尊きみ心を御一致遊されて、万事万端に御行届かせ遊されしみ尽しを給はり、万々有難きみ仰せ実に身に余るみ恵みを故人は如何に相よろこび如何に拝謝感激仕り居り候はんと、深く／＼存じ、まのあたり見る如くに存じられ候事に御座候。

故人は不幸にも御一つ心に万事をいたし候事叶はず候ひしに、御一同様には故人生前の念願み心深くかけさせ給はり、御尊きみ心を御一致御団結遊されて御貫徹遊し下され候御事にみ尽し給はり候有難さを朝夕前にて申述べ、尚墓所へ参り候せつはこま／＼涙に咽びつゝ申し、生死のさかひは御座候へ共よろこびを共にいたし候事に御座候。及ばぬ事にて候へ共故人壮健にて候へば皆々様には如何ばかり御よろこび下され候はんかと存じ、正一郎も其よろこびは如何ばかりにて候はんかとくりかへし存じられ候事に御座候。病中にも御会の御上ばかりを申し続け候次第にて深き思ひに沈み候せつも御座候。

副島様にも文理科へ御通学の御由御親しく御物語り遊され候御事と存じ上げ候。副島様にも御一同様御尊きみ心に深く御感激遊され居り、追悼会御式場へ御参列のせつ、涙なしでは見られませんでしたとお仰せ越し下され、こま／＼と御真心こもらせらるゝ御敵そかの御模様を御申越され心にしみ勿体なく存じ候事に御座候。始終私の身深く御心配遊し下され忝なく存じ候事尽し難く候。御蔭様にて漸く九分まで相運び相くつろぎ候このせつにて候はゞ、少し手が重きと上へ手をあげ候事不自由位にて候へ共これ位にて候へば致しよき事と嬉しく存じ居り候。これよりは病氣にならぬ様にと用心いたし身を壮健に相過し候間、何卒み心安らけく御思召下され度く願ひ上げ奉り候。長らくの間一年近くも御無礼に打過ぎ候事とて申し上げ度き事沢山これ有り思ひのまゝに一つ／＼と存じさせて頂き居候内、つひ／＼長々しく相成余りにも御無礼に相成り候まゝこれにて筆とめ又申上げ候事にいたし候。誠に心も届き申さず候したゝめ方に御座候へ共、なが／＼の間の御厚礼並びに御詫まで申上度く万分の一尽し難く存じ居り候心御くみ取り遊し下され度く願ひ上げ奉り候。

末筆に相成り候へ共、御寒さ相募り候折柄に御座候へば御尊体御大切に遊し下されたく御健こやかに渡らせられ候様それのみ祈り上げ奉り候。

(昭和九年) 十二月二十七日

黒上住恵

小田村寅二郎様

御許に

尚々示させて頂き候

始終は御会の御為め御誌の御為め万々有難きみ尽しを給はり御真情千万忝なく深く御礼申し上げ候。御一方ならぬ御心労の程深く拝察仕り居り候。何卒御障りあらせられぬ様にと始終願ひ上げ居り候事に御座候。

小田村寅二郎氏宛(昭和十二年十二月十六日)

……(前略)……御尊台様には三井先生と故人がお別れいたし候川べりの御処にて御思ひ出深く遊し給はり故人を御追憶下され候御事誠に勿体なく身にしみ有難く存じ候事に御座候。私事ものりと(編者註 三井申之先生が作られた「黒上正一郎君のみ霊の大前にさぐるのりと」を指す)を拝させて頂き候てより正一郎がにつこり笑み候ひつゝ、あと見返り御挨拶をいたし御名残を惜しみ過ぎ行き居り候姿を目前に見る思ひをいたしたつかしき涙ながれ候せつ御座候。御尊台様にも御一つ心に限りなき御真心こもらせらるゝ御感遊し下され感涙に咽び居候。何卒御推察遊し頂き度く願上奉り候……(後略)……

小田村寅二郎氏宛(昭和十二年四月十七日)

謹呈

御尊台様には、御日頃の御功績御あらはせられ、御首尾よく御合格の御榮を得させ給はり候御由、万々御目出度謹しみ／＼て慶祝奉り候。御尊台様み家皆々様を始め奉り、御会御一同様の御よろこび深く拝察仕り候。至らぬ／＼私までも御一つ心によるこばせて頂き有難く存じ候事拙なき筆に尽し難く候。就きましては御近く候はゞ御賀の御印までに粗魚拝呈仕り度くと存じ候へ共、誠に御遠々しく候次第にて甚だ御無礼なる致し様ながら為替にて金五円(編者註 今のお金にすると二万円位かと思ひます)御同封させて頂き候まゝ、何卒み家皆々様と御祝儀の御看御召上り遊し下され度く願上奉り候。誠に粗略なるいたし様幾重にも御詫び申上候。

甚だあら／＼の申上様ながら御賀まで申上度く、末筆に相成り候へ共

み家皆々様へ御賀御宜しく御鶴声遊し下され度く願上奉り候。尚末筆ながら

御邦家の御為め御大事の／＼御尊体にあらせられ候へば、御一入御注意遊し下され度御健勝に渡らせられ候御事をのみ神かけて御祈り申上居り候。御目出度う／＼。

(昭和十二年) 四月十七日

黒上住恵拝

小田村寅二郎様

御許に

尚々示させて頂き候

始終の御無沙汰深くお詫び申上候。ほんの／＼心ばかりの御賀申上候次第に付き、御心遣ひ下さらぬ様この義くりかへし／＼かたく御願申上候。何卒御聞届け遊し下され度く候。

小田村寅二郎氏宛（昭和十二年十二月八日）

……（前略）……いつも／＼御一同様御尊きみ心こもらせらるゝ玉誌御惠送を辱ふし御懇情のほど千万忝なく深く御礼申上候。

いつも／＼ 太子様へ御奉供仕り候後、仏前へ供へさせて頂き相よろこばせ候後、私事有難く謹しみて拝させて頂き候事に御座候。……（中略）……御珍しく御結構なる御賜物梅木様に御仰せられ候御事申遅れ相済み申さず候事にて候ひしが御許容遊し下され度く候。

御小父上様御言葉に力得らせられ御珍しく結構と御よろこび遊され候御事御一方にて御座なく、御福分けいたし候ひしを嬉しく存候程にて御座候。なき紹男様御命日にお供へ遊し下され候事を申上置候次第にて、此十三日にはお供へ下され候御事と存じ、正一郎と一つ心に有難くおよろこび遊ばれ候御事と存じ居り候。私方にも度々供へさせて頂き其都度私事も忝なく頂戴させて頂き、生死のさかひは御座候へ共一つ心に御厚きみ情をよろこばせて頂き居候。……（後略）……

編著註 「玉誌」とは『伊都之勇建』（一高昭信会刊）のこと。「太子様」とは先生が生前お部屋に掲げてをられた聖徳太子の御肖像のことである。

高木尚一氏宛（昭和十三年十一月十八日）

拝復

御懇情こもらせられし御玉章御頂かせ遊し下され、厚きみ情のほど誠に有難く幾重にも御礼申し上げ候。御なつかしく嬉しくくりかへし拝させて頂き候。其後は私こゝろ何とも申し上げ様も御座なき御無沙汰を仕り誠に相済まざる次第に御座候。始終の御無礼、何卒み広きみ心に御許容遊し下され度く願ひ上げ奉り候。

御仰せの如く御寒さ次第に相増し候処、御尊台様には何の御障りもあらせられず御機嫌御麗はしく渡らせられ、何よりも有難く存じ候事に御座候。御芽出度く謹しみて御賀申し上げ候。

申し上げ候までも御座なく候へ共、この御上共に御尊体御大切に御自愛遊し頂き、ますく御健勝御清福に御日々を渡らせられ候様たく心一途に御祈り申し上げます候。

さて御こま／＼と限りなき御優情こもらせらるゝ御仰せ言、御目にかゝり候事叶ひ、拝承いたし候思ひをいたし候。始終は御会並びに御誌の義に付き、万々勿体なく存じ候み尽しを辱ふし、御日夜の御分ちなく御労苦を給はりて、御会御誌の御発展を計らせられ、何とも申し尽し難く存じ候。御真情に浴させて頂き候義御礼申し上げます候言の葉も御座なく、只々感涙に咽び遠き地より拝謝申し上げます候。御蔭様にて年を追ひ御著しき御進展遊され候御事、御尊台を始め奉り御一同様御骨折の御賜物と、故人も地下にて如何ばかり感激仕りよろこばせて頂き居候はんと存じ候。先日は大学に入らせらるゝ御方様み心深くこもらせられし『学生生活』の御誌かずく御惠贈を辱ふし、千万忝なくかへすく御礼申し上げます候。先日頂戴させて頂き候せつ、どなた様へ御礼申し上げます候へば宜しきやと相考へ候次第に御座候へ共よき考へもつき申さず、末尾に加納様の御芳名を押し候まゝ、加納様へ御礼申し上げます皆々様へ御宜敷く御伝へを御願ひ申し上げます候次第に御座候。御一同様御一致の御発刊の御由拝承させて頂き誠に有難く深く拝謝奉り候。

御尊台様、田所様を御主に御一同様御熱誠こもらせらるゝみ心尽しの御賜物有難く感涙に咽び申し候。御事務所に御借受遊されし御座敷、正一郎生前下宿いたし候「桜館」にて御座候由、此室を御えらび遊し下され御なつかしく御思召し下され候て御集合頂き、御一致遊され候御尊き御物語御打合を遊し下され候限りなき御真情の程、筆にも言の葉にも尽し難く存じ候。勿体なく忝なく御真意こもらせらるゝ御配慮に感涙止り難く泣き咽びてよろこばせて頂き有難く存じ候次第に御座候。丁度、室明き居候事も不思議の御縁にて御尊

台様、田所様を始め奉り御一同様の御心届かせられし御故と実に万事万端に身にしみ心に銘じて勿体なく有難く存じ候事のみにて御座候事を心にくりかへし候。斯くまでに限りなき御至誠もらせらるゝみ心尽しを賜はり候御事を、正一郎は如何ばかり感喜仕り如何に拝謝感泣仕り居り候はんと存じ候次第に御座候。頂戴させて頂き候御尊書私ばかり拝し候事余りに勿体なく存じ候へば、故人へ供へさせて頂きこまゝと御誠篤のみ尽しを申して幽明を異には致候へ共、一つ心に有難くよろこばせて頂き候。お仰せの如く戦地の兵士の上思ひやられ申候。早く戦がすみ候へばと思はぬ日御座なく候にまだこれからにて候由、又々同情いたし候人沢山出来候には涙ながれ申候。

幾度くりかへし拝させて頂き候とも又くりかへし拝して無上によるこばせて頂き度く存じ上げ候。御玉章を頂戴仕りせめては万分の一の御礼なりと早く申し上げ度くと、心あせりつゝ此間少しく取紛れ候事御座候ひしたため、相済まぬ次第と日々存じながら今日まで相違はり候段申上げ様も御座なく候へ共御用捨遊し下され度く願ひ上げ奉り候。誠にあらゝの申し上げ様にて遅さまながら謹しみて御礼並びに御詫びまで申上度く、末筆にて候へ共、御寒さ日々増し候へば、くれぐれも御大事に御用心遊し下され度く願ひ上げ奉り候。始終相済まぬ事のみにて御座候に御丁寧に御仰せ頂き恐れ入り候、心も届き申さず候事のみにて何とも申し上げ様もこれ無く候。

(昭和十三年)十一月十八日夜

高木尚一様

御許に

住恵拝

(二) 追慕の記

梅木紹男氏を悼む——水野龍介記——

今回梅木紹男氏突如四月十三日御逝去の御通知に接し誠に哀悼の至りに堪へず候。氏は黒上正一郎氏の竹馬の友として『原理日本』創刊号以来の誌友に有之、第一高等学校在学中同校内に組織され居候処の瑞穂会委員としてその機関雑誌『朝風』に拠り祖国防護思想言論戦を闘ひ来られ申候が不幸にして病魔の襲ふ処となり御郷里に御静養遊ばさるゝの已むなきに至り候事返すゝも残念千万に存ぜし次第に御座候。されど「病も知を致すことの一つ」と思ひ諦めひたすら其の御快癒を信じまた祈り居候所はからずもこの悲報に接し茫然自失仕候。氏は御養生の間に高等学校を御終了に相成り東大文学部に進まれし程の秀才にて其の明晰なる頭腦の一端は本誌第二巻第四号の御消息中にも表れ申居候。斯の如き有為の青年を失ひ申候事誠に国家の爲めに悼みても余ある次第に有之、更に御家庭の御愁傷如何ばかりかと本誌に於ても哀惜の感に不堪此処に謹んで弔意を奉表候。

——『原理日本』誌(昭和四年五月号)所載——

黒上正一郎先生と梅木紹男兄のこと——重松鷹泰記——

今でも僕は苦しい時情ない時には先生のことを思ふのである。先生の静かな朗らかさと温い親切とが、ひし／＼と思ひ出されて心がなぐさまるやうな気がするのである。先生の童心と友情とは誰でも心の底に沁みこんでその跡を残してゐる。僕は自分の四国滞在の思ひ出を中心として、先生のそのお姿を偲ばせて頂かうと思ふ。

昭和三年四月四日の夕刻、余は三ヶ年の向陵生活にもて余した自己を再建設すべく、鳴門の潮路を渡つて小松島港に入つたのである。未知の天地の生活を始めようとする自分は限らない不安と、はてしない想像とに身を任せてゐた。然るに藤井信男兄其他の瑞穂会員と共にお出迎へ下さつた先生は先づ我らを小松島の海岸弁天島の一料亭に案内して下さつた。松風の音を聞き乍ら、先生の親切なそしてまるで昔馴染のやうな御もてなしに酔へるが如く夢みるが如き心持になり此世の外の別天地に遊ぶが如き感があつた。それは実に美しい月明の夜で、海岸の砂浜に印する松の影、月影に霞む近くの山々の姿と共に、この先生の温いおもてなしを忘れることができない。

その夜は遅く徳島市に戻り船場町の古風な先生のお家に案内され、感慨無量の一夜を前二階の行灯の光の下に、先生を中心として寝たのである。翌日は城山に桜を、午後は眉山に焼餅屋を訪ねたのであつたが、余は特に先生のお伴をして県庁の学務部に川久保部長を訪ね辞令を貰つたのであるが、飄々然たる先生のお伴をしてゐたので、一向に固苦しいこともなく愉快であつた。

その翌々日か我らは乗合自動車にゆられて撫養町に梅木紹男兄を訪ねた。梅木さんは思ひの外に元気で、童顔をニコ／＼させ乍ら玄関にあの通りキチンと坐つて手をついて我々に挨拶をされた。先生と梅木さんとがすぐに「テン」「コ」の冗談めいた挨拶に移られたのには一寸おどろいた。先生と梅木さんとはどんなことがあつても、例へば新しい精神団体の設立と云ふやうな命をかけての御事業のことを話される場合でも、お互には「なあテン（天狗さんの略）」とか「コ（子供の意）よ」と云ふ風であつた。先生は梅木さんのことを、他の人々に対しては「梅木さん」「梅木君」「紹男さん」等云はれてゐたが、先生のお母様に対しては大抵「紹男さん、紹男さん」と呼ばれてゐた。知らないものにとつては、兄弟か少くとも従兄弟であられるかと思はれた。予め黒上先生をも知つてゐた僕でさへ徳島へ行つての始めの一、二ヶ月は御親戚に違ひないと思

つてゐた。さうでも考へなければ、普通には説明し切れない位、親しい御交りであつた。實際、はたから見
る眼も美しい程であつた。結核も、二期とか三期とか云ふ程度迄悪化してゐる梅木さんと床を並べ食卓を共
にし乍らその病に対する警戒の心など起されなかつた先生の態度には、僕など全く敬服してしまつて、真
の友情とはかくの如きものだと思つたのである。梅木さんの方も亦とてもよく氣のつく人であつたから、
食卓には必ず酒精綿をもつて来て自他共に手を消毒するやうにしてゐられた。梅木さんのゐられた所は撫養
の港に面した岡崎で二階の窓からは夫婦岩を正面に、やゝ左手に小鳴門をさしはさんで鳴門の土佐泊、右手
には青く霞む淡路島を眺めることが出来るのであつたが、我々は籐椅子をもちより窓に腰を下して、お二人
を中心に色々語り合つたのである。

僕は撫養町在の大津村の小学校に勤めることゝなり学校の宿直室に宿をとつたが、見知らぬ人々の間の生
活故、毎日自転車に乗つては岡崎の梅木さんの所を訪ねた。又日曜日等には先生を徳島にお訪ねしたが、先
生は何時も仕事の合間を見ては焼餅屋へ案内して下さつたり、眉山の見える御部屋でお話を聞かせて下さつ
たりした。

しかし五月の始頃かと思ふけれど、先生には御仕事の為上京せられたので後には梅木さんと僕とが先生の
お母様方の御許に残されたのである。先生の御上京を御見送することは淋しいことであつた。殊に病床に臥
す梅木さんにとつては堪へ難い苦痛であり、又それは先生をよく／＼判つてゐられることであつた。御上京
の時毎に、これが生きて会ふ最後ではないかと云ふ不安は、お二人の胸中を去来する暗雲であつた。然し道
の為に必死の精進をされる先生を空しく故郷の山河にお引止めすることはこれも亦君国に生命を捧げ給うた
梅木さんの到底忍び得ぬことであつたので、そのやうな不安、そのやうな願望は露程も口にされず、笑つて
先生を送られ、先生も亦無限なる惜別の御心に打克つて雄々しく旅立たれたのである。送る梅木さんの御胸

中送られる先生の御心を今にして思へば涙無きを得ない。乗合自動車の発着所迄送りに出られた梅木さん、後をふりかへり／＼行かれる先生、自動車の最後部に乘られ後の窓硝子越しに見えなくなる迄手をふつたり顔をしかめて見せたりせられた先生、ニコ／＼と微笑み乍ら「コよ、大事にな」と梅木さんの御養生を可望される先生に対し、「わかつとる」と点頭うなづかれ乍ら「テンも気をつけてな、××さんによろしく」とは明らか達の上に厚い誠心をおしおよばれる梅木さんの御挨拶。そのお姿は今に忘れられぬ。親しみ深い常とはりなきその御二人の御挨拶の蔭に秘められし御互の御想は果して如何ばかりのものであられたらう。

春から夏にかけての四国の自然は実に賑かである。空には白い雲がボカリ／＼と浮び、海は静かに島山は緑に、田には稲が青々と並び塩田では盛に塩水が撒かれてゐる。島では梨の手入が忙しく西瓜にも手がかゝる。ネーブルが下り坂になつたかと思ふと夏蜜柑がでる。毎日鯛やら鱒やら色々な魚がとれるし、若布やもづくも売りに出る。然し病と戦つてゐる梅木さんの健康は決して上々とは云へない。一瞬の暇をも気をゆるめず或は起き或は寝ね、或は身体を伸ばし或は屈げて病に対する抵抗を試みてはゐられたが思ふやうには回復しない。その淋しい梅木さんには先生からのお便りが何よりの悦びのやうであられた。先生は旅の道すがら、また同志との集ひの度毎に寄書を、そして御自身で時々長い御心を籠められたお便りを下さつたのである。梅木さんとは未対面の人にすらその人となりを話されて寄書をして貰つてゐられたのも、梅木さんの淋しい御心を少しにても賑かに力強くとの深い御思遣りからと拝察せられるのである。夏休みの近づくと頃、先生の御帰国を迎へて我々の悦びは如何程であつたらう。

夏は藤井、新井の諸兄を始めとし、樹治会や信和会の諸兄が見えて、先生の所も梅木さんの所も大変賑かであつた。何れの人々に対しても先生方が一様に打開けた温い御心で接せられ、お家の方々がまた誠心をこめておもてなし下さる様は実に感謝に堪へない所であつた。

先生のあの偉大な御事業の後には何時も先生の御母様御祖母様の絶大なる誠心の後押しがあつたと云ふことは忘れてはならぬことである。先生のお母様の梅木さんや我々に対する御介抱や御世話は全く親身も及ばぬやうな手厚いものであつて、最初の中は先生のお母様か梅木さんのお母様が判らぬ程であつた。

海の水が澄み風の爽かになつて来た九月には大勢のお客様も去つて梅木さんと先生とが静かにお話し合ひをなさる折が多くなられた。この頃の先生方のお話は主として新しい精神団体設立の御計画であつたやうである。そしてこの秋は先生も静かに徳島で勉強されたやうに寛えてゐる。僕も八月限りで代用教員を止めてゐたので、徳島の先生の所へも度々伺つて、原稿を拝見したり、図書館にお伴したり、中津峰や日和佐につれて行つて頂いたりした。先生はこの様な際にはよくふところ手をして歩かされた。その際のお話はとても無邪気なお話が多かつた。中津峰へ山越をして歩いて行つた時、先生は「重松君今何時だと思ひますか、時計を見ずに言つてごらん下さい」と云はれるので、僕は日影を見て「十時三十分位でせう」とお答へした。すると先生は「十時五分位だと思ひます」と云はれるので、時計を出して見たら、十時八分かであつた。それで「どうしてそんなによく判るのですか」と伺つたら「それや神通力ですよ、偉いでせう」等云つて笑はれたが、結局先生のお話によると朝御飯のをさまり工合でお判りになるのだと云ふことだつた。実際先生のお身体は鋭敏であられた。先生はよく神通力と云ふことを冗談に云はれたが、神様を拝む何とか云ふ老人の云ふことは本気で信じてゐられるやうであつた。しば／＼そこへ行つて梅木さんの病気の将来等聞かれ、その結果を梅木さんに話して元氣をつけてゐられた。然しこれは決して先生の眞の信仰に毫末の勢力をも有しないのであつて、先生の御家庭の素樸な宗教的な雰囲気と先生の子供らしい無邪気さと、先生の厚い御友情とを物語るものである。

年の暮に近く僕は帰京し、先生も少し後に御上京なさつたのであるが、新年早々に僕を見舞つた不幸、父

の死の際にも先生は、大岡山の僕の家を訪ねて下さったのであるが、夜分だったので見付からなくて一夜を近くの大岡山ハウスと云ふのに泊つて翌朝来て下さった。その時など「どうも文化的の宿かと思つたら、南京虫で閉口しました」と云つて笑つていらつしたが、これなども先生の雅氣と非常に深い御親切の例証であらう。

昭和四年の四月戦ひに力竭きた梅木さんは遂に再び起たれぬことになつた。後から伺へば先生は京都から御帰郷の途にあられたとのこと、その御心の中は我々には唯御推察申上げるより外ないのである。

四月二十八日の御便りに洩し給へる先生の御感懐を茲に記して先生の御心を偲び奉らう。

はらからとよばれし契りふかけれどこの世の縁のはかなかりしか

裏山の若葉の光仰ぎつゝも涙のおのづから湧きいづるかな

かなしくも雄々しくましましゝみいのちのあとをつたへむ共につとめて

先生が梅木さんの遺骨をもつて、梅木さんの御故郷松山に行かれた帰途に賜りたる六月二日のお便りは、涙なしには拝誦し得ない。

熊山の土あたらしき奥津城に涙おのづからわきいづるかな

夢にだにかたりあはんとねがへどもうつそみ我はせむすべもなし

はらからのかたりましましける故さとのその山河をみればかなしも

山々のみどりあらたにもゆれどもわがはらはかへりこぬかな

雄々しくもかなしくましましゝみいのちのあとをつがなむ残る我らは

謹んで思ふに先生と梅木さんとのこの厚い御交情は決して偶然のものではない。聖徳太子の大陸文化批判

総合の御偉業を、『三経義疏』に『日本書紀』に偲はれつゝ日本の思想信仰の純なる姿を究められて国民的信念に強く生き給ふ先生と、語学を真に活用し西洋哲学と自然科学に対する明敏なる理解に卓越せる梅木さんとの協力は、当に我が国の必要としたものであり、現在必要とするものである。梅木さんの念願せられる所は、先生の究明せらるゝ大御教を、うつしく此の現実日本の国土に実現せんとすることであつた。その意味に於て先生は梅木さんの実務的達見を必要とし、梅木さんはまた先生の潤れることのない信仰と思想批判の鋭い御眼を欠くことができなかったのである。

昭信会の設立については先生も随分考へられ、梅木さんとも實に念を入れた御相談のやうであつた。岡崎の梅木さんの所では夜更くる迄、そのお話がつきずにあつた。まことに祖國日本の運命を荷うて行くべき新しい精神団体には深い研究と強い信念を統べらるゝ黒上先生の人格的威力と凡てを博綜し現実の諸問題に於てその信念を実現せんとされる梅木大兄の実行力とを必要とすることは明らかである。この意味に於て昭信会の成立について先生と梅木さんが肝胆を砕かれたと云ふことは、有難い事実であり又忘れてならぬ事実である。先生が自らへり下られた御心は梅木さんに強き力を見出され、梅木さんがつきつめられた御心は、先生に永久の生命を見出され、この協力によつてまことの道の実現せらるべしと云ふ、御二方の切実な体験にこそ先生方の如何なる御消息にも見ゆる一つの信に、兄弟のむすびをなして相たすけて、道にはげまんとのねがひも生れ出で、つゝみかくすことなき童心も湧き出でたものと拝察されるのである。

——『伊都之男建』誌（昭和十年七月号）所載——

梅木さん——副島羊吉郎記——

昭和四年の春だつた。春の試験を終へて帰省の途中、高松の義兄の家に立ち寄つたので、撫養に居られる

梅木さんに一寸通知したらすぐ返事があつた。それには、

鳴戸灘この潮流る上つ辺に君はおはすかこの潮上に

彼の山を越えて彼方に雲深くたるゝ彼方に君ますらむか

この年も会ひたき心の止みがてに暇を作りて君よ来ませな

といふ歌が書いてあつた。飛んでも行き度かつたが、その時は故郷に年老いた母が一人淋しく待ち焦れてゐたので、致し方無く後髪を引かるゝ思ひで佐賀に帰つて行つた。然しそれから二週間たつて再び上京する時には、どうしても撫養を素通りすることが出来ず、高松から汽車で引田に出て、そこから自動車で春霞む瀬戸内海の海岸を辿つて撫養に向つた。梅木さんの家に着いたのは午後の四時頃であつたらう。家に入つて見ると誰も見えないので声を掛けると、二階がミシ／＼鳴つて梅木さん自ら降りて来られた。六尺に近い堂々たる体格にドテラをまとひ、何時もの如く裕然と歩を運んで来られた。予告してなかつたので、始めビツクリして居られたが、直ぐ大きくニツコリされて、張のある響のこもつた声で「やあ」と一声。梅木さんの「やあ」には実に魅力があつた。如何なる憂鬱も一度に吹き飛ばして愉快にしてくれる「やあ」であつた。この一声に僕は急に嬉しくなり、旅の疲も忘れて直ぐ靴をぬいで二階に上つた。

二階には梅木さんの親友名賀石さんが見えて居た。三人で火鉢を囲んで暫く話したが、名賀石さんは間もなく帰られたので、梅木さんは「一寸脊骨を延します」と言つて、フトンもかけず薄い敷布の上に大の字に寝られた。梅木さんは「人間の病氣は人間が立つて歩き出したため、内臓が下りその為め脊骨迄曲る所に原因がある」といふ説から、よく仰向きに寝て脊骨を延す事を実行されてゐたのである。寝乍ら梅木さんは一人で色々話された。

「高校生は余りに呑気でいかん……もつと緊張せねばならん……日本主義者はまだ腰が弱い……明日から

二人で玄米を炊いて食べようか……黒上さんに早く『三経義疏』の註を書いて貰ひたい……経済をやる人は聖徳太子と、その時代を大いに研究する必要がある……」（記録による）

口出しも出来ぬ程語られるので、体にさはりはせぬかと心配して注意すると、

「いやもうすつかり全快する自信がついた。此の分では本年中には上京出来るかも知れぬ。今日は名賀石君と海岸も散歩したし、今日程気分はいゝ日はない」

と迎も元氣であつた。そして尚も、昔徳島中学に阿部という羊羹の好きな数学の先生が居たが、授業時間によく和服の袖から羊羹を取り出してナイフで刻み「これは三角錐」と言つた風にナイフの先に突きさして「あむ」と口にはふりこんだことや、又能く出来る生徒には「お前は偉い」とその切端をやつたこと。それのみか時々生徒を連れて飲食店に行つて数学の授業を続けたといふが、それでも怠惰な生徒は一人も出ず、中には林鶴一氏の様な大数学者さへも出たなど話された。

そうして居る中に、傭のばあさんらしい人が、お湯が沸いたと知らせに來たので、梅木さんは湯上り一枚になつて降りて行かれた。この時残された言葉は永久に忘れられない。

「一寸入つて來ます。すぐです。五分」

この五分の後梅木さんの身上に世にも悲惨な不幸が起きて、梅木さんは降りて行つたまゝ、永久に上つて來られなかつたのである。湯に入られたのがいけなかつたのだつた。そのためメマヒがして、急いで出られると同時にひどい咯血が來て、そのまゝ台所の板敷の上に倒られたのである。

「大変／＼」と言ふ傭婆さんの声に驚いて下りて行つて見ると、その悲惨さは目もあてられぬ程、迎も書く事は出来ない。梅木さんは僕の顔を見て、

「愈々死ぬる時が來た」

「父に会ひたい。黒上さんとお母さんと三人に会ひたい」と申されたがしばらくして、

「なあに……えい頑張れ」と口を一文字に結んで戦はうとされた。やがて医者が見えると、

「先生！ 大咯血です！ 死んだと思つたらまだ生きてゐます」

「先生！ 随分永い間お世話になりました」

此の時まではまだ言葉に充分元気があつた。然し医者は言葉を禁じたので以後は一切口を開かれなかつた。

お父さんと黒上先生の御母さんは間も無く見えたけれども黒上先生は何時まで経つても御出にならなかつた。先生は丁度田所、市川、新井、河野の四兄と奈良方面を旅行中だつたのである。梅木さんはあらゆる手段を尽したに拘らず、遂に四月十三日午前一年頃息を引き取つてしまはれた。倒れられてから約八時間後である。

黒上先生のお母さんの手をしつかり握り乍ら死んで行かれた。先生のお母さんは梅木さんの一身に就いて、物心両方面に於いて、どれ位御世話下さつたか分らない。梅木さんも常々「お母さん」「お母さん」と呼んで居られた。早く両親に別れて、梅木家の養子となり、こゝでも又養母に死別して、まことに家庭的に恵まれぬ梅木さんだつたから、どれ位此の御親切が嬉しかつた事か。

思へば梅木さんと僕との交際は僅か一年に過ぎなかつた。お会ひしたのは前後三回であつた。始めて会つたのがその前年（昭和三年）の三月であつた。

四国巡礼に出かける途中、大倉邦彦氏にすゝめられて、始めて黒上先生を徳島に訪ねたのが縁の始まりである。先生が是非連れて行くと申されるので、旅装を取つたまゝ、袴もつけず、まるで呉服屋の番頭見た様な格好で出かけて行つた事を今でも覚えてゐる。梅木さんの名前は嘗て瑞穂会の会誌『朝風』で「南国の

風よ！早く梅木先輩を返せ！」という一文を見てから知つてゐた。これは好漢故依田貞三兄が書いた文だつたので、依田兄がかう慕ふ位だから余程偉い人だらうと、秘かに私淑してゐたのである。

撫養の岡崎の家に着いて、先生の後から二階に上つて行くと、八畳か十畳の広い部屋の真中に、天井に届きさうなザンギリ頭の大男が突立つて居た。寝巻の上から無造作に野球用らしいジャケツをひつかけて横向きに立つてゐた。それが梅木さんだつたのである。腕組してこちらをジロリと見られた姿は今も忘れない。その時は先の旅を急いだのですぐお暇したが「ロダンの言葉」を読んで貰つた事と、オリオン座とその伝説を聞かして貰つた事を覚えてゐる。

第二回目の面会はその年の夏であつた。この時は故新井君も一緒だつたが大部ゆつくり遊んで行つた。

海岸と一緒に散歩に行つた時、

「太陽は何故地平線近くでは大きく見えるか？」

「板を空中に投げるとどんなカーブを描くと思ふか？」

「夏と冬とで海の色が違ふのは如何なる理由か知つてゐるか？」

等質問されたが、一つとして満足な答は出来なかつたが、梅木さんの説明を聞いてゐると妙に、余り好きでない理科に興味を覚えてくるのだつた。梅木さんは、学校の優等生が法則は能く覚えて居ても、自然現象に就いて、それを少しも話し得ぬ事を非難し、教科書本位を排し、直接自然に接して目撃研究すべき事を強調された。梅木さんは又その事を自ら実行して居られた。撫養附近の地質、断層、及び鳴戸の潮流等々に就いて、自ら調査して居られたし、又自分の病氣は自分でなほすとして、ドイツの原書を取り寄せると共に、魚、蛙に解剖のメスを振つて居られた。そのみでない、趣味は実に多方面で、詩、歌、小説は言ふ迄もな
いが画、彫刻にまで手を延して居られたには、小生も驚いた次第である。梅木さんの部屋には、未完成のネン

ド彫刻が並べてあつた。又僕の手元には、図書教育に就いての「小論文」も残つてゐる。

然し梅木さんの最後の念願は日本を根本的に救ふ事にあつた。その為には教育界と経済界を根本的に改革すべきであると考へ、その対策に就いて真剣に考へて居られた。我々の「信和会」の名称も梅木さんの考案であつた。梅木さんは我々の会の重大性を認め、あれ程の病氣中に自ら我々の為めにペンを取つて、教育意見を寄せられた程である。この論文は今も大事に僕の手元に保存してある。経済に関しては、将来自ら研究して日本の経済困難を救ふ決心があつた様に思ふ。当時附近に起りつゝあつた藍田争議や小作争議などは逃さず調査し、学者はもつと實際問題に飛び込んでその欠陥を見極めねばならぬと力説して居られた。

梅木さんは何時思ひ出しても懐しい、慕はしい人である。梅木さんと向ひ合つて話して居ると、何時も楽しく面白く、少しのイヤ氣も不安も感じられなかつた。本当に太陽の様であつた。何時も明朗で、ユーモアに富み、而も天を衝く氣概があつた。黒上先生から承つた事であるが、梅木さんは「自分は平和な時代に生れたのが不幸だつた」ともらして居られたさうである。先生も確にさうだと言つて居られた。それでも梅木さんには敵といふ者は見当らなかつた。誰でも一度会へば崇拜者、味方となつた様である。

梅木さんには凡ての人を慈む大きい慈悲があつた。それ故人の喜びを真底から喜ぶ事の出来る人であつた。「共に是れ凡夫のみ」「群生と共に苦楽を同じうす」といふ事は梅木さんの生活に文字通り活かされて居た様に思ふ。黒上先生は「僕は信仰は近角先生から、思想は三井先生から、友情は梅木君から得た」と言はれて居た。黒上先生と梅木さんとの友情は実に美しいものであつた。この友情の始りにはこんなエピソードがある。

先生が東京に出て本郷の森川町に下宿して居られた頃、当時一高の野球の選手だつた梅木さんが同郷といふ事を聞いて訪ねて来られたが、その時梅木さんは一高が早大との試合に惨敗したので、ある一高生が早大

応援団に向つて「野球では負けたが、頭で来い」と言つたと言つて憤慨し「一高もあゝいふ風になつたらおしまひだ。野球の試合は飽くまで野球で戦はねばならぬ」と言はれたさうである。この一語が黒上先生の胸を強く打ち、それから梅木さんを「本当に偉い」と思はれ急速に親しくなられたさうである。

梅木さんに就いては、どれだけ書いても尽し得ない感があるが、この辺で一先づ止めることにする。

——『伊都之男建』誌（昭和十二年十月号）所載——

編者註　なほ黒上先生のことに関して、副島さんが「わが生涯のともし火」（黒上正一郎先生の思ひ出）と題し、

桑原暁一著『続日本精神史鈔』（国文研叢書第十一卷）の巻末に載せてをられるので御参照いただきたい。

(三) 「黒上君之碑」の「碑文」他

黒上正一郎先生の逝去を悼む新聞記事

左記は九月二十四日徳島毎日新聞に「聖徳太子研究の篤学の士　黒上正一郎氏逝去」と題し写真入りで掲げられたものである。

徳島の生んだ偉大なる篤学の士　黒上正一郎氏は逝いた。氏は明治三十三年徳島市船場町黒上家に生れ大正八年徳島商業を卒へ阿波商業銀行に入つて勤務したが、天資謹厳そのものゝ如く人格高潔若くして短歌に親しみまた親鸞上人を崇拜し劇務の間にあつてその研究深きものあり、この間京都大谷大学の井上右近、三井甲之、木村卯之、慶大蓑田胸喜、東京文理科大学教授松本彦次郎氏等に教を乞ふに及び、その指導を受けて聖

徳太子の研究に専念しあらゆる内外の書を読渉して太子の研究に於ては実に本邦その比を見ざるに至り、後年病弱の故をもつて阿波商を退きたるも研究に専ら没頭し、大正十五年東大教育学入澤宗寿博士と偶然会し意見を交換したるに博士はその篤学に驚嘆し、同年十月二十日招かれて東京帝大にて「聖徳太子の教育観」について講演、更に昭和二年十月二十日には「最澄と空海の教育観」昭和四年三月東大構内山上御殿にて「日本教育思想開展の意義に対する考察」を講演、また雑誌『日本及日本人』、『仏教研究』、『国語と国文学』等に屢々執筆遂に氏の研究の深蘊なるに敬慕して一高に昭信会、東京高師には信和会なる研究団体生れ氏を中心に仰いで更に祖国日本の研究を深め、氏また後進を導くに懇切純情溢るゝものあり病軀を忘れて在京、近年は两会指導の信念の為に生きつゝあつたかの感があつたが、偶々昨年一高在学中英才を抱きて逝ける友人梅木氏の追悼会が東京に於て営まれたる頃より漸く病篤く、爾来帰郷して自邸に専ら若林、大久保両博士の診療を受け静養中の所、漸次重態となり遂に二十一日午前二時危篤に陥り同八時二十五分長逝した。享年僅かに三十有一得難き偉才を若くして逝かしめられたるもその在世の大業は燦として耀やき、曩に昭信会同人の手によつて仮に出版されたる研究の如き後代に伝ふべき唯一のものである。云々

——『原理日本』誌（昭和五年十月号）所載——

「黒上君之碑」

(徳島市佐古清水寺境内にある黒上家墓所の中に建てられてある)

(原漢文体を書き下し文に改む)

あゝ、黒上君逝けり。何ぞ天、才を奪ふの早きや。君、名は正一郎、徳島市西船場街の人。考(父親)を益二と曰ふ。母は三木氏。少くして穎悟(よび)学を好む。初め徳島商業学校の業を畢へ、阿波商業銀行に入る。是より先、君自ら感ずる所有りて仏道に志す。学匠(学者)井貝智見師に就きて諸經典を修む。師、徳高く識博く、人に可として許すこと少く、独り君の操守の堅きを喜び、以て大成を期す。既にして銀行を辞し、専心学に従ひ尤も 聖徳太子を尊信し、其の学を講明し、教へを興し道を弘むるを以て志と為し、刻苦研鑽、積年(つ)倦まず。東京帝国大文学教授入澤博士宗寿の、事を以て来遊するに会す。君訪ねて説を質す。博士其の篤学に感じ、遂に君を大学に招く。其の蘊蓄する所を講述すること数次、造詣の深き、問前人未発の見有り。聴く者驚嘆す。君の名大いに著はる。人言ふ、太子の学は君を推して第一と為すと。松本彦次郎・三井甲之・井上右近・蓑田胸喜の



黒上家御墓所と傍らの石碑 (小田村寅二郎氏参拝中)

諸先輩、皆君と交はるを悦び、而して諸生徳を慕ふ者相謀りて其の教導を受く。其の第一高等学校に在るは昭信会と曰ひ、東京高等師範学校に在るは信和会と曰ふ。君すなはち之を太子の遺教に稽へ、又、之を明治天皇の大訓に照らし、誘掖懇到(懇切にいねいに導き)躬行(自ら先に立つて行ひ)之を率ゐる。諸生心服して視ること慈父の如しと云ふ。昭和五年九月二十一日病を以て没す。享年僅かに三十一。甲ふ者皆曰く惜しい哉此の篤学の士を失ふと。佐古清水寺に葬る。未だ娶らず。君、平生知を近角常觀(ちかくじやうくわん)師に受く。師諡を命じて敬信正法居士と曰ふ。人と為り温雅にして、恭儉長に事へ、友と交りて藹然(あいでん)（氣持が和らぎおだやかなさま）として情誼有り。体本強健ならざれども学を好み、道を求むるの篤きこと、数寢食を廢す。友人或は其の生を傷けんことを恐れ、勸むるに少しく休養するを以てするも、君意に介せず。遂に病を獲て起たず。学に殉ぜりと謂ふ可し。若し之に仮すに年を以てせば、則ち其の成る所必ず更に名を世に赫然(さかんなきま)とするもの有らん。何ぞ、天、才を妬むの酷なるや。余君と交りて親し。このごろ碑を建つるの挙有り。乃ち為に行実を略叙すること此の如し。其の学説及び著書の詳は、別に梅木正衛翁の撰述する所に具ふ。銘に曰く、

天、才学を授く、何ぞ命の長からざる。志業卓たる(すぐれたこと)有り、其人亡びず。

昭和八年癸酉四月

対南岡本由撰併びに書

「黒上正一郎先生のうたと消息」

昭和五十七年八月一日初版

定価八〇〇円
〒二〇〇円

(編者) 長内俊平

(発行所) 社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

東京都中央区銀座七―一〇―一八 柳瀬ビル
電話 〇三―五七二―一五二六、七番

振替口座 東京七―六〇五〇七番

(印刷所) 奥村印刷株式会社

東京都千代田区西神田一―一―四

